

令和元年度

# 野洲市埋蔵文化財調査概要報告書

令和元年度

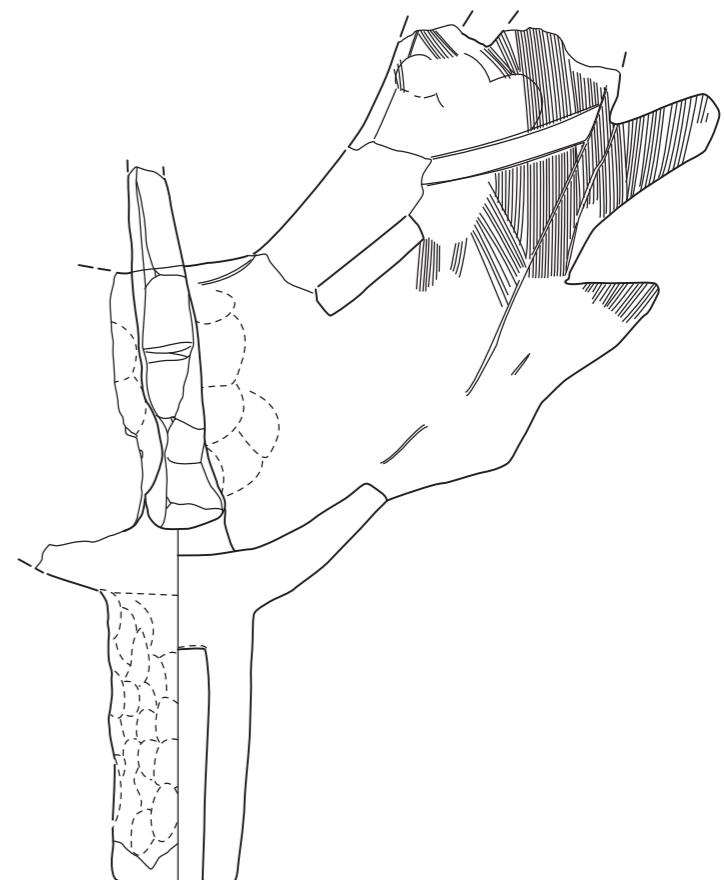
野洲市埋蔵文化財調査概要報告書

二〇二〇年三月

滋賀県野洲市教育委員会

2020年3月

滋賀県野洲市教育委員会



令和元年度  
野洲市埋蔵文化財調査概要報告書

2020年3月

滋賀県野洲市教育委員会



# 序 文

野洲市は、琵琶湖の南東側に位置し、野洲川と三上山に代表される自然環境豊かな市です。考古学上では、大岩山出土の24個の銅鐸をはじめ、大岩山古墳群や西河原遺跡群出土木簡などが広く知られ、ほかにも貴重な遺跡が市内各地に点在しています。

本書は、平成30年度から平成31年度にかけて実施した野洲市の文化財調査の概要報告書です。本報告書に所収する主な調査成果では、小篠原遺跡において、以前に発見されていた小篠原1号墳の周濠の続きが検出されました。そして、その中から形象埴輪を含む多くの埴輪が出土したこと、小篠原1号墳の全容解明が一步前進することとなりました。こうした成果を収録した本書が、郷土の歴史と文化財への理解に寄与できれば幸いと存じます。

なお、調査を実施するにあたりまして、多くの方々にご協力をいただきました。お世話になった皆様方に厚くお礼を申し上げますとともに、本市の文化財保護行政に今後ともご理解を賜りますようお願い申し上げます。

令和2年3月

野洲市教育委員会

教育長 西 村 健

## 例 言・凡 例

1. 本書は、平成 30 年度から平成 31 年度にかけて実施した、野洲市内の埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2. 調査は野洲市教育委員会文化財保護課が実施した。調査の体制は以下のとおりである。

平成 30 年度

教育長 西村 健  
教育部長 吉川 武克 教育部次長 杉本 源造  
文化財保護課長 進藤 武 課長補佐 河合 順之 専門員 福永 清治  
技 師 鈴木 茂 技 師 井上 竜也 技 師 岡山 仁美  
調査員 花田 勝弘（平成 30 年 6 月 1 日～）

平成 31 年度

教育長 西村 健  
教育部長 杉本 源造 教育部次長 川端 美香  
教育部次長兼文化財保護課長 進藤 武 課長補佐 河合 順之  
専門員 福永 清治 技 師 鈴木 茂 技 師 井上 竜也  
技 師 岡山 仁美 調査員 花田 勝弘

3. 本書の執筆は、調査補助員の協力を得て、文末に記した担当者がおこなった。

編集は課員の協力のもと井上竜也がおこなった。

4. 現地調査における基準方位は、特に設定しない限り磁北を示す。

5. 標高は、野洲市公共下水道台帳図の水準を基準としている。

6. 遺構の表示記号は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の略号を準用した。

7. 遺跡名や遺跡範囲については、『野洲市遺跡地図』（野洲市教育委員会 平成 29 年 11 月 1 日改訂）による。

8. 土色は、「新版標準土色帖」（1993 年版）などを参考にした。

9. 出土した遺物および記録などは、野洲市教育委員会で保管している。

10. 現地発掘調査および整理作業は、下記の方々の参加・協力を得た。

前田博美 山崎 馨 吉岡 恵 大黒康弘 武富みゆき 松下嘉暢 中川九英  
木村美優 公益社団法人野洲市シルバー人材センター

# 目 次

## 序 文

## 例言・凡例

## 目 次

第 1 章	十八田遺跡 野洲市野洲字浅田 1725 番地ほか	1
第 2 章	小篠原遺跡 野洲市小篠原字平塚 2120 番地 7	19
第 3 章	小篠原遺跡 野洲市小篠原字下池田 2081 番 1	34
第 4 章	吉地薬師堂遺跡 野洲市吉地字二丁目 1312 番地 4	65
第 5 章	夕日ヶ丘北遺跡 野洲市大篠原字石佛 951 番地ほか	72
第 6 章	下々塚遺跡 野洲市小篠原字大橋 1089 番地 2 ほか	79
第 7 章	大篠原西遺跡 野洲市大篠原字出口 1610 番地 11	83
第 8 章	吉地薬師堂遺跡 野洲市吉地字二丁目 1244 番地	97
第 9 章	中畑・古里遺跡 野洲市行畑字高道下 799 番地	107



# 第1章 じゅうはちだ 遺跡

**調査地** 野洲市野洲字浅田 1725番地、1726番地、1727番地、1728番地、1728番地1

**調査原因** 駐車場造成

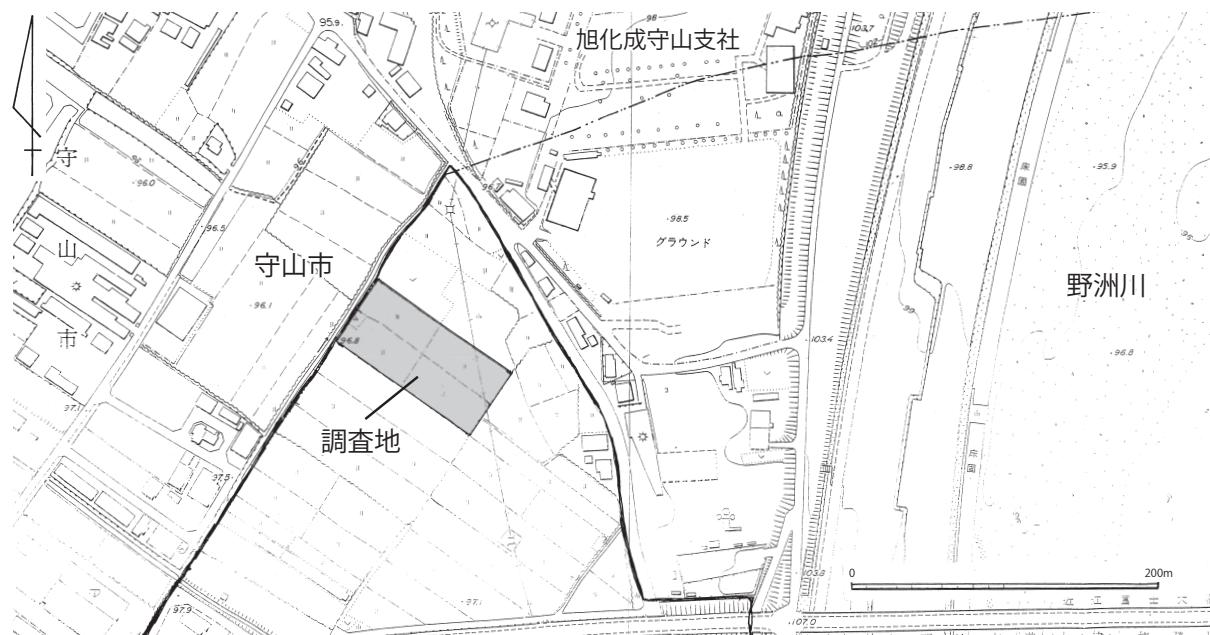
**調査期間** 平成30年7月2日～平成30年7月24日

十八田遺跡は野洲川の左岸に位置し、守山市と隣接している。十八田遺跡のこれまでの調査結果を外観すると、現在の長府製作所を中心に、西・南・東の3地域に大別できる。長府製作所の西域は、弥生時代中期末に掘削された2条の環濠とその外側に竪穴住居と方形周溝墓が各1基検出されており、守山市二ノ畦・横沈遺跡へつなぐ環濠集落の南東部にあたる。長府製作所を含む南域からは、古墳時代の竪穴住居が20棟以上検出されており、古墳時代集落の中心部を構成する。東域では、主に弥生時代後期から古墳時代にかけての方形周溝墓群が溝を共有しながら列状に連なって検出されており、墓域を形成する。

今回の調査地である野洲市野洲字浅田1725番地外は、遺跡の北端にあたり、調査地の北側は守山市播磨田東遺跡になる。播磨田東遺跡も主体は、弥生時代中期末から古墳時代前期にかけての遺跡で、前方後方形低墳丘墓や玉つくり工房なども発見され、本調査地においても弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構・遺物が得られるものと予測された。

既往調査は、旭化成工業株式会社の駐車場造成に先立つ調査であり、調査期間は平成8年5月27日～8月2日、平成9年1月8日～3月31日、平成9年4月9日～5月23日である。調査では、調査区5～調査区7までに溝が検出されている。竪穴住居は、野洲川に沿って北側に集中しており、微高地上に立地している。

このうち、調査区1で検出した2棟の竪穴住居と調査区4で検出された4棟の住居は、弥生時代終末から須恵器を伴わない古墳時代前期を中心とするものとされる、古墳時代前期の集落は、竪穴住居数棟に1棟の割合で掘立柱建物や土坑を伴うものである。



第1図 十八田遺跡調査区

調査区の西側は守山市に続き、氾濫原のため遺構の広がりをつかめなかつたが、当該地が弥生時代後期から古墳時代前期にかけて集落を構成していることが明らかになった。北西約150mの地点で行われた守山市播磨田東遺跡の調査では前方後方形周溝墓が検出されている。

**調査概要** 調査地の北側隣接地は、平成8年5月～平成9年5月に既存駐車場の発掘調査を実施した。その結果、竪穴住居7棟、溝群を検出した。

今回の調査は、駐車場を南側に広げる計画に伴い、開発に伴うL字型擁壁の部分の本発掘調査である。1.4mの幅で200m前後の調査区である。便宜的に、西トレント（琵琶湖側）、南トレント、東トレント（野洲川橋側）の順番となる。合計7本のトレントとなる。南トレントは、長さ一町程ある。

#### 東トレント（T-1・T-2）

幅1.4mの幅で60m前後の調査区である。掘削深さは、計画高さが現地表下-0.8mの掘削計画であり、この深さまで掘り下げた。遺構面は現地表下-0.8～-0.85mで検出され、土坑・溝等が検出された。

基本層序は、上層より第1層黒灰色土（耕土）、第2層黄茶褐色土（床土）、第3層灰褐色砂質土、第4層黄灰色粘質土、第5層黄灰色粘質土、第6層黄褐色粘土（マンガンを含む）となり、黄褐色粘土上面が遺構面となる。遺構面は、マンガンの凝縮が認められる。遺構面は、93.3m前後のレベル高となる。遺構は、遺構面の平面検出を行い、部分的に深さを確認するサブトレントを設定した。

遺構は、直径0.3mの円形ピットと浅い溝と土坑2箇所検出した。また、現代の野っぽが検出された。

#### 南トレント（T-3～T-6）

幅1.4mの幅で60m前後の調査区である。掘削深度は、計画高さが現地表下-0.7m（西側）と-0.8m（東側）の掘削計画であり、この深さまで掘り下げた。遺構面まで達しないため、遺構は確認できなかった。

基本層序は、上層より第1層黒灰色土（耕土）、第2層灰褐色砂質土、第3層黄灰色粘質土、第4層黄灰色粘質土、第5層黄褐色粘土（マンガンを含む）となり、黄褐色粘土上面が遺構面となる。

T-6 検出された遺構は、中央部東側で竪穴状の土坑で幅0.7×6.5mが確認された。深さは0.6mを測り、壁が垂直を呈す。おそらく、方形住居と推察される。埋土は、暗茶褐色土である。溝は、西側より、溝1・溝2・溝3と記している。方向は磁北方向で野洲川と平行する。溝1は、幅3mで深さ0.4mを測り、埋土は、暗茶褐色土である。溝2は、幅1mで深さ0.55mを測り、埋土は、暗茶褐色土である。溝3は、幅0.3mで深さ0.3mを測り、埋土は、暗茶褐色土である。溝4は、幅1.7mで深さ0.3mを測り、埋土は、暗茶褐色土である。

#### 西トレント（T-7）

幅1.4mの幅で60m前後の調査区である。深さは、計画高さが現地表下-0.7mの掘削計画であり、この深さまで掘り下げたが、遺構面まで達せず、遺構は確認できなかった。

基本層序は、上層より第1層黒灰色土（耕土）、第2層灰褐色砂質土、第3層黄灰色粘質土、第4層黄灰色粘質土、第5層黄褐色粘土（マンガンを含む）となり、黄褐色粘土上面が遺

構面となる。遺構面は、マンガンの凝縮が認められる。遺構面は、93m 前後のレベル高となる。

溝 1 は、幅 2.7m で深さ 0.2m を測り、埋土は、暗茶褐色土である。溝 2 は、幅 0.3m で深さ 0.2m を測り、埋土は、暗茶褐色土である。溝 3 は、幅 0.7m で深さ 0.25m を測り、埋土は、暗茶褐色土である。落ち込み 1 は、幅 5m で深さ 0.25m を図り、埋土は暗茶褐色土である。土坑 1 は、幅 1.5m 以上で、深さ 0.3m のもので、埋土は暗茶褐色土である。ピットは、直径 0.25m の円形を呈している。

**まとめ** 調査の結果、幅 1.4 m で 230m 前後の擁壁部分を対象に、現地表下 -0.7 ~ 0.8 m の深さで、遺構検出を行った。この内、T-1 トレンチから T-5 トレンチは、掘削高が現地表下 0.7 m であり、数箇所で遺構面を確認するサブトレンチを入れ、遺構面を確認した。

その結果、東・南トレンチで土坑・溝等が検出された。全体的には、5,000m<sup>2</sup>の一部で、擁壁部分に調査区が限られており、不明な点が多い。

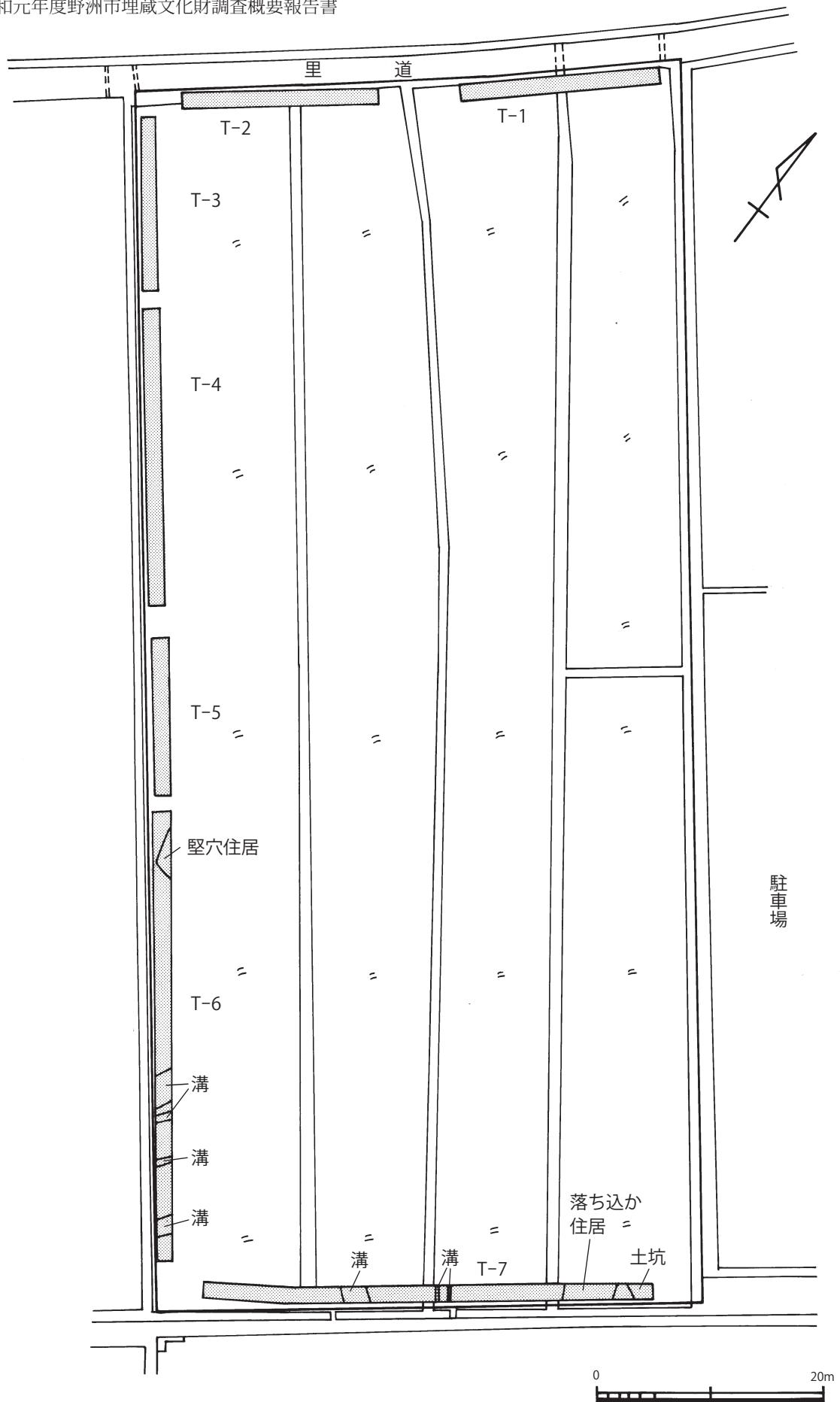
出土遺物は、土師器の甕片が出土した。周辺の調査結果を参考にすると、古墳時代前期ごろのものか。

周辺地域では、里道を挟んで守山市側では弥生時代中期の方形周溝墓 2 基、弥生時代中期から古墳時代初頭の掘立柱建物 5 棟など発見されている。

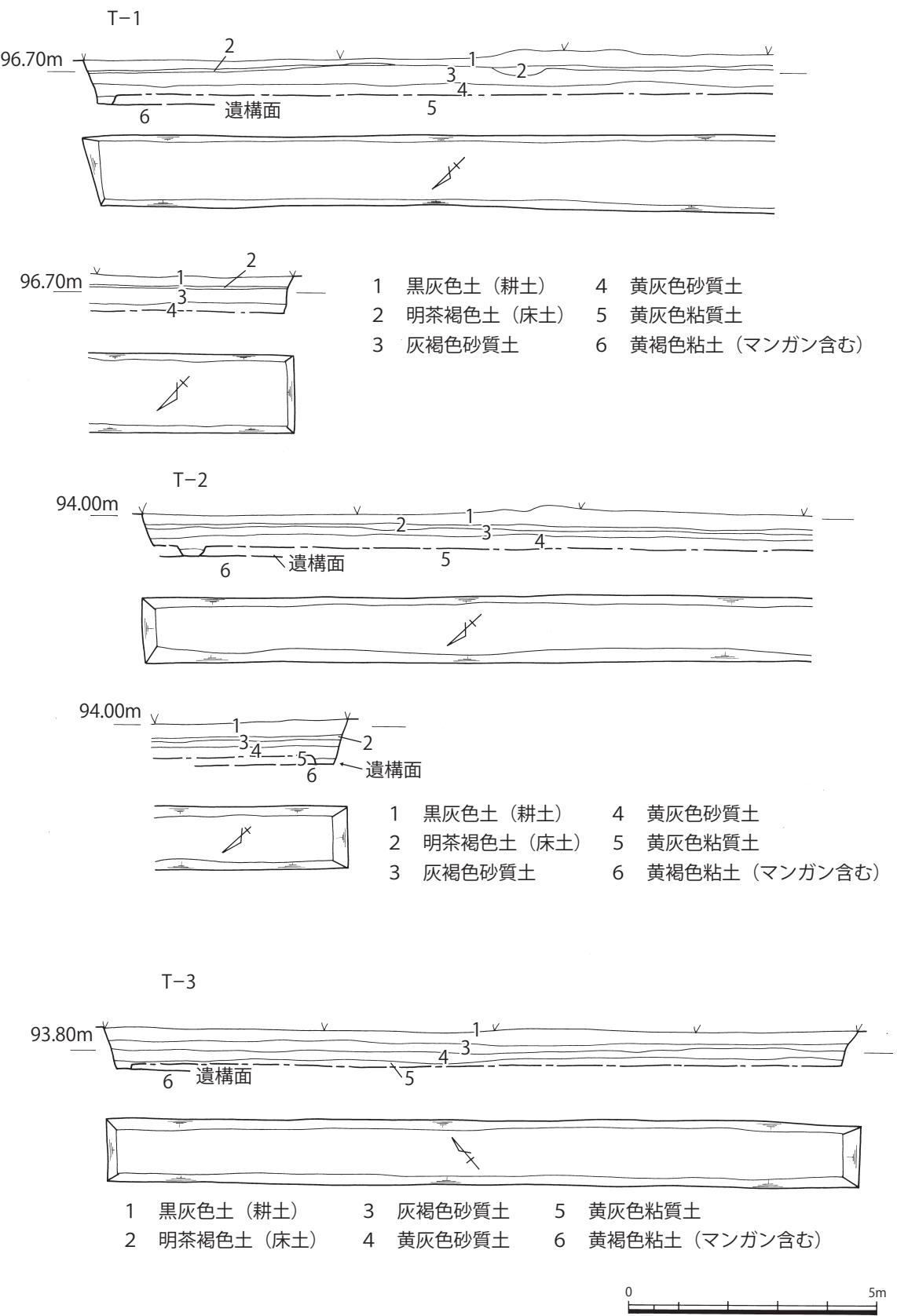
西側は、駐車場建設に伴い、2008 年 5 月に試掘調査が行われ、第 2 調査区で遺構が検出された。遺構面の深さは、現地表 -0.8m である。今回の調査区の成果とも一致した。

このように、野洲川の微高地は、起伏があるが高い部分に集落・墓地が営まれ、低い部分に水田に伴う溝群が配置されるようである。水田跡は確認しづらく見つかるることは多くない。(花田)

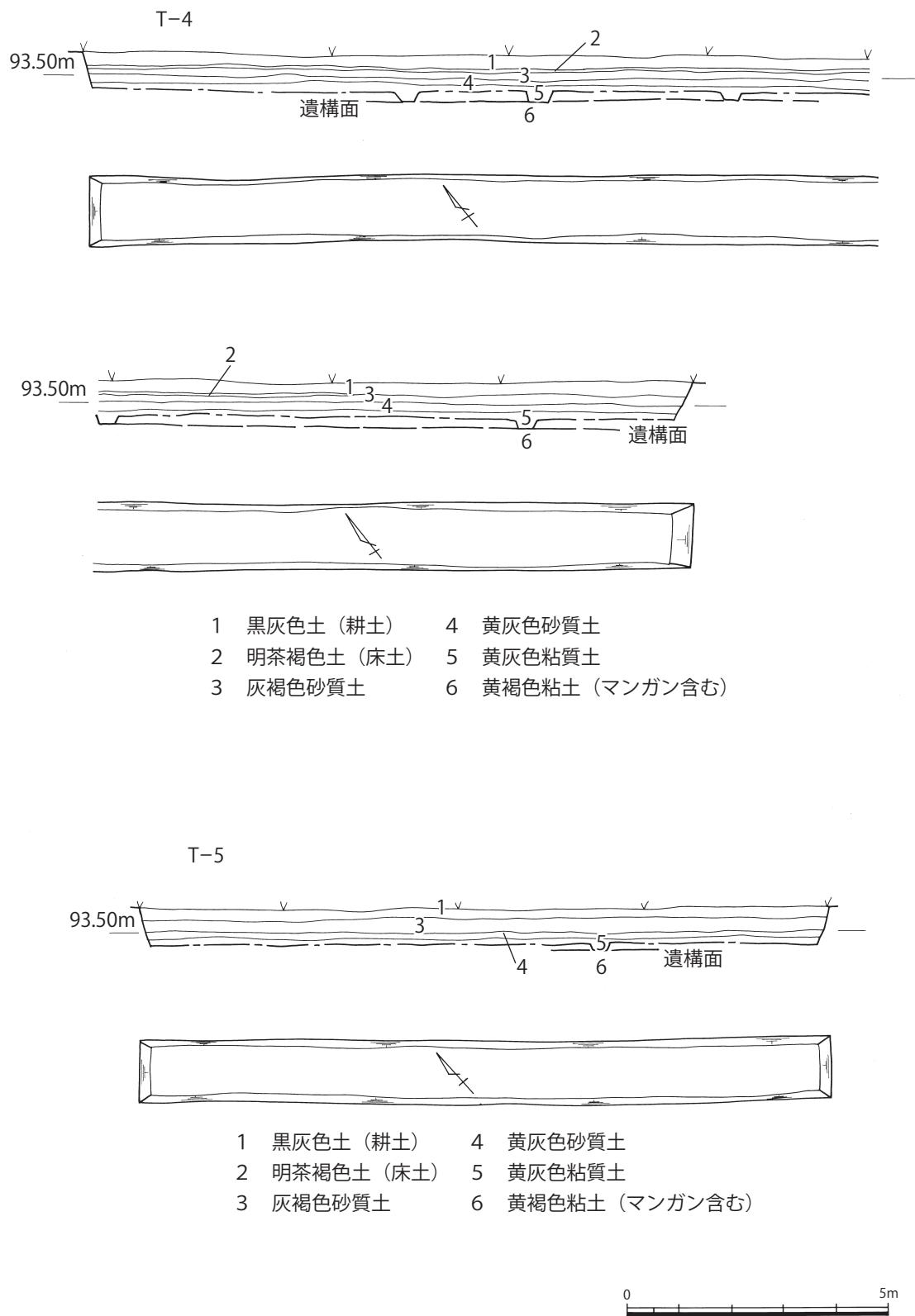
トレンチ名	調査区	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺構面
T-1	幅 1.4 m × 18.2 m	25.48	遺構面に至らず	93.00 m
T-2	幅 1.4 m × 18.0 m	25.20	遺構面に至らず	93.00 m
T-3	幅 1.4 m × 15.6 m	21.84	遺構面に至らず	93.00 m
T-4	幅 1.4 m × 27.4 m	38.36	遺構面に至らず	93.10 m
T-5	幅 1.4 m × 13.8 m	19.32	遺構面に至らず	93.10 m
T-6	幅 1.4 m × 39.4 m	55.16	竪穴住居、溝、土坑	93.30 m
T-7	幅 1.4 m × 42.4 m	59.36	溝、土坑	93.30 m
合計		244.72		



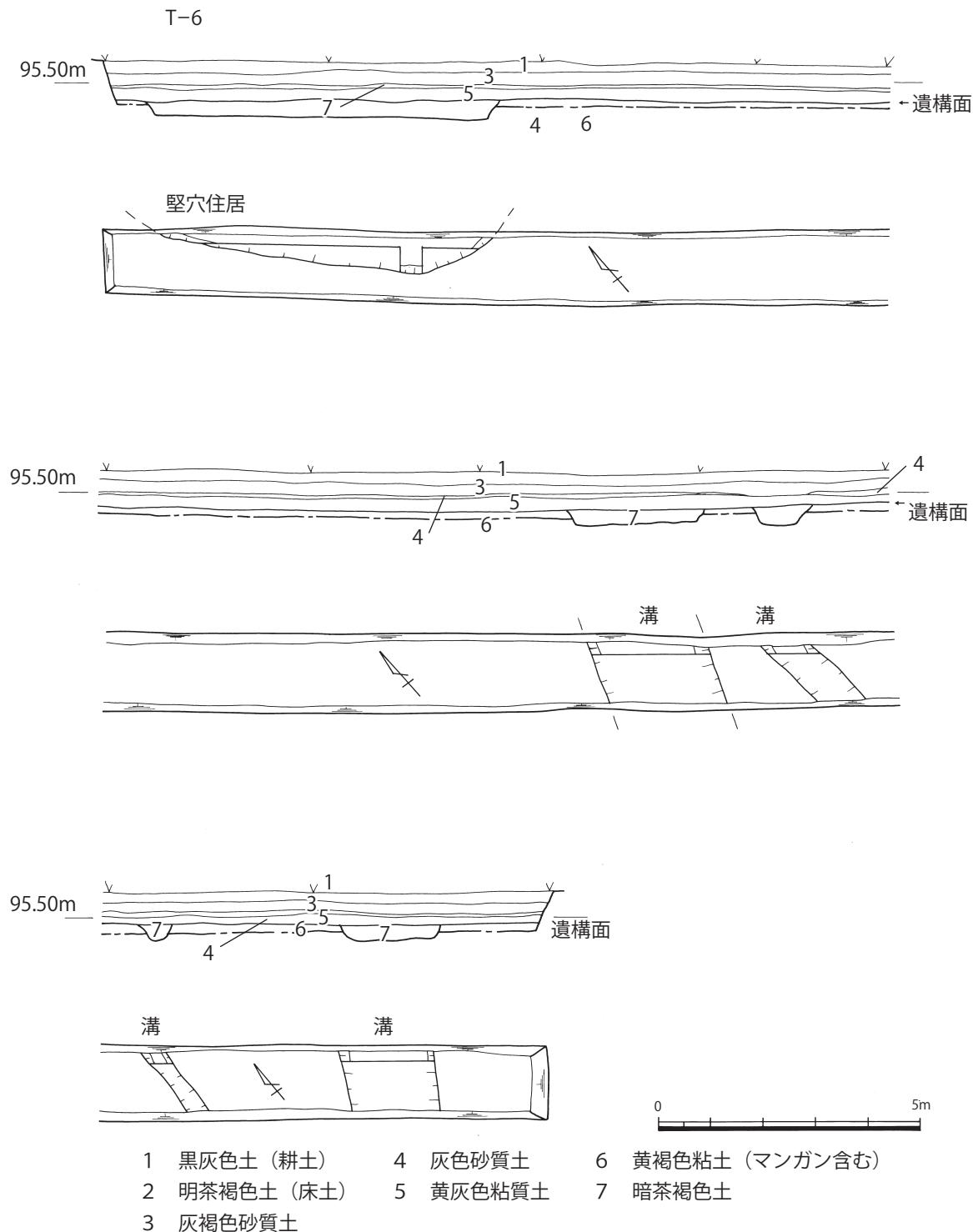
第2図 調査区配置図



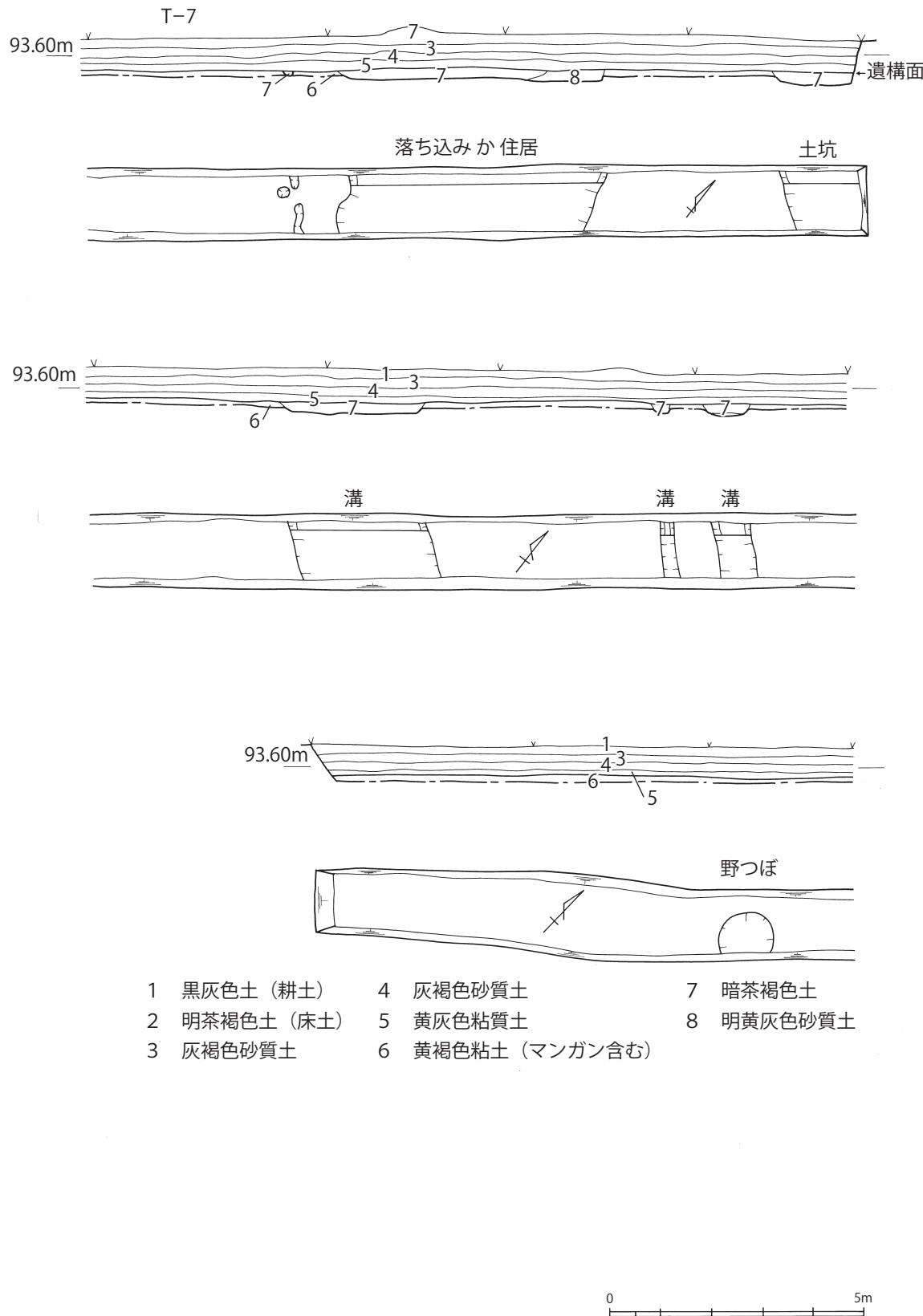
第3図 調査区平面図・断面図 (T-1、T-2、T-3)



第4図 調査区平面図・断面図 (T-4、T-5)



第5図 調査区平面図・断面図 (T-6)



第6図 調査区平面図・断面図 (T-7)



西 T-1 トレンチ



西 T-1 トレンチ



西 T-2 トレンチ



西 T-2 トレンチ



南 T-3 トレンチ



南 T-3 トレンチ



南 T-4 トレンチ



南 T-4 トレンチ



南 T-5 トレンチ



南 T-5 トレンチ



南 T-6 トレンチ



南 T-6 トレンチ



南 T-6 トレンチ（豎穴住居）



南 T-6 トレンチ（溝群）



南 T-7 トレンチ（溝）



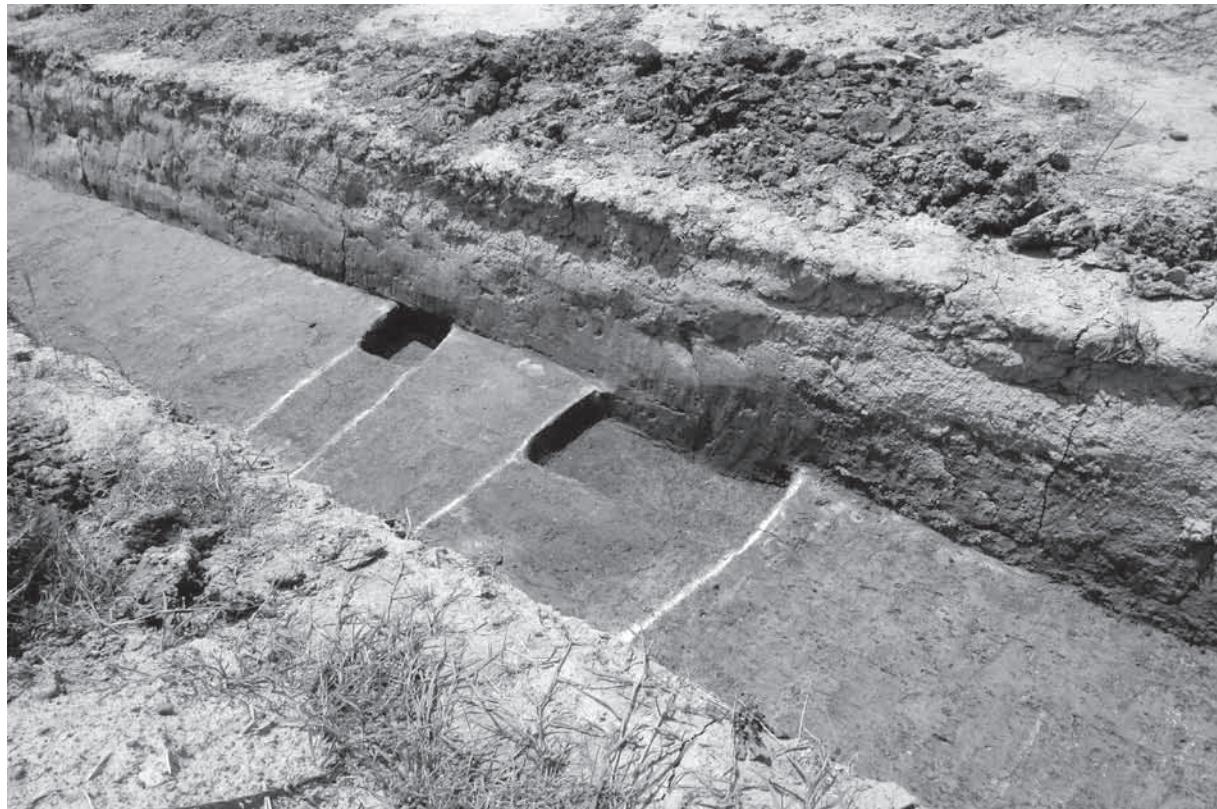
南 T-7 トレンチ（溝）



南 T-7 トレンチ（溝）



南 T-7 トレンチ（ピット・土坑）



南 T-7 トレンチ（溝）



南 T-7 トレンチ（土坑）

## 第2章 小篠原遺跡

**調査地** 野洲市小篠原字平塚 2120 番地 7  
ひらつか

**調査原因** 店舗建設

**調査期間** 平成 30 年 8 月 1 日～9 月 13 日

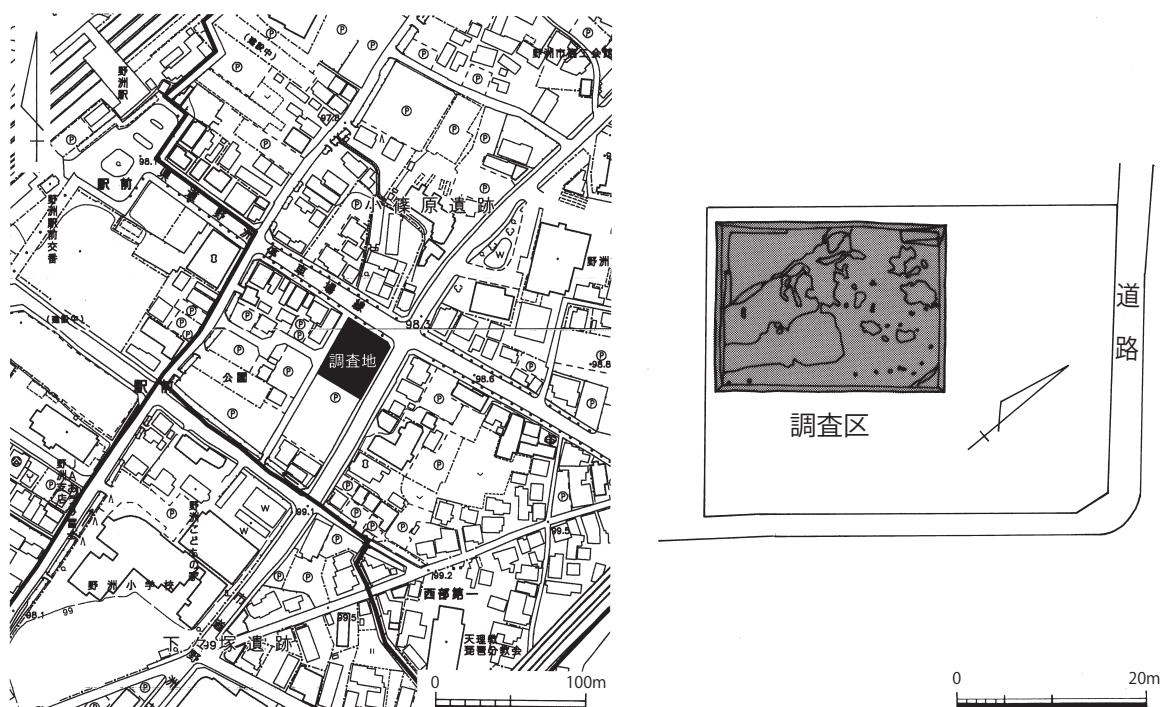
**調査経過** 小篠原遺跡は、野洲市域のほぼ中央付近に位置し、範囲は東西約 1.2km、南北約 1 km である。縄文時代から近世にかけての複合遺跡で、遺跡南西部の野洲小学校用地では縄文時代晩期の土坑墓が、遺跡北東部の桜生新興住宅地では弥生時代後期の土坑墓が検出されているほか、前方後円墳である林ノ腰古墳を始めとする古墳や、古代の掘立柱建物跡等も検出されており、野洲市内において最も遺構密度が高い遺跡であるといえる。

今回の調査は、銀行の店舗建設に先立って実施したものである。平成 30 年 5 月 31 日に埋蔵文化財発掘の届出を受理し、同年 6 月 25 日・26 日の 2 日間にわたって試掘調査を行った結果、遺構が検出されたため、店舗建設部分に調査区を設定し、本発掘調査を実施することとなった。調査地の敷地面積は 1393.21m<sup>2</sup>、設定した調査区は 1箇所、面積は 437.4m<sup>2</sup> (24.3m × 18m) である。

**基本層序** 地表面下約 50cm までは盛土で、次に赤灰色シルト、灰黄褐色シルト、オリーブ色シルト、黒褐色シルトが存在する。その下の灰黄褐色粘土混じり細砂が地山である。

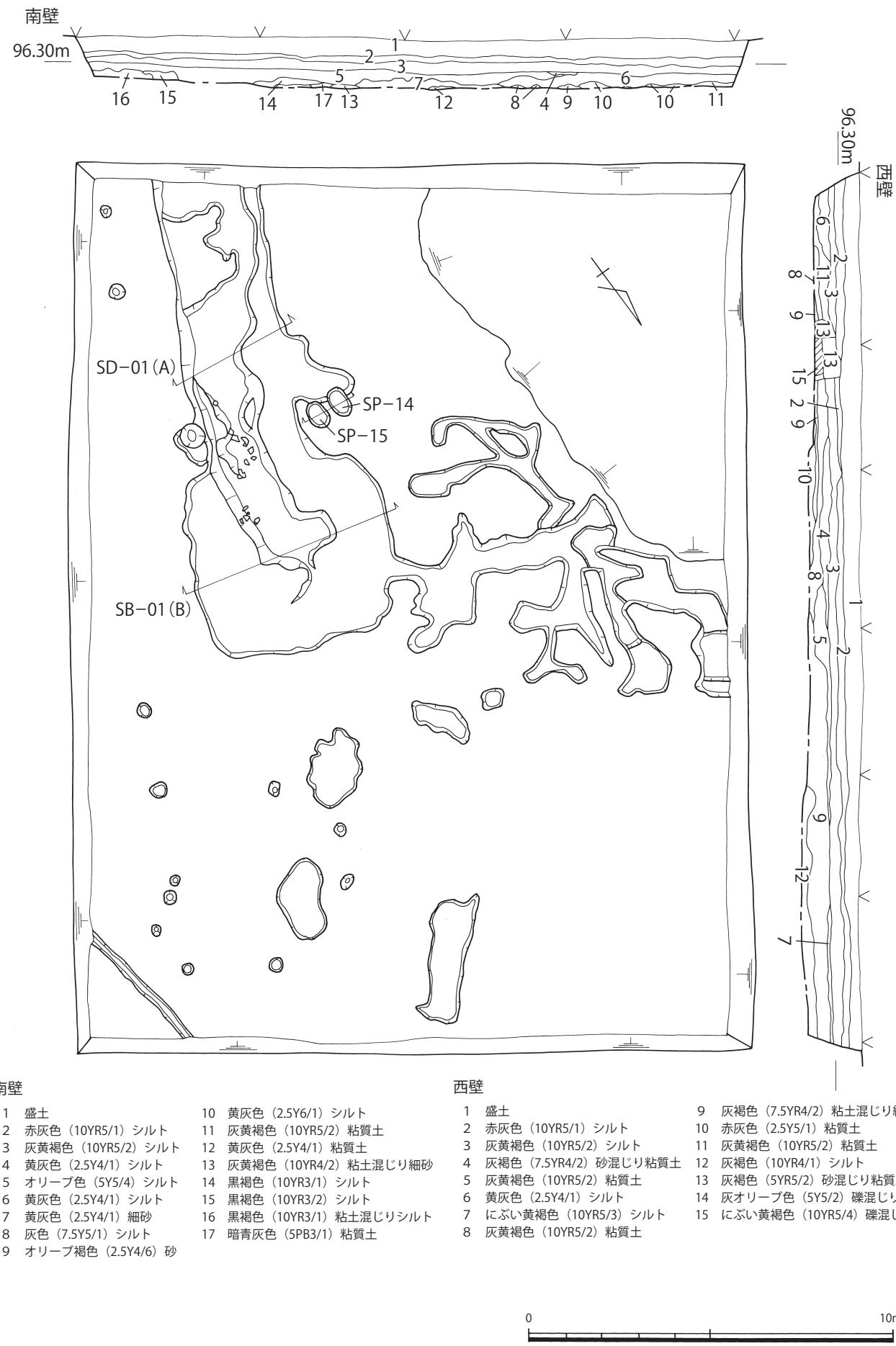
**遺構** 流路状遺構 (SD01) とピット群 (SP01～18)、溝 (SD02)、落込みがある。

**SD01** 調査区南東にあり、長さ約 12.5m、北側最大幅 5.5m、南側最大幅約 3.0m で、南側が細く北側にかけて広がる。調査区中央付近で途切れているが、そこから長さ 1 m、幅 50cm の溝が西に向かって派生し、さらに幅約 2.5m に広がって延びている。この西側部分は數

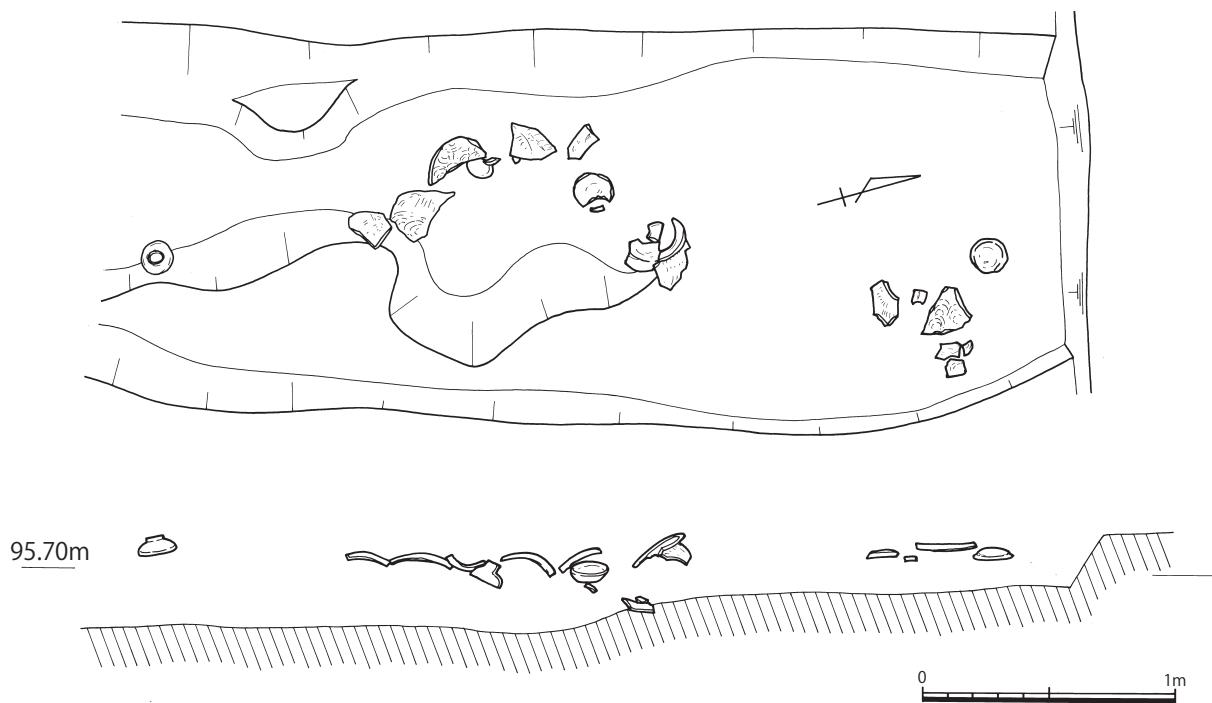


第1図 調査地位置図・調査区配置図

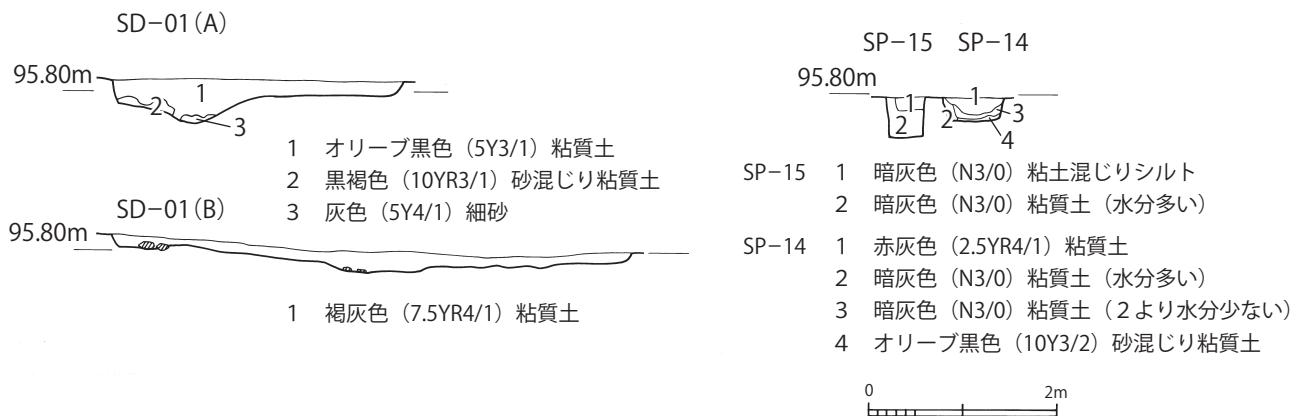
令和元年度野洲市埋蔵文化財調査概要報告書



第2図 調査区平面図・周壁土層断面図



第3図 SD01 遺物出土状況図・立面図



第4図 遺構断面図 (SD01(A・B) SP14・15)

本に枝分かれして網目状を呈しているが、掘削した結果、浅いところでは深さ 10cm に満たないところがあり、そうした浅い箇所から遺物は出土しなかった。一方、東側は調査区南側下端から測って 3m 付近から 7.5m に渡って中央部分が大きく落ち込み、断面は南側で V 字状、北側で U 字状を呈する。埋土はほとんどがオリーブ色シルトで、中央落込みの底に近い部分のみ褐灰色細砂である。このオリーブ色シルト層から、多くの土器が出土している。周壁の堆積を観察すると、オリーブ色シルトは 18 ~ 34cm 程度の厚みで調査区のほぼ全体に堆積しており、SD01 の埋土に相当する部分以外からも土器が出土している。したがって、この層は地山上へ一気に堆積したものと考えられる。なお、本来の遺構面は南西壁において SD01 の東側に見られる黒褐色シルト層と考えられるが、この層は遺構埋土であるオリーブ色シルト層と肉眼では判別しづらいため、あえて下層の灰黄褐色粘土混じり細砂まで掘削した。そのため、SD01 は現状より 20cm 程度深かったようで、西側の網

目状部分も深い部分が残存したものとも考えられる。調査区北東部では深さ 10cmに満たない不整形の土坑を数基検出しており、これらも同様と考えられる。

**ピット** 16基検出したが、うち 3 基(SP14～SP16)は SD01 内に存在する。深さは、SP14 は約 25cm、SP15 は約 40cm で、SP16 は途中までしか掘削していないが、40cm を超えるものと考えられる。遺物は SP14 から少量の土師器片が出土したのみである。このうち、SP17 には柱穴の痕跡が見られる。SP01～SP13 はいずれも浅く、深さは 20cm に満たないが、前述したとおり、本来の遺構面は 1 層上の黒褐色シルト層と考えられるため、もう 20cm 程度は深かった可能性が高い。このうち、SP02 のみ柱の痕跡が認められた。遺物が出土したのは 3 基である。SP01、SP02 からは土師器片が出土しているが、小片であるため時期などの特定はできなかった。SP08 からは近世のものと考えられる平瓦片が出土している。なお、これらのピットは散在しており、建物等を復元することはできなかった。

**SD02** 調査区の北東端に位置し、主軸を南北に取る。幅 30～40cm の素掘溝で、遺物は出土していない。

**落込み** 調査区南西部に存在し、西側の調査区外まで広がっているようである。埋土は黄灰色シルトで、その下にシルトや粘質土層があり、さらにその下は砂礫層である。埋土の種類や堆積状況から、洪水の痕跡である可能性が高い。遺物は SD01 に比較すると少ないが、ほぼ完形の土師皿や黒色土器碗などが出土地していている。出土遺物には時期差が認められるが、近江型黒色土器碗などの存在から、本遺構の形成時期の下限は中世であると考えられる。

**遺物** 遺物の多くは SD01 から出土しており、次いで包含層、落込みとなる。それらのうち、実測できたのは 93 点であった。以下、SD01、包含層、落込みの順に出土遺物を概観する。

**SD01** 多くは須恵器であったが、弥生土器や土師器も一定量含まれる。1～19 が須恵器、20～26・33～48 が弥生土器、27～31 が土師器、32 が黒色土器である。

1～4 は蓋である。1～3 は壊蓋で、稜がはっきりしており、6 世紀頃の特徴を示す。うち、1 はツマミを有する。2・3 は上部を欠くため、ツマミの有無は不明である。口径はいずれも 12cm 前後である。4 は 1～3 と形状が異なり、奈良時代頃まで下がると考えられる。5～10 は壊身である。いずれも完形ではないが、7 以外は口縁から底部までが残存している。5 は焼き歪みが著しいが、SD01 から出土した壊身の中では最も古式と考えられ、口縁の形態から田辺編年における MT15 と考えられる。全体を見ると、口縁部が急角度で立ち上がるものの（5・6）と口縁部に向けての傾斜が緩やかなもの（8～10）に分けることができ、時期差が認められる。上限は MT15、下限は TK43 頃となろうか。11・12 は高壊で、11 が有蓋高壊、12 が無蓋高壊である。11 は脚部の大半を欠くが、円形の透かし孔が認められる。口縁の形状等から TK47 頃まで遡りうるか。12 は口縁部から脚部までがほぼ残存しており、全体のプロポーションがわかる好例である。壊部のほぼ中央に波状文を施し、脚部には長方形の透かし孔を有する。長脚化する以前の、TK23～TK47 頃とみておきたい。13～16 は甕である。うち 15 は口縁から体部にかけてよく残っており、全体像がわかりやすい。16 は底部で、調整技法などが 15 と似ているため同一個体と考えられたが、接合はできなかった。13・14 はともに口縁であるが、形状や口径の差から 13 は中型甕、14 は大型甕と考えられる。17 は壺蓋である。口径 8.8cm と小さく、有蓋短頸壺の蓋とみられる。18 は壺で、口縁から体部までが残っており、底部を欠く。頸部から体部にかけてカキメを施す。19 は碗である。口縁部はほぼ垂直で、頸部はやや膨らみ、体部から底部にかけ

ては壊身などと似た形状である。器高は6.4cmと浅い。

20～26は弥生土器の高壊で、20・21は口縁部、22～26は脚部である。口縁部はいずれも途中で角度を変え、2段階で広がる形状である。21は脚部との接続部も残っており、脚部のいずれかと接合できるかと期待したが、接合はできなかった。いずれも風化が進み、調整等の残存は良好でない。脚部のうち、裾が残るのは25・26の2点である。脚部として完存しているのは26のみだが、長脚と短脚の2種類が存在したことがうかがえる。33～41は甕で、41は口縁部から体部の上半分弱が残存しているが、それ以外は口縁で、全體像のわかる遺物はない。口縁はすべて受口状口縁である。口縁は、最小で口径11cm程度、最大で18cm程度で、形状から時期差は認められるが、近江V様式の範疇に収まるものと考えられる。42～48は底部で、体部に向かっての立ち上がりが急角度のものと緩やかなものがあり、甕底部と考えられるが、44・45・48などは壺の底部である可能性も捨てきれない。

27～31は土師器である。27は小型丸底壺の口縁～頸部で、表面の風化が著しいが、外面にはわずかにハケが認められる。28は甕で、おそらく長胴甕の口縁と考えられる。29は二重口縁壺の口縁部で、口縁上半部を欠く。30は壺である。体部の約半分しか残存していないため、全體像を推し量るのは難しいが、TK10頃の須恵器を模倣したものであろうか。風化が進んでいるが、胴部中央にヘラ描きの列点文を施す。31は鉢である。口縁部しか残存しないが、復元径約25.5cmを測り、内外面ともにミガキが認められる。

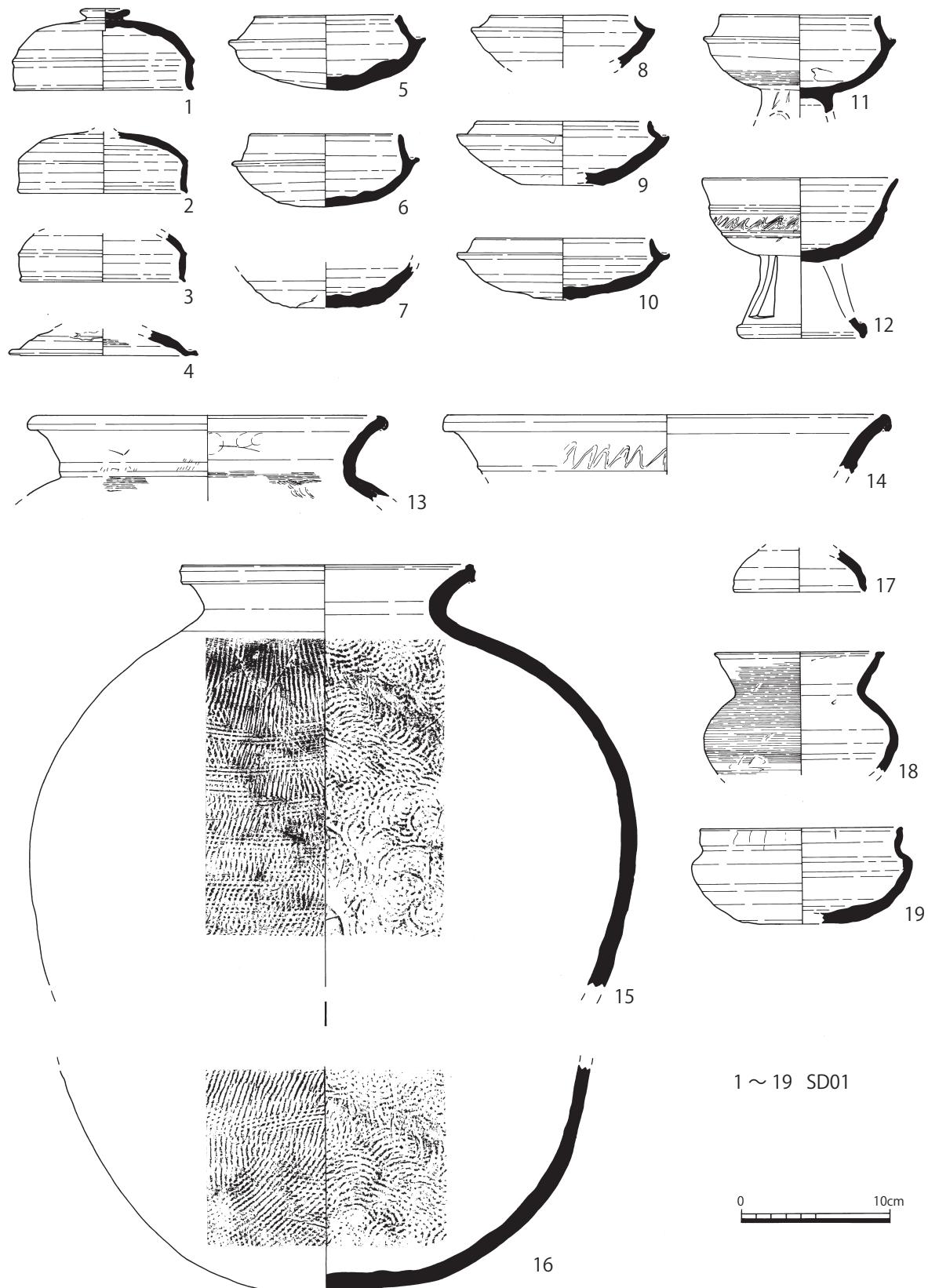
32は黒色土器の高台で、碗の底部と考えられる。

**包含層** 重機掘削時や遺構検出時に出土した遺物のうち、オリーブ色シルト層から出土した遺物を包含層出土遺物とする。49・53・54は弥生土器、50～52・55～56は土師器、57は須恵器、58は陶器、59は灰釉陶器である。

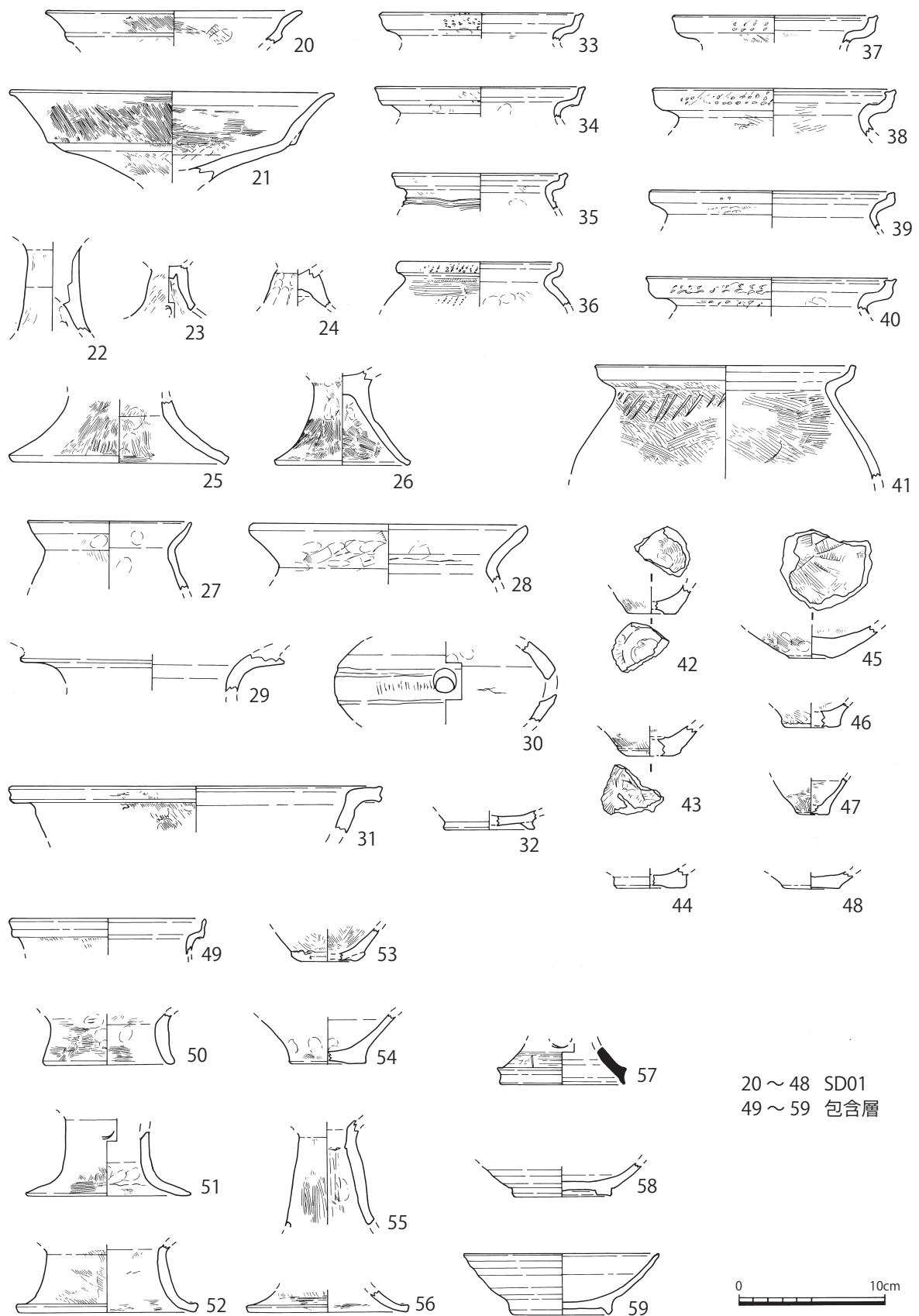
49は受口状口縁で、頸部付近の立ち上がり角度から、甕ではなく壺と考えられる。53・54は壺または甕の底部である。53は底部に粘土紐を円形に貼り付けた痕跡がある。54は中央部をやや窪ませる。50は高台部分と考えられるが、土師器の壺口縁の可能性も捨てきれない。51は器台で、脚部のみが残存する。全体の下半分と考えられ、円形の透かし孔が認められる。52は同様に器台の脚部と考えられるが、壺等の口縁部である可能性も捨てきれず、なお検討の余地がある。内外面とも摩滅・剥離が著しいが、一部、ハケが残る。55・56は高壊脚部である。ともに風化が著しいが、外面にはハケが認められる。57は須恵器の高壊脚部で、円形の透かし孔が1ヶ所残存する。58は施釉陶器の碗または皿で、底部のみが残存する。肥前系陶器の可能性が高い。内面に漆とみられる付着物がある。59は灰釉陶器の碗である。灰釉の付着にむらがあることから自然釉とみられ、灰釉陶器の中でも最初期のものと考えられる。

**落込み** 調査区南西部の落込みから出土した遺物である。出土遺物の総数は多くないものの、31点実測し得た。60～76・78は土師器、77は弥生土器、79・87～90は黒色土器、80・82～86は須恵器、81は灰釉陶器である。

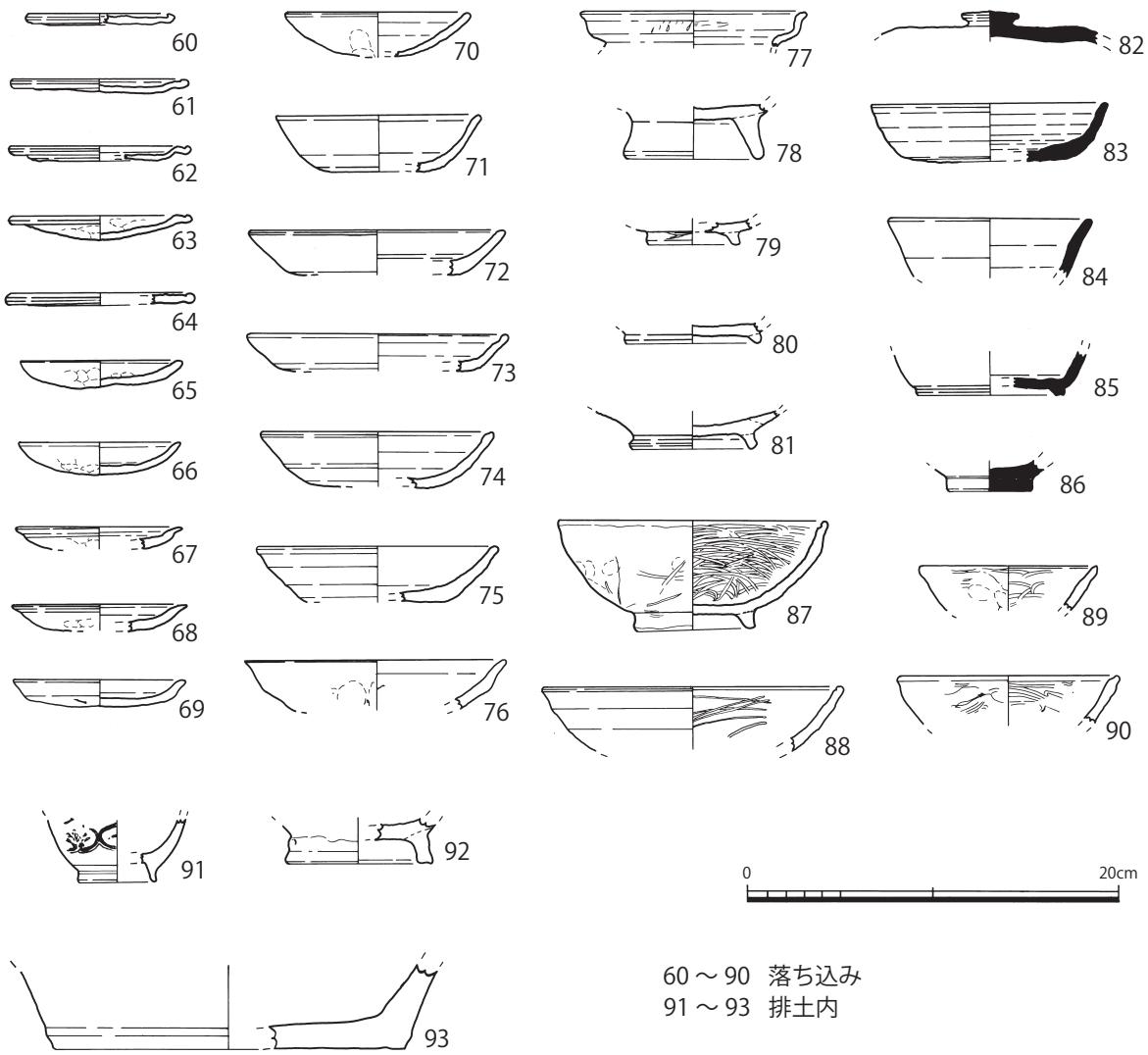
土師器のうち、60～73は土師皿である。60～64は極めて浅く、「て」の字口縁のものとそうでないものがある。前者はBタイプ、後者はCタイプに分類してよいと思われる。71は深身で、EタイプかGタイプに属するであろうか。口径・器高は大小さまざま、ある程度時期差があると見てよいと思われる。74～76は深身で、壊と考えられる。78は



第5図 出土遺物実測図（1）



第6図 出土遺物実測図（2）



第7図 出土遺物実測図（3）

高台である。器高が2.8cmと高く、通常の碗などの高台とは異なるが、器種については検討を要する。77は弥生土器で、受口状の甕口縁である。79は黒色土器の高台で、碗と考えられる。87～90は黒色土器椀で、うち87はほぼ完形であった。それ以外は口縁の一部のみが残存し、底部を欠く。80・86は須恵器の高台である。80は貼付け高台で、86は平高台で糸切り痕が残る。全体に白みがかっており、一見すると土師器のように見えるため、生焼けと考えられる。82は壊蓋である。宝珠を押しつぶしたような形状のつまみを有し、奈良時代まで下がるものと考えられる。83～85は壊身で、85は貼付け高台を有する。81は灰釉陶器の底部である。高台は完存しており、内面に灰釉が認められるが、釉のかかり具合から、自然釉とみられる。器種は碗または皿と考えられる。87～90はいずれも黒色土器椀で、87以外は口縁部の小片である。87はほぼ完形で、口径14.5cm、器高12.0cmを測る。口径は88→87→90→89の順に小さくなっている、89が年代的に最も新しいと考えられる。

**排土内** 重機掘削時の排土内から出土した遺物である。91は染付の茶碗で、外面に花とみられる文様を施す。遡っても近世のものであろう。92は土師器の高台である。通常の碗などと比べると比較的背が高い貼付け高台だが、器種は不明である。93は陶器で、大甕の底部と考えられる。内面には付着物があり、付着物の分析によって用途がわかるものと思われる。こちらも近世以前には遡らないと考えられる。

**まとめ** 本調査で検出した遺構は、前述したとおり流路状遺構（SD01）とピット群、溝（SD02）、落込みであるが、落込みは洪水による自然堆積の可能性が高い。また、SD02とピット群については前述の記載に付け加えることはほぼ無いので、SD01についての考察をもって本報告のまとめとしたい。

本調査では、前述したとおり遺構面をかなり掘り下げているので、SD01の本来の形状は推測の域を出ないものの、調査区中央付近で直角に折れ曲がり、西側へ延びていた可能性がある。しかし、調査区南西部が落込みによって搅乱されているので、この遺構の詳細は不明とするほかない。SD01の埋土は包含層と同じオリーブ色シルトであるが、この層は前述したとおり、調査区全体に18～34cmにわたって堆積している。調査区南壁を観察したところ、このオリーブ色シルトは調査区南西部の落込み埋土の最上層にあたる黄灰色シルトより後に堆積したと考えられる。しかし、落込み埋土下層からは中世の遺物が出土しており、出土遺物だけを見ると堆積順序に疑問が生じる。そこで、SD01の各遺物の出土状況を検討しておきたい。SD01の主な出土遺物は須恵器であるが、出土位置を見てみると、多くが埋土の中ほどに埋まっていることがわかる（第3図）。これより下、遺構の底付近には主に弥生土器片が存在した。この点だけ捉えると、通常の堆積状況を示しているが、問題は、埋土がほぼ1層しかないという点である。この層は一時に、一気に堆積したものであろう。この層の堆積はSD01を超えて広範囲に及ぶため、この地域一帯が池状を呈し、そのうち最も深い部分がSD01として残ったとも考えられる。現時点では、洪水により落ち込みが形成された後、残った水が滞留して池となったと考えておきたい。実際、須恵器だけを見ても時期差が認められ、同時期に遺棄されたものではないと考えられる。幅広い時期の遺物が含まれていることやSD01の埋土がほぼ一層しかないことを踏まえると、元から存在した池などに遺物が断続的に遺棄されたと考えるより、洪水など何らかの理由で土砂ごと押し流されてきたと考えるほうが自然である。

本調査地の西側で平成10年度に実施した発掘調査では、堅穴住居や掘立柱建物、方形周溝墓などが検出されており、この地域は弥生時代には墓域、古墳時代以降には集落跡となっていたようである。一方、本調査地北側一帯においては顕著な遺構が確認されておらず、低湿地であった可能性が指摘されている。したがって、本調査地は湿地あるいは谷に面した集落の縁辺部にあたる可能性が高い。（井上）



遺構検出状況（東から）



西側周壁堆積状況



南側周壁堆積状況



SD01 遺物出土状況（南東から）



SD01 遺物出土状況（南西から）



完掘状況（東から）



1

SD01 出土遺物 (1)



2

SD01 出土遺物 (2)



5

SD01 出土遺物 (3)



6

SD01 出土遺物 (4)



11

SD01 出土遺物 (5)



12

SD01 出土遺物 (6)



16

SD01 出土遺物 (7)



18

SD01 出土遺物 (8)



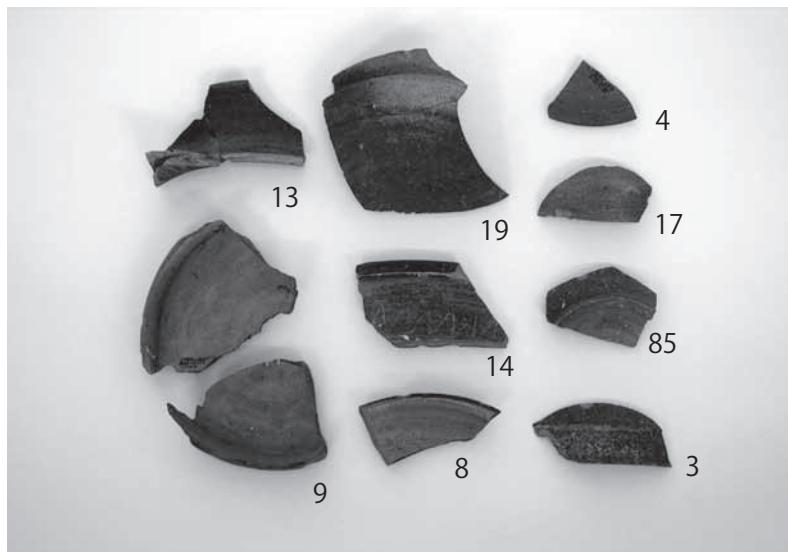
SD01 出土遺物 (9)



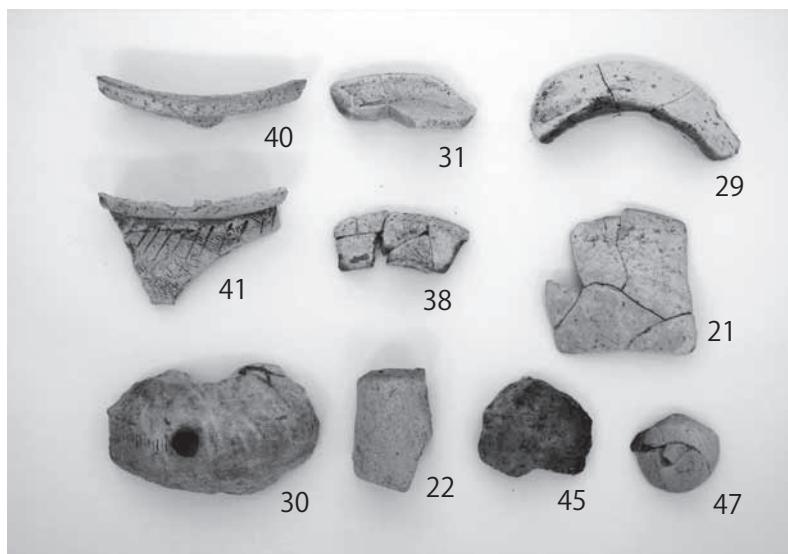
SD01 出土遺物 (10)



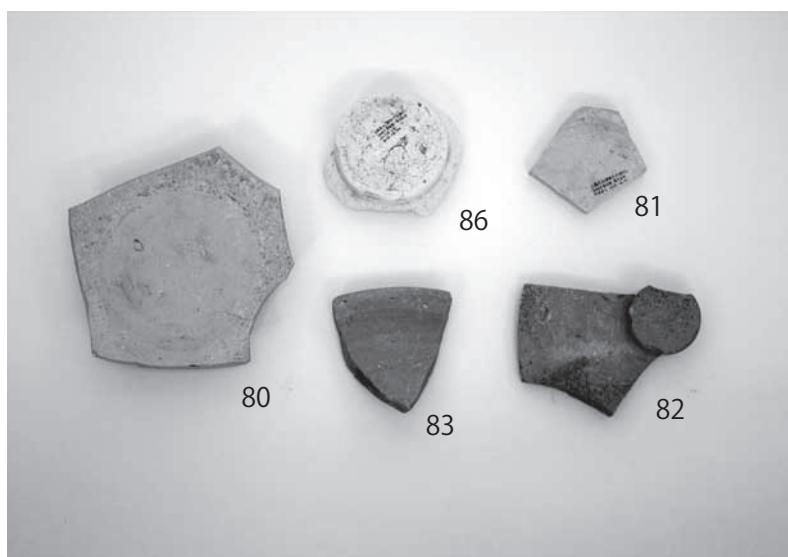
落込み出土遺物 (1)



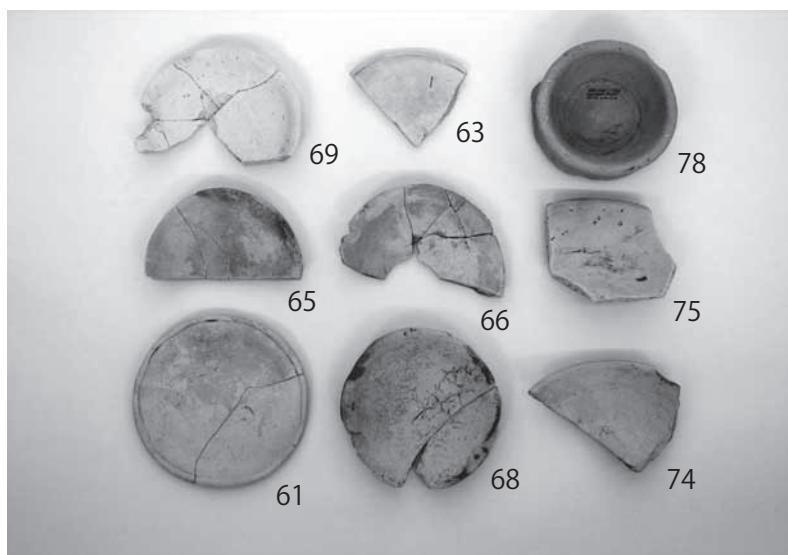
SD01 出土遺物 (11)



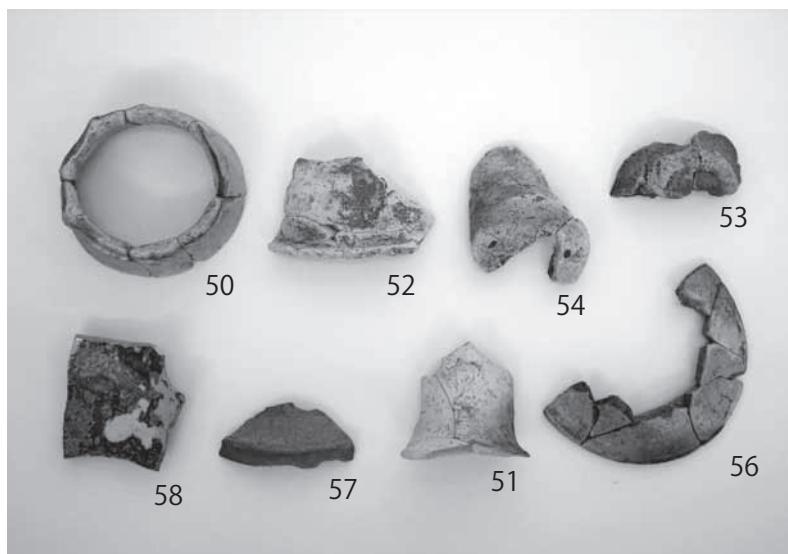
SD01 出土遺物 (12)



落込み出土遺物 (2)



落込み出土遺物（3）



包含層出土遺物（1）



包含層出土遺物（2）



包含層出土遺物（3）

## 第3章 小篠原遺跡

調査地 野洲市小篠原字下池田 2081 番地 1

調査原因 集合住宅建設

調査期間 平成 30 年 10 月 16 日～12 月 7 日

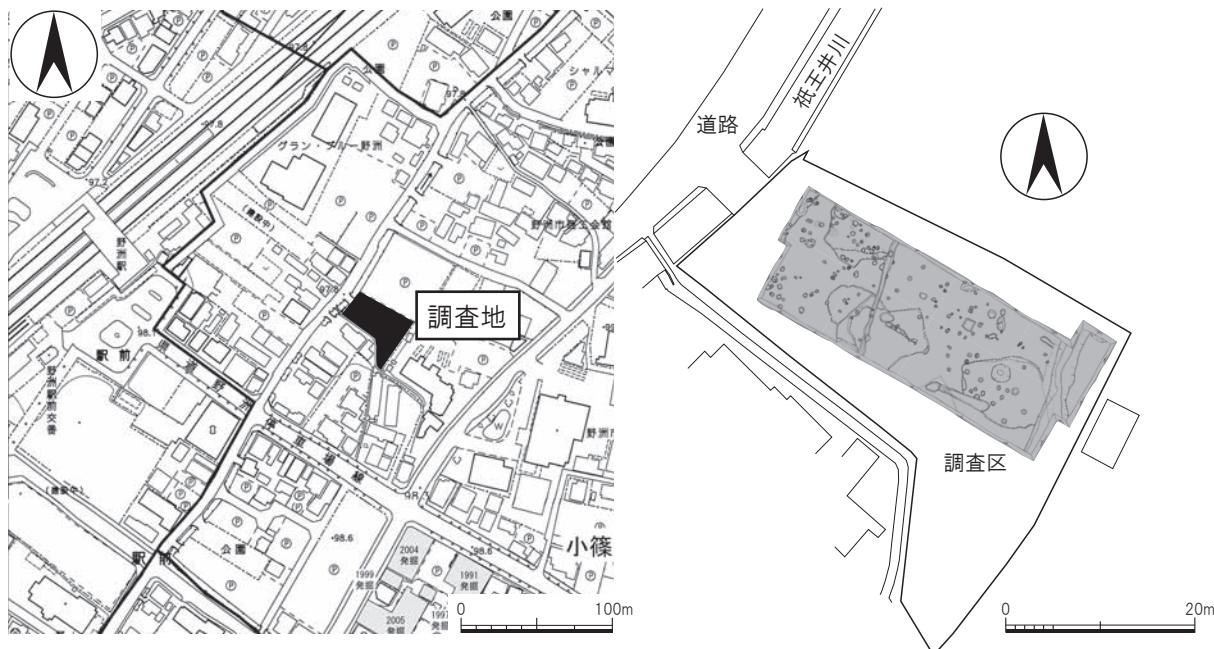
調査経過 小篠原遺跡は、縄文時代から江戸時代に至る集落遺跡として周知されている。

今回の調査は集合住宅建設に伴うもので、当調査地南東側に隣接する過去の調査事例では、現地表面下約 1.0m で遺構面が確認され、古墳の周濠等が検出されている（昭和 62 年度実施第 2 次調査、小篠原字下池田 2101 番地）。対象地の計画建物部分に調査区を設定して実施し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。調査区面積は約 470m<sup>2</sup> であった。

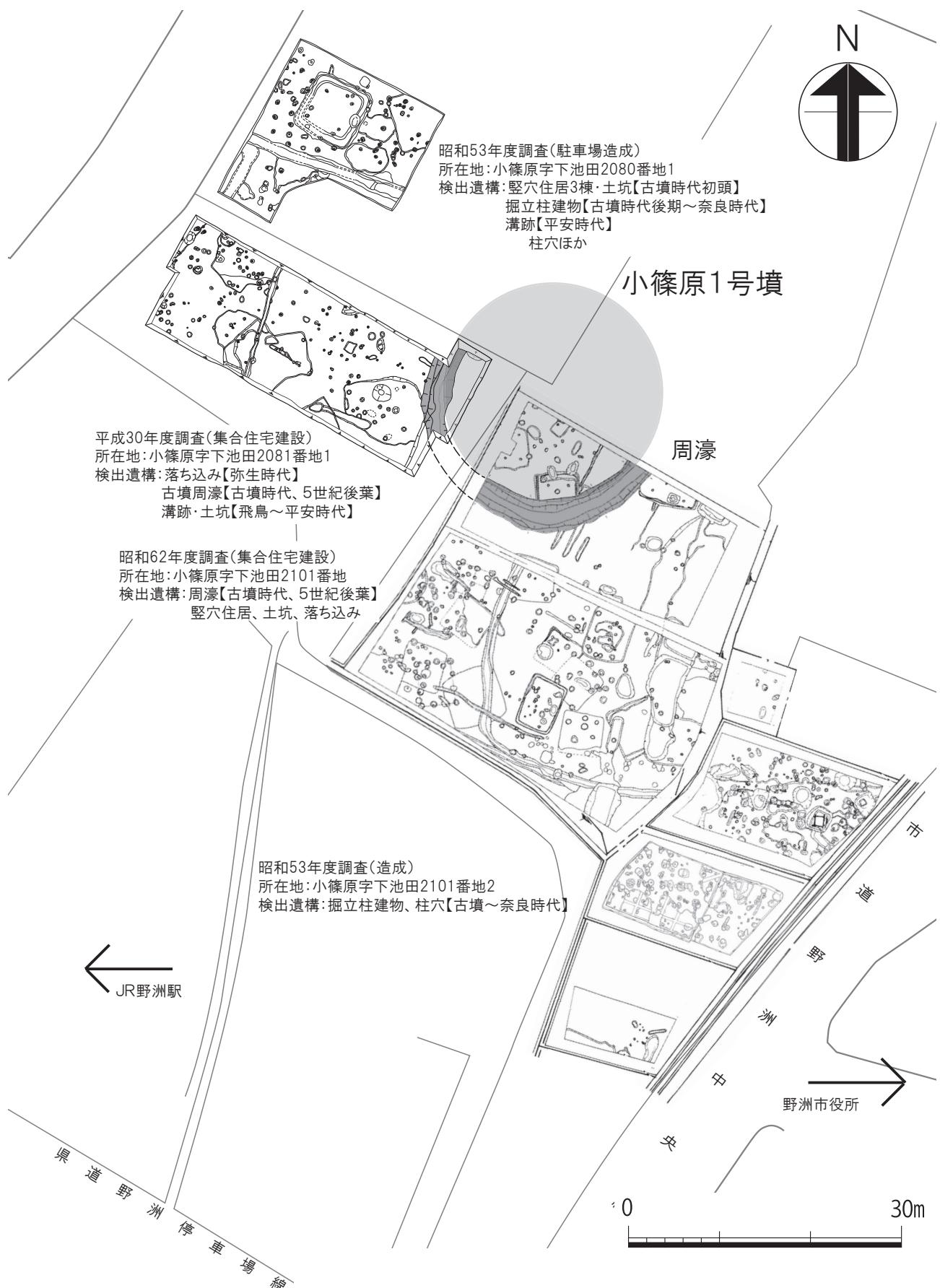
基本層序 調査区の基本層序は以下のとおりである。本調査地敷地全体に約 0.2～0.7m の盛土造成がなされている。第 1 層～第 4 層までが造成土である。第 6 層灰黄褐色粗砂混じり粘質土層が遺物包含層である。第 10 層黒褐色粘土層、第 11 層暗褐色砂質土混じりの黒色粘土層は調査区南東側で検出された古墳の周濠跡（SD-03）の埋土である。SD-03 に切りあう形で第 9 層灰白色砂と灰黄褐色極細砂の互層を埋土とする SD-01、土坑跡 SK-02 が検出された。第 26 層にぶい黄褐色粘質土層上面が遺構面となる。地形は南東から北西へ傾斜している。

遺構 表土下約 0.6～0.7m にぶい黄褐色粘質土層上面を遺構面として、古墳の周濠、溝、土坑、柱列、ピット群を検出した。以下それぞれの遺構について概要を述べる。

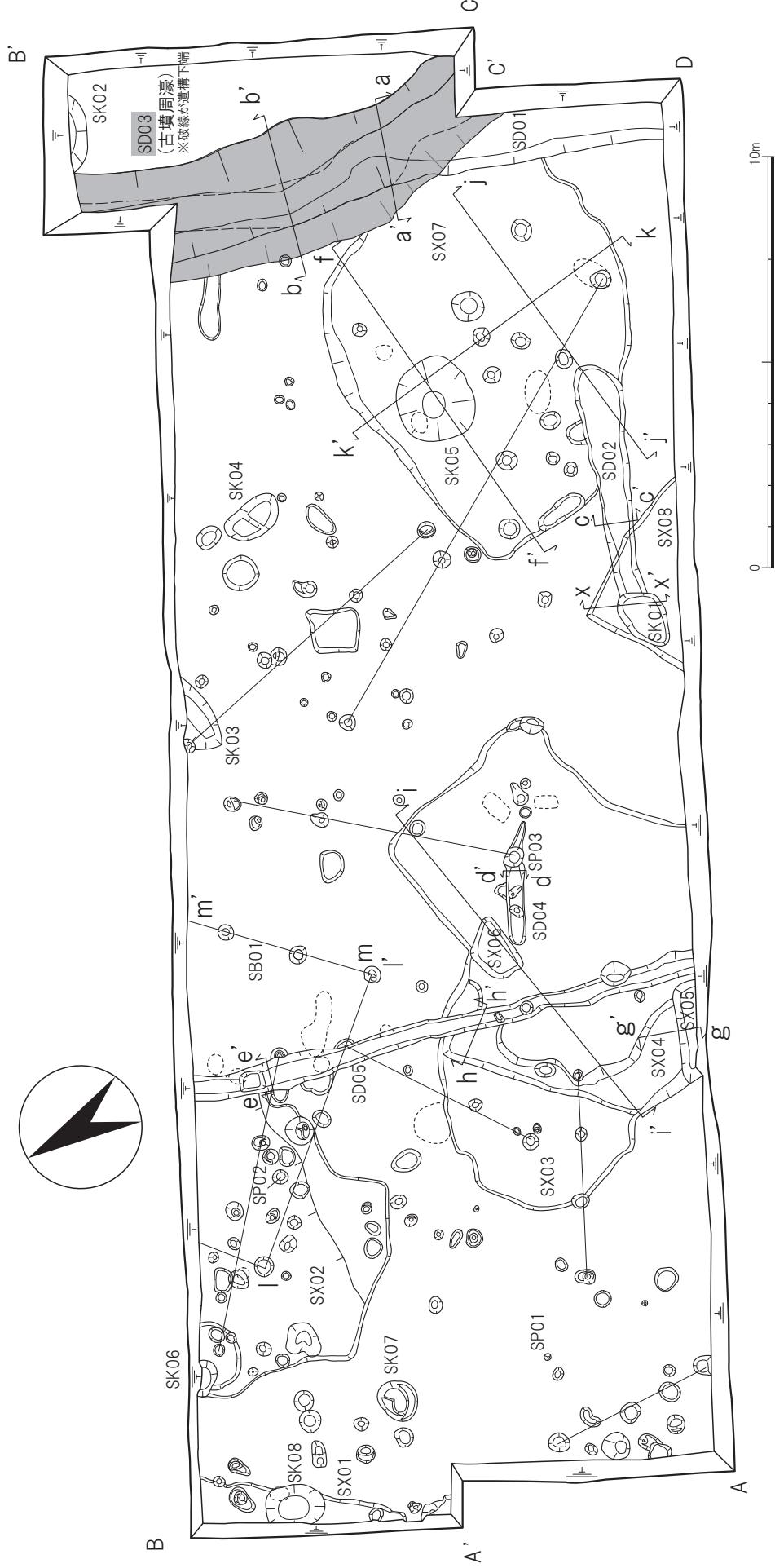
SD-01 調査区南東端で検出された、北から南に向かう幅 2.2～2.7m、深さ 0.15～0.4m の溝跡である。灰白色（10YR8/1）砂層と灰黄褐色極細砂層の互層がほぼ水平に堆積する。遺物は飛鳥～平安期を中心とする土師器・須恵器が検出段階から多量に出土した。後述する古墳の周濠 SD-03 と切り合い関係にあり、SD-03 が段階的に埋没する過程の中で、溝の東



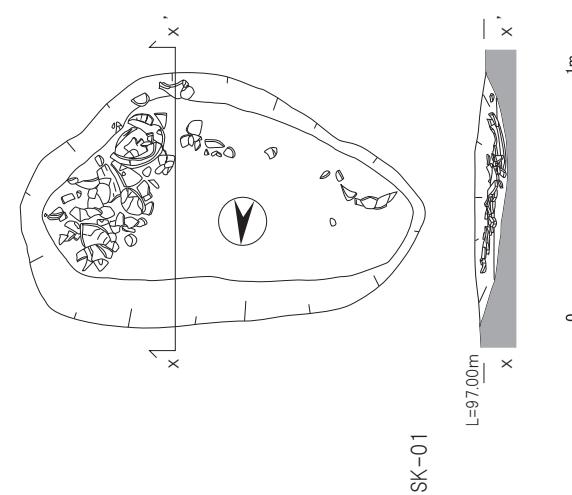
第1図 調査地位置図・調査区配置図



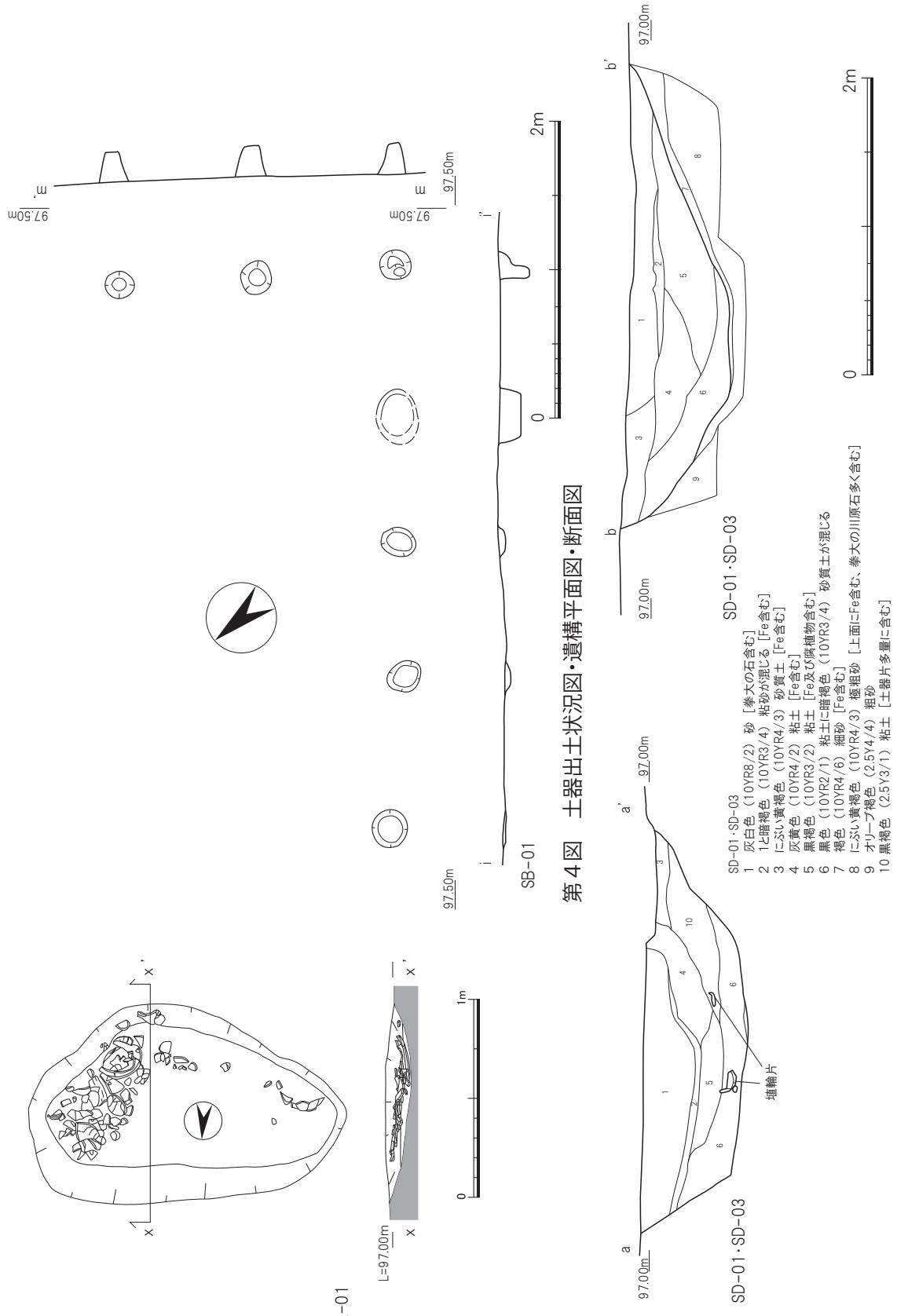
第2図 調査地周辺遺構配置図



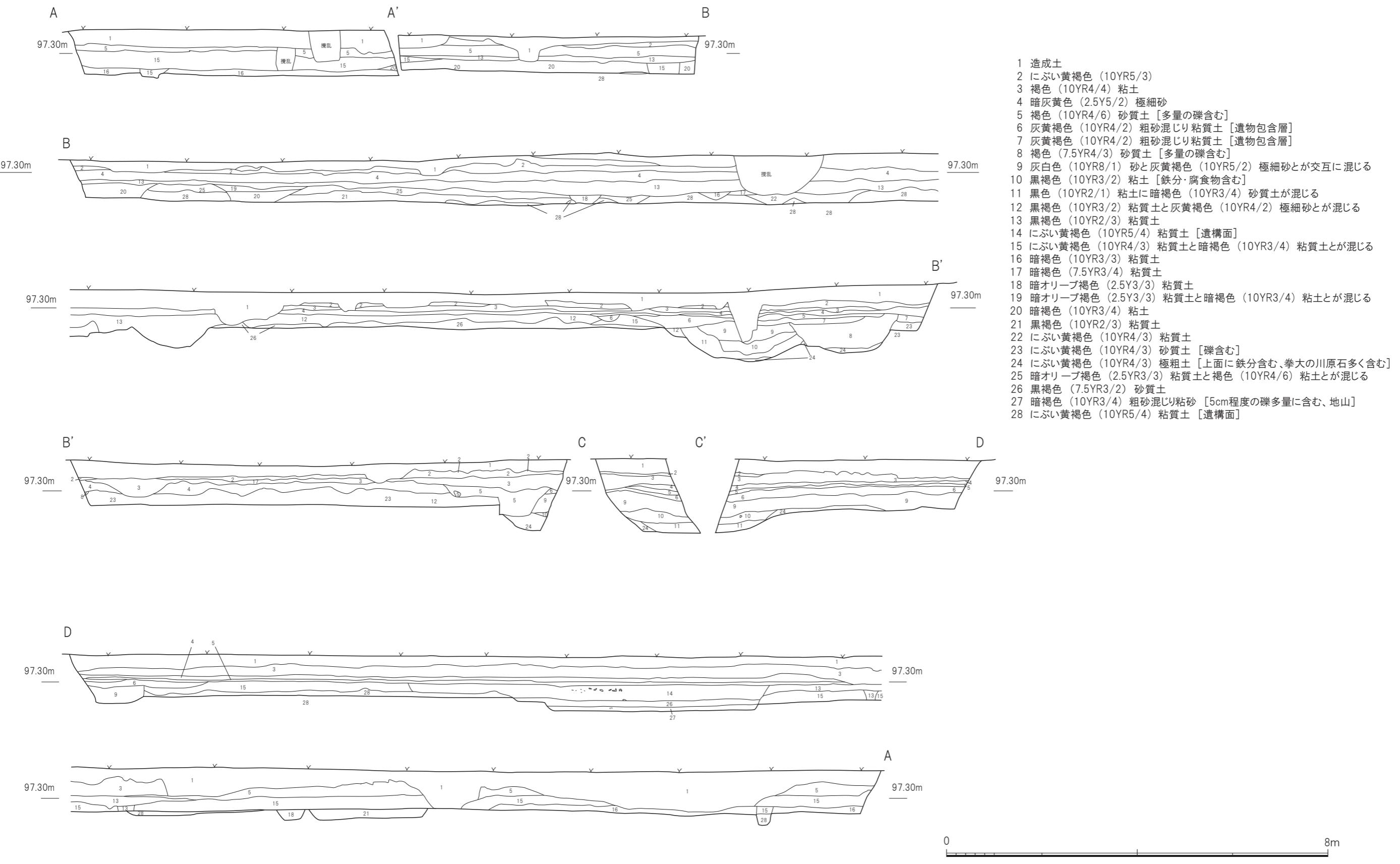
- 側の掘り方が一部重複する形で人為的に作られた溝であると考えられる。その証左として、埋土中から埴輪片が出土している。
- SD-02 調査区の南西部で検出された、北西から南東に向かう幅約 0.6～1.2m、深さ約 0.1m の溝跡である。埋土は灰黄褐色粘砂層で構成される。
- SD-03 調査区の南東端で検出された、幅約 2.1～3.1m、深さ約 0.7m の溝跡である。周濠の外径から復元される古墳の墳丘規模は、約 24m となる。埋土は段階的に堆積しており、埋土は主に灰黄色粘土層、黒褐色粘土層、黒色粘土層で構成される。遺物は土師器、須恵器類が出土しているほか、埴輪が黒色粘土層から出土している。
- SK-01 調査区の中央部南側で検出された土坑跡である。幅約 1.0m × 長さ約 1.6m の不整形を呈し、深さ約 0.14m を測る。埋土は黒褐色粘質土層の 1 層で構成される。埋土中から弥生時代の土器が多量に出土しており、土器の廃棄坑とみられる。出土状況を観察すると、土坑内で主に東側に集中して土器は出土しており、そのほとんどが破片である。
- SK-02 調査区の北東端で検出された土坑跡である。調査区端部にかかる形で検出されたため、幅は不明である。長さは約 2.0m を測る。埋土は灰黄褐色粗砂混じり粘質土層の 1 層で構成される。土層の切りあい関係からみて、SD-01・SD-03 埋没後に形成されたものと判断される。
- SK-03 調査区の中央部北端で検出された土坑跡である。調査区端部にかかる形で検出されたため、幅は不明である。長さ約 1.5m の不整形を呈するものとみられる。深さ約 0.5 m を測る。埋土は灰黄褐色粗砂混じり粘質土層の 1 層で構成される。
- SK-05 調査区南東側で検出された土坑跡である。約 2.0m × 2.0m の円形を呈し、深さ約 0.9m を測る。埋土は黒褐色粘質土層、黒褐色粘砂層、黒色粘土層、黒褐色粗砂混じり粘砂層で構成される。埋土中から管玉のほか飛鳥～奈良時代の土器が多量に出土しており、土器の廃棄坑とみられる。土器類は埋土中からまんべんなく出土したが、管玉は黒色粘土層から出土した。
- SX-01 調査区の北西端で検出された落ち込みである。調査区端部にかかる形で検出されたため、幅は不明である。埋土は暗褐色粘土層で構成される。遺物は弥生時代の土師器の甕、壺などがあげられる。
- SX-03 調査区中央西よりの範囲で検出された落ち込みである。約 4.5～9.0m の不整形を呈する。深さは約 0.1～0.2m を測る。埋土は褐色粘質土層と灰褐色粘土層から構成される。下層は灰色の細砂層である。遺物は土師器の甕、壺、高杯、器台などがあげられる。
- SX-07 調査区南東部で検出された落ち込みである。約 8.0m × 7.5m の不整形、深さ約 0.08～0.12m を測る。埋土は主に黒褐色粘質土層、黒褐色砂混じり粘質土層、暗褐色粘質土層から構成される。土層観察用ベルトを残しながら掘削を進めると、下層からピットが検出された。遺物は飛鳥時代の土師器の皿、須恵器の杯蓋、杯身、石製品などがあげられる。
- SP-01～03 SP-01 は約 0.2m × 0.2m、深さ約 0.099m を測る。SP-02 は約 0.4m × 0.4m、深さ約 0.055 m を測る。SP-03 は約 幅 0.4m × 長さ 0.5m、深さ 0.22m を測る。いずれも埋土は灰黄褐色粗砂混じり粘質土層である。遺物は土師器の壺、高杯などがあげられる。



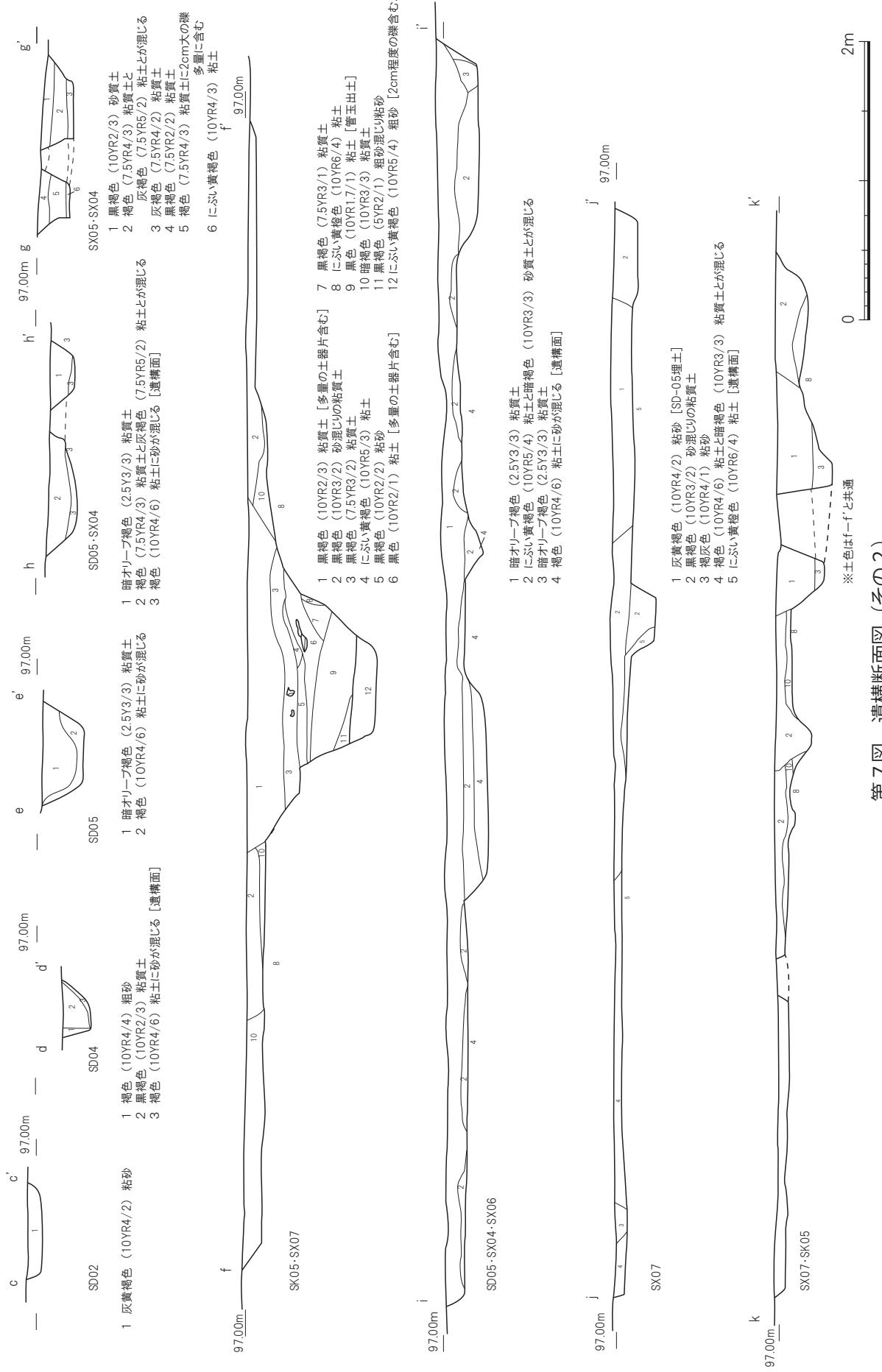
第4図 土器出土状況図・遺構平面図・断面図



## 第6図 遺構断面図(その1)



第5図 調査区周壁断面図



第7図 遺構断面図（その2）

**遺物** 遺物は、整理コンテナに24箱分出土している。ここでは図化可能な164点について掲載している。以下、それぞれの概要について述べていく。

**埴輪** 1～20は埴輪である。器財埴輪と形象埴輪に大別され、その全てが調査区南東端で検出されたSD-03から出土した。いずれも原位置から古墳の周濠内に転落したものとみられる。

1～4は円筒埴輪である。円形の透かし孔を有し、ほとんどが表面についてタテハケ調整のちB種ヨコハケ調整によって仕上げるが、2のようにタテハケ調整のみのものもある。口縁部を有するものは出土しておらず、底径復元可能なもので2が18.0cm、3が18.5cm、4が24.3cmを測る。突帯の断面は丸みを帯びた方形を呈し、やや外反気味なものとなっている。1は表面に三本の線による線刻を有する。底部はナデと指頭によるオサエによって整えられる。

5・6は朝顔形埴輪である。5は頸部の破片とみられ、突帯を貼り付けた痕跡が残り、内径9.2cmを測る。6は口縁部の破片で、口縁部中位に突帯を貼り付けた痕跡が残る。表面はナナメハケ調整のちヨコハケ調整を施す。内面は不特定方向のハケ調整痕が残る。復元径38.8cmを測る。

7・8・9は蓋形埴輪の立ち飾り部分である。中央部から四方に枝が分岐し、それに方形の透かし孔を2箇所ずつ有する。線刻による表現などから、隣接する過去の調査事例（昭和62年度調査、小篠原字下池田2101番地）で出土した蓋形埴輪と同類のものであると判断できる。摩滅が激しいものの、表面にはハケ調整痕、指頭によるオサエが残る。

10は盾形埴輪である。一条の縦方向の線刻と五条一組の斜方向の線刻が組み合う。

11～13は鶴形埴輪の羽部分の破片である。線刻によって羽根を表現し、表面にハケ調整を施す。内面には粘土紐接合痕が残り、ナデ調整を施す。

14は人物埴輪の腕部分である。表面は丁寧にナデ調整を施す。

15は剥離が著しいが、表面に線刻が残ることから、蓋形埴輪の笠部分、或いは人物埴輪の鎧部分であろうか。

16～18は家型埴輪である。16は屋根の破風部分の破片である。格子紋による網代葺を表現する。17は屋根の庇あるいは平壁部分とみられる。18は入母屋造の屋根部分の破片とみられる。

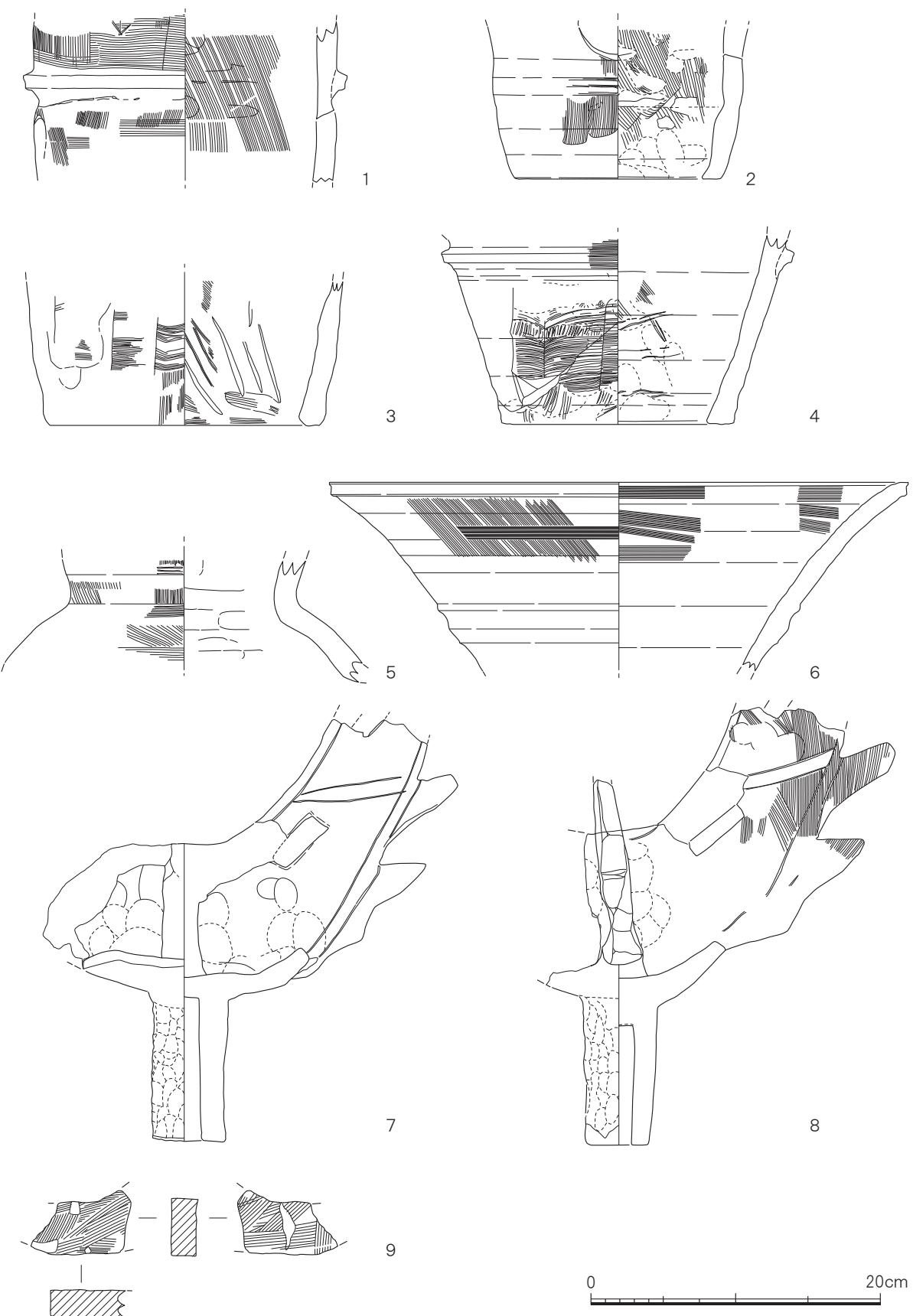
19～20は形象埴輪の小片であると見られる。20は鶴形埴輪の羽根部分であろうか。

焼成はいずれも良好で、色調は1が淡橙色、2～5・16・18がにぶい橙色、6・10・15が浅黄橙色、7・8が黄橙色、9・11～14・19・20が灰白色、17が橙色を呈する。胎土は多くが0.1～0.3mm以下の砂粒を含み、円筒埴輪については0.5cmほどの砂粒を含む。

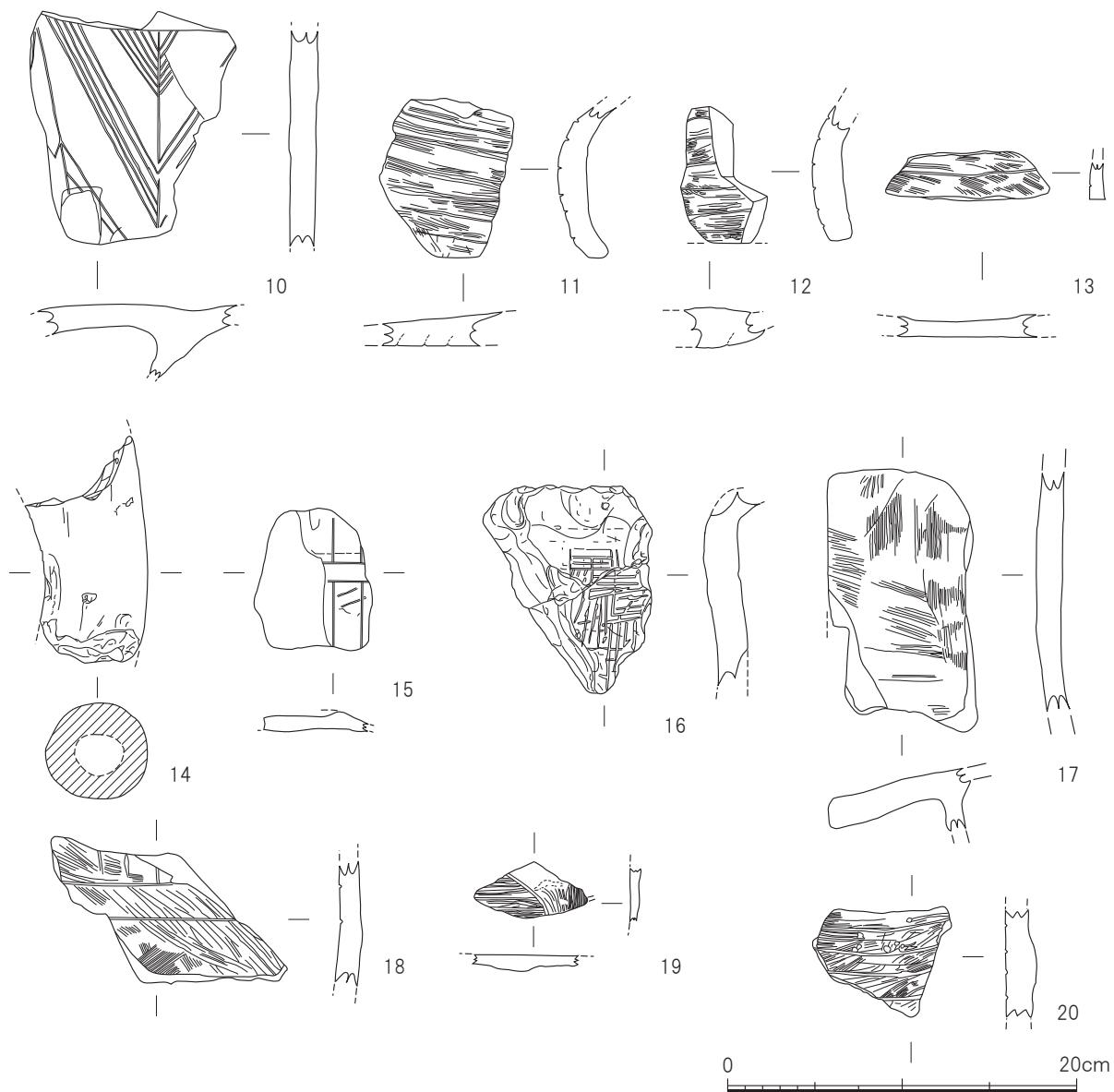
**SD-01** SD-01からは、平安時代を主とした土師器・須恵器を中心に多量に出土した。

21～24は土師器の壺である。21は小型丸底壺である。22・23は口縁部が受け口状を呈する。23・24は体部内外面に刷毛目調整が施され、24については指頭による圧痕が残る。いずれも口縁部はナデ調整を施す。口径は復元可能なもので22が13.0cm、23が13.6cm、24が14.0cmを測る。色調は21が橙色、22・24がにぶい橙色、23が赤褐色を呈する。胎土はいずれも1mm程度の砂粒を多く含む。焼成はいずれも良好である。

25～29は土師器の甕である。27は長胴甕とみられる。いずれも体部内外面に刷毛目調整を施す。口縁部はナデ調整を施す。27・28は刷毛目調整痕の上から指頭による圧痕が残る。口径は25が12.4cm、26が19.0cm、28が28.0cm、29が24.0cmを測る。色調は25が



第8図 出土埴輪実測図（その1）



第9図 出土埴輪実測図（その2）

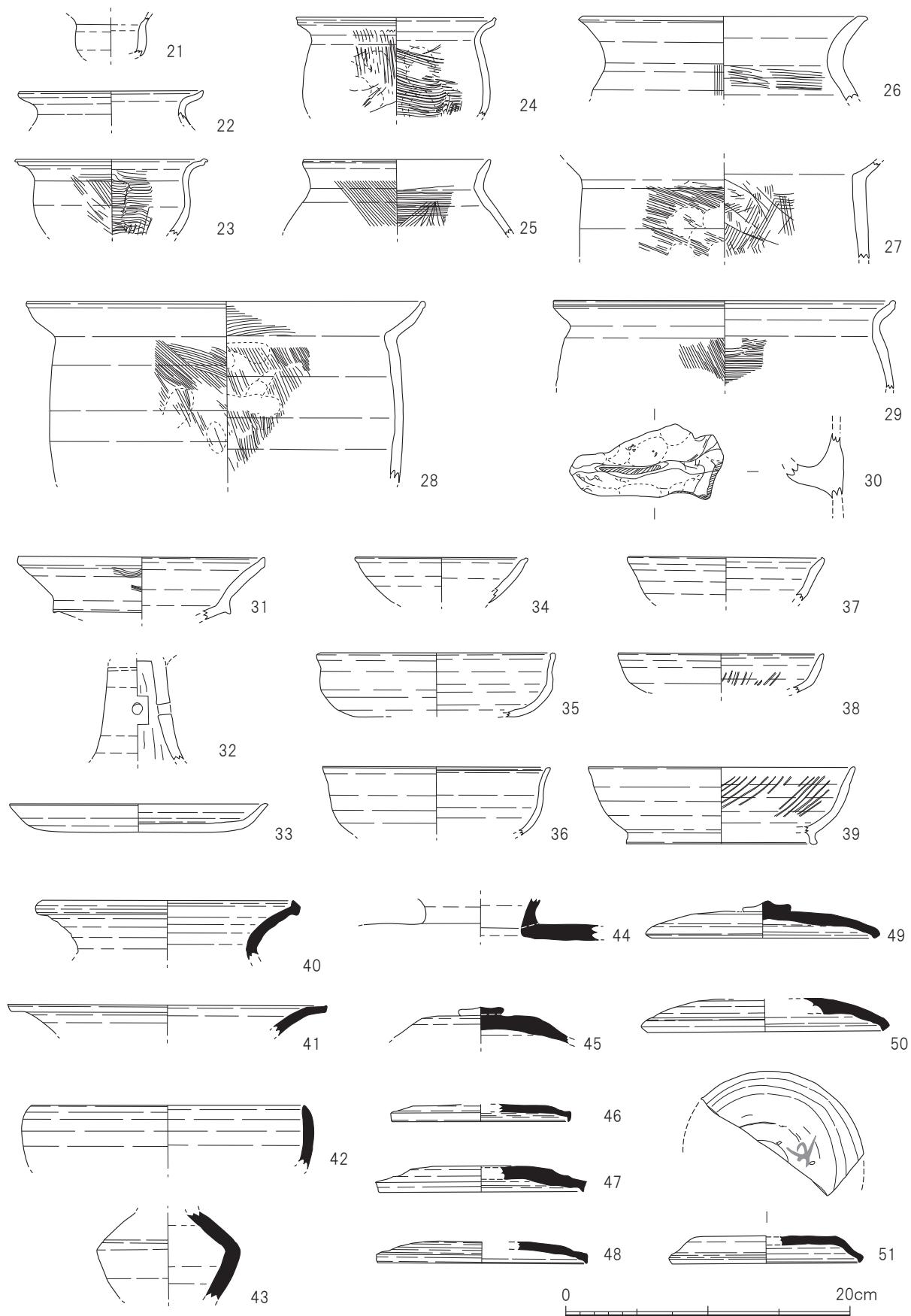
赤灰色、26が灰色、27・29がにぶい橙色、28が浅黄橙色を呈する。胎土はいずれも1mm程度の砂粒を多く含む。焼成はいずれも良好である。

30は土師器の把手である。指頭による圧痕が外面に残る。透かし孔等はあいていない。色調は灰白色、胎土は1mm程度の砂粒を含む。焼成はやや軟質である。

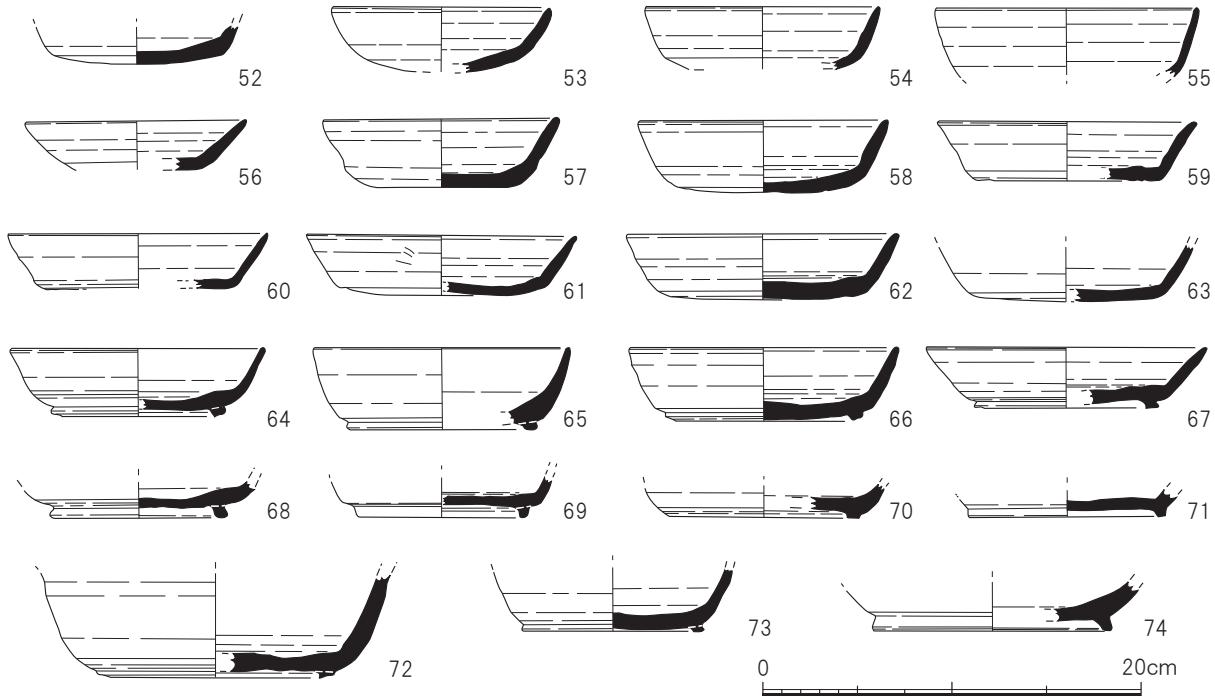
31・32は土師器の高杯である。31の口径は復元すると17.2cmを測る。杯部外面には波状紋を施す。32は脚部の破片で、円形の透かし孔を4方向に配する。色調はいずれもにぶい橙色、胎土は32は密、31は1mm程度の砂粒を含む。焼成はいずれも良好である。

33は土師器の皿である。復元すると口径は17.8cm、器高は2.0cmを測る。表面は丁寧にナデ調整を施す。色調は浅黄橙色、胎土は1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好である。

34～39は土師器の杯である。39には断面台形の貼り付け高台が付く。回転台を使用したヨコナデを口縁部に施す。38・39は内面に斜め方向の暗紋を施す。いずれも浅黄橙色を呈し、胎土は微砂粒を含み、焼成は良好である。



第10図 SD-01出土遺物実測図（その1）



第11図 SD-01出土遺物実測図（その2）

40・41は須恵器の壺の口縁である。復元径は40が17.6cm、41が22.0cmを測る。内外面ともにヨコナデ調整を施す。

42は須恵器の鉢である。鉄鉢形土器と呼ばれるもので、口縁部内外面にヨコナデを施す。色調は灰色を呈する。胎土は微砂粒を多く含み、焼成は良好である。

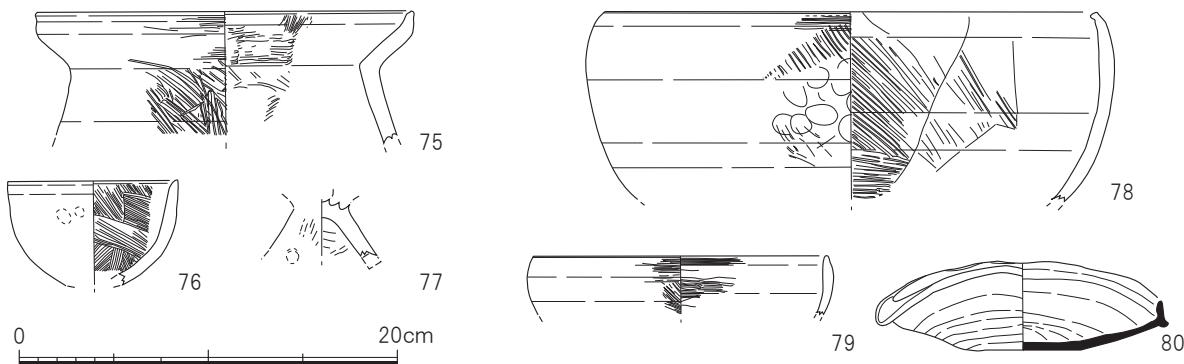
43は須恵器のハソウである。体部外面にはヨコナデを施し、一条の沈線を表現する。色調は灰色を呈する。胎土は2mm程度の砂粒を含み、焼成は良好である。

44は須恵器の横瓶である。体部から口縁部にかけての立ち上がりにかけての破片である為全容は不明であるが、内面にナデ調整痕が残る。体部外面および頸部内面には自然釉が付着する。色調は灰色を呈する。胎土は2mm程度の砂粒を含み、焼成は良好である。

45～51は須恵器の杯蓋である。51には外面に墨書きが残る。45・49は宝珠形のツマミが付き、ほかのものもツマミを有するものであると考えられる。口径は、復元可能なもので46が12.6cm、47が14.3cm、48が14.6cm、49が15.5cm、50が16.5cm、51が13.1cmを測る。いずれも内外面にはヨコナデを施す。色調は45～48・50・51が灰白色、49が灰色を呈する。胎土はほとんどが微砂粒を含む。焼成はいずれも良好である。

52～74は須恵器の杯身である。多くは平底を呈し、64～74については貼り付け高台が付く。底部から体部の立ち上がりにかけてヘラ削り痕が残る。口縁部付近はヨコナデを施す。

口径は53が11.4cm、54が12.2cm、55が13.8cm、56が11.5cm、57が12.1cm、58が13.0cm、59が13.4cm、60が13.6cm、61・62が14.1cm、64が12.2cm、65が13.4cm、66が14.0cm、67が14.7cmを測る。器高は57が3.6cm、58が3.8cm、59が3.1cm、60が2.9cm、61が3.15cm、62が3.6cm、64が3.6cm、65が4.3cm、66が3.5cm、67が3.2cmを測る。色調は52・53・56・57・60・61・65・68・70～74が灰白色、54・55・58・59・64・66・67・69が灰色、62・63が浅黄色を呈する。胎土はほとんどが密であるが、52・62・63・70のように微砂粒を含むものもある。焼成はほとんどが良好で、52・57・62・63・70のようにやや軟質なものもある。



第12図 SD-03出土遺物実測図

SD-03 75・76は土師器の壺である。75の内外面にはハケ目調整痕が残る。

77は土師器の器台の脚部であり、三方向の透かし孔を有するものである。内面には指頭による圧痕が残る。

78は土師質の鉢である。内外面にはハケ目調整を施し、外面には指頭による圧痕、煤の付着痕が残る。79は土師器の碗である。小片のため全容は不明であるが、体部内外面にハケ目調整痕が残り、口縁部は横方向にナデる。

80は須恵器の杯身で、焼成時の焼け歪みが激しい。

口径は75が20.0cm、76が9cm、78が26cm、79が16.0cmを測る。色調は75・77・78・80が灰白色、76・79がにぶい橙色を呈する。胎土は77・80が密で、そのほかは粗砂が含まれる。焼成はほとんどが良好で、76のようにやや軟質なものもある。

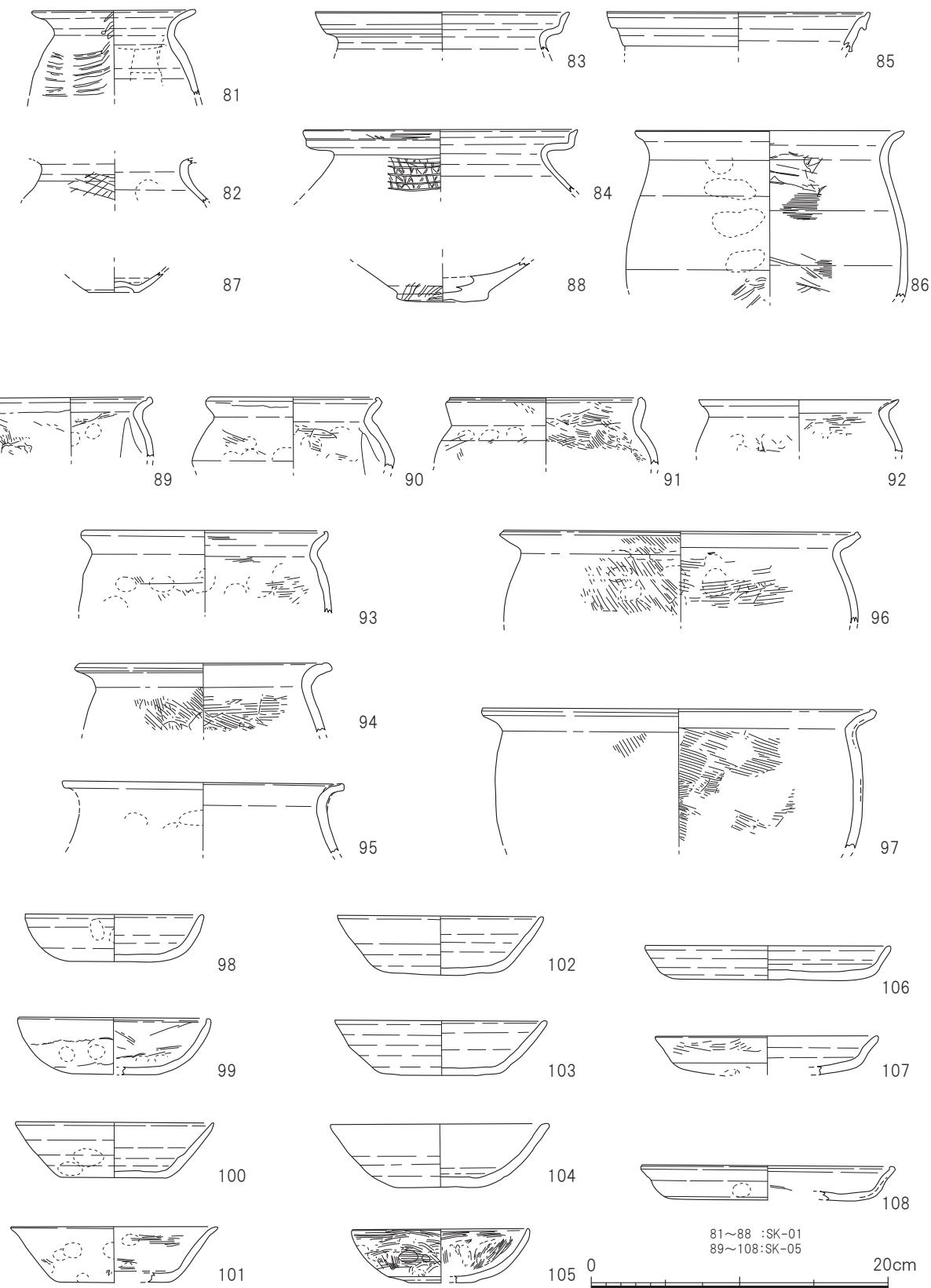
SK-01 81～88は土師器の甕である。81の外面には平行タタキ痕が残る。81の内面はヘラ削りによって調整する。82・84の体部外面には斜め方向・横方向の順にハケ調整を施す。83・85は受け口状口縁を有する。87は摩滅が激しいが外面にハケ調整を施す。88は底部の破片であるが、外面に平行タタキ痕が残る。

口径は81が11.0cm、83が17.2cm、84が18.4cm、85が17.6cm、86が18.0cmを測る。色調は81がにぶい黄橙色、82・85・87が橙色、83・84・88がにぶい橙色、86がにぶい浅黄橙色を呈する。胎土はほとんどが密で、82・85はやや粗い砂粒を含む。焼成はほとんどが良好だが、82のようにやや軟質なものもある。

SK-05 89～96は土師器の甕である。口縁部は、頸部から外側に外反しつつ立ち上がり、端部を内側に摘み上げて仕上げる。89・90・91・94・96の外面および91・94・96の内面には斜め方向のハケ目調整を施す。口径は89が10.4cm、90が11.0cm、91が12.4cm、92が13.2cm、93・94が16.2、95が18.6cm、96が25.6cmを測る。色調は89・90・95・96が橙色、91が明褐灰色、92が黒褐色、93が淡赤橙色、94がにぶい黄褐色を呈する。胎土は89・90・92はやや粗い砂粒を含み、そのほかは微砂粒を含む。焼成はすべて良好である。

97は土師器の鉢である。内外面にハケ目調整を施し、口径25.8cmを測る。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は微砂粒を含む。焼成は良好である。

98～104は土師器の碗である。外面はナデ調整で仕上げるが、指頭による圧痕が残るもの（98～101）もある。99の底部は無調整である。口径は98が12.0cm、99が12.4cm、100が13.4cm、101が13.6cm、102が13.8cm、103が12.4cm、104が14.6cmを測る。器高は98が3.2cm、99が3.8cm、100・101・103が3.7cm、102が4.0cm、104が4.4cmを測る。色調



第13図 SK-01・05出土遺物実測図（その1）

は99が灰白色、100が黄橙色、そのほかは全て橙色を呈する。胎土は99・101がやや粗いほかは全て密である。焼成は99がやや軟質であるほかは全て良好である。

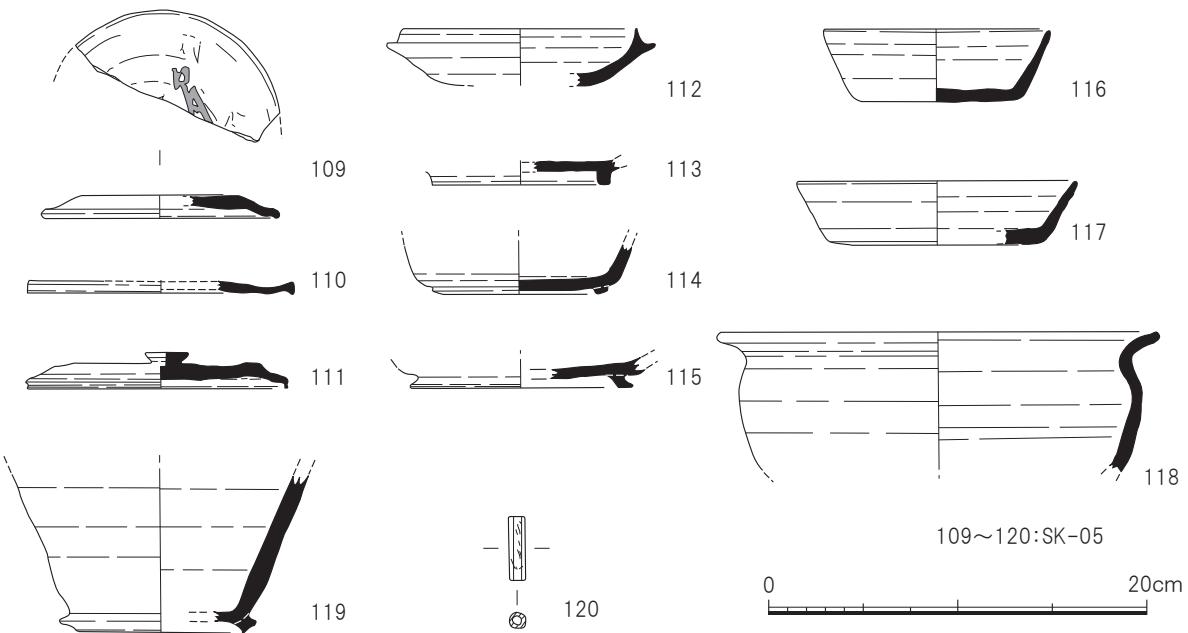
105は黒色土器の椀である。底部付近は無調整であるほかは、ミガキ調整を施す。口径は11.6cm、器高は3.6cmを測る。色調は外面が明赤褐色、内面が黒褐色を呈し、胎土はやや粗い。焼成は良好である。

106～108は土師器の皿である。107は特に内面に煤が付着していることから燈明皿として使用されていたとわかる。口径は106・108が16.4cm、107が16.4cmを測り、器高は106・108が2.3cmを測る。色調は106が橙、107が黒褐色、108が浅黄橙色を呈し、胎土は106・107が密、108は微砂粒を含む。焼成はいずれも良好である。

109～111は須恵器の杯蓋である。つまみを有するもので、109の外面には墨書が残る。口径は109が12.4cm、110が14.0cm、111が13.5cmを測る。器高は111が1.9cmを測る。色調は109が暗灰色、110が灰白色、111が褐灰色を呈する。胎土・焼成はいずれも良好である。

112～117は須恵器の杯身である。112は口縁にかえりを持ち、113～115は高台を有するもの、116・117は平底のものである。112は外面はヘラ削りのちナデ調整、内面にはナデ調整を施す。113～115は底部をヘラ削りしたのち高台を貼り付ける。116・117は底部はヘラ削り、立ち上がりから口縁部にかけてはナデ調整を施す。口径は112が12.0cm、116が12.0cm、117が14.4cmを測る。器高は116が3.8cm、117が3.3cmを測る。色調は112・116・117が灰白色、113が灰色、114・115が赤灰色を呈する。胎土はいずれも密で、焼成は117がやや軟質であるほかは良好である。

118は須恵器の鉢である。外面はヘラ削りのちナデ調整、内面はナデ調整を施す。口径

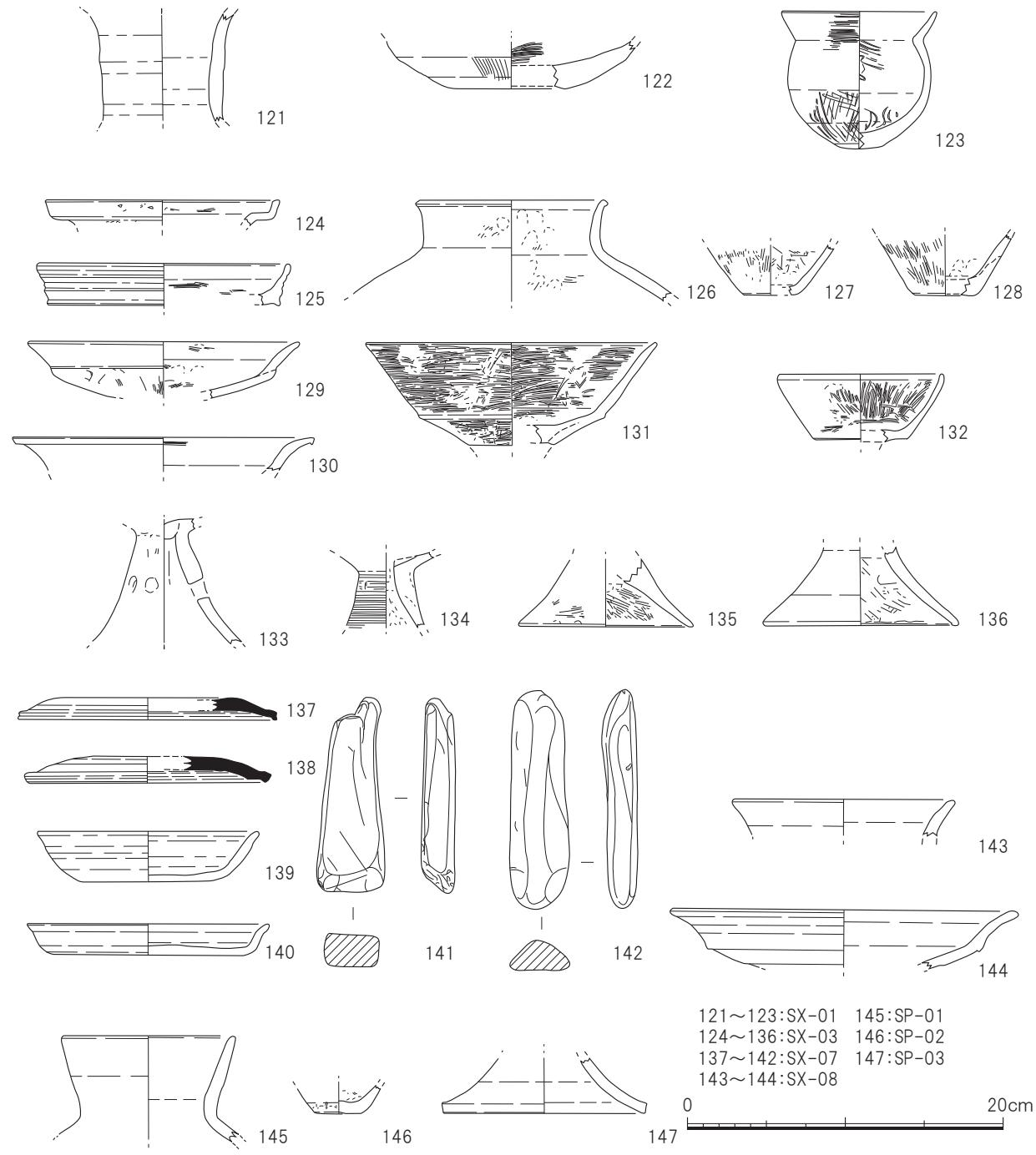


第14図 SK-05出土遺物実測図（その2）

は23.4cmを測る。色調は明褐灰色を呈し、胎土は密、焼成は良好である。

119は須恵器のこね鉢である。貼り付け高台を有する。色調は褐灰色を呈し、胎土は微砂粒を含む。焼成は良好である。

120は滑石製の管玉である。長さ3.4cm×幅0.9cmを測る。灰オリーブ色を呈する。



第15図 SX-01ほか出土遺物実測図

SX-01 121は土師器の長頸壺である。摩滅が激しく表面調整は不明である。色調は灰色、胎土は2mm以下の砂粒を含み、焼成は軟質である。

122は土師器の壺の底部である。内外面にハケ目調整を施す。色調は橙色、胎土は3mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。

123は土師器の小型丸底壺である。体部外面の調整については底部付近に粗いハケ目、口縁部は横方向のハケ目調整を施す。内面には斜め方向のハケ目調整を施す。口径8.8cm、器高8.7cmを測る。色調はにぶい橙色、胎土は微砂粒を含み、焼成は良好である。

SX-03 124・125は土師器の壺または甕の口縁部である。124は受け口状口縁を有し、口径14.2cmを測る。125是有段口縁を持つもので、擬凹線紋が表現される。色調は124が灰褐色、

125は浅黄色を呈する。胎土は124が微砂粒を含み、125は密である。焼成は124が良好、125がやや軟質である。

126は土師器の短頸直口壺である。摩滅が著しいものの、内外面ともにわずかにハケ目調整痕と指頭による圧痕が残る。口径11.4cmを測り、色調は橙色を呈する。胎土は1~2mmの砂粒を多く含み、焼成は良好である。

127・128は土師器の壺の底部の破片である。外面にはハケ目調整痕、内面には指頭による圧痕が残る。

129~134は土師器の高杯である。129~131は杯底部と立ち上がりとの接点が段をなすもので、内外面にハケ目調整を施すものである。132は杯部の屈曲が明瞭で、内外面ともにハケ目調整痕が残る。口径は129が16.6cm、130が17.6cm、131が18.2cm、132が10.2cmを測る。133は脚部の破片で、三方向の透かし孔を有する。色調は129が淡橙色、130~133が橙色を呈する。胎土は129~132が密で、133は微砂粒を含む。焼成は129が軟質で、そのほかは良好である。

134~136は土師器の器台である。134は脚部に横方向の直線紋が表現される。135・136は内外面にハケ目調整を施す。色調は134が橙色、135が灰白色、136が浅黄色を呈する。胎土は134が密、135・136は微砂粒を含む。焼成はいずれも良好である。

S X - 0 6 137・138は須恵器の杯蓋である。内外面ともに横方向のナデ調整を施す。口径は137が16.3cm、138が15.0cmを測る。色調は137が褐灰色、138がにぶい黄橙色を呈する。胎土は137が微砂粒を含み、138は密である。焼成はいずれも良好である。

139は土師器の杯である。内外面ともにナデ調整を施す。口径14.0cm、器高4.3cmを測る。色調は橙色を呈し、胎土は密、焼成は良好である。

140は土師器の皿である。内外面ともにナデ調整を施し、口径15.0cm、器高2cmを測る。色調は明黄褐色を呈し、胎土は密、焼成は良好である。

141・142は石製品である。141は砂岩質で、長さ12.4cm、幅4.4cmを測る。142はチャート質で、長さ13.4cm、幅3.8cmを測る。いずれも砥石もしくは叩き石として使用していた可能性がある。

S X - 0 8 143は土師器の甕の口縁部である。摩滅が著しく、調整は不明である。口径14.0cmを測る。色調は橙色を呈し、胎土は粗く、焼成は軟質である。

144は土師器の高杯である。杯底部と立ち上がりとの接点が段をなすもので、色調はにぶい橙色、胎土は粗く、焼成は良好である。

S P - 0 1 145は土師器の長頸壺である。外面はナデ調整を施し、口径10.7cmを測る。色調は灰白色、胎土は密、焼成は良好である。

S P - 0 2 146は土師器の壺または甕の底部である。外面にはハケ目調整を施し、底部はナデる。色調はにぶい黄橙色、胎土は密、焼成は良好である。

S P - 0 3 147は土師器の高杯である。摩滅が著しく調整は不明である。色調は淡黄色を呈し、胎土は微砂粒を含み、焼成は良好である。

遺物包含層 148は土師器の甕である。体部外面にハケ目調整を施し、内面には指頭による圧痕が残る。口径12.0cmを測る。

149は土師器の器台の脚部の破片か、壺の頸部と思われる。内外面ともに指頭による圧痕が残る。

150は土師器の壺の体部である。外面にミガキ調整、内面にナデ調整を施す。

151は土師器の有孔鉢の底部である。平底で、孔の直径は約1cmを測る。

152は弥生土器の器台の受部である。端面櫛描直線紋を施したのち、円形浮紋を貼り付ける。口径18.3cmを測る。

153は土師器の壺または甕または壺の底部である。外面にはハケ目調整、内面に指頭による圧痕が残る。

154・156・157は土師器の高杯である。156は杯部が内湾するものである。157は三方に透かし孔を有する脚部の破片である。内外面にハケ目調整を施す。口径15.8cmを測る。

158は灰釉陶器の椀である。貼りつけ高台の断面は三角形を呈する。

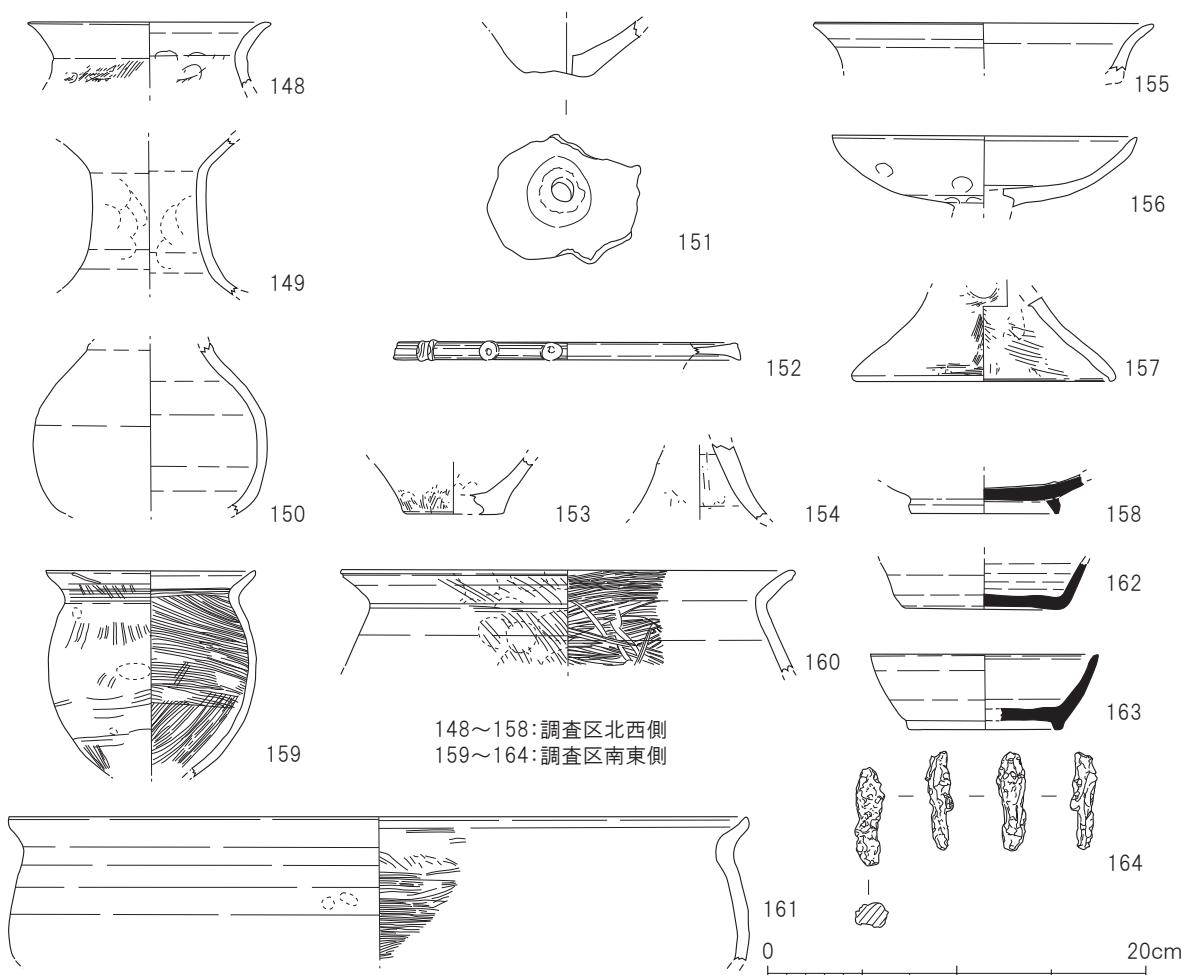
155は土師器の壺の口縁である。受口状口縁のものとみられ、外面にハケ目調整、内面にミガキ調整を施す。口径18.0cmを測る。

色調は148・156が浅黄橙色、149・150・155がにぶい橙、151が灰白色（外面）・暗褐色（内面）、153が淡橙色（内面）・黒色（外面）、154・157が橙色、158がオリーブ灰色を呈する。

遺物包含層 159は土師器の壺である。体部内外面にハケ調整を施し、口径11.0cmを測る。

（調査区南東側） 160は土師器の甕である。外面および体部内面は斜め方向のハケ目調整を、口縁内面は横方向のハケ調整を施す。

161は土師器の鉢である。体部内面にはハケ目調整を施す。口径29.0cmを測る。



第16図 遺物包含層出土遺物実測図

162・163は須恵器の杯である。いずれも平底で、163には高台が付く。162の底部はヘラ削り、体部内外面はナデ調整を施す。163は内外面ともにナデ調整を施す。163は口径12.4cm、器高4.0cmを測る。

164は金属塊である。長さ5.2cm、幅1.3cmを測る。

色調は159～161がにぶい橙色、162が明褐灰色、163が灰色を呈する。胎土はいずれも密で、焼成は良好である。

**まとめ** 隣接する過去の調査事例として、当調査地の東側における昭和62年度調査と強く関連する成果が得られた。昭和62年度調査では、古墳の周濠、竪穴住居、落ち込みなどが検出されており、今回の調査によって古墳の周濠の続きとなる箇所を検出することができた。古墳の規模は直径約24mに復元される。また、出土した埴輪片には人物埴輪が含まれることから、古墳後期ごろにその時期が比定できる。

また、古墳の周濠と切り合う形で検出された、SD-01については、先述した通りSD-03の埋没後に形成されたものとみられる。SD-01からは飛鳥～平安期を中心とする須恵器・土師器類が多量に出土しているのに加え、その中に混じる形で埴輪片が出土した。このことから、古代小篠原集落地として栄えてきた当該地が、弥生時代は集落地、古墳時代後期に至り古墳が形成されたのち、飛鳥～平安時代にその古墳が荒廃、もしくは削平されていったという一連の流れが推察できる。(岡山)

付記：執筆にあたり、高橋克壽氏、辻川哲郎氏にご指導・ご鞭撻をいただいた。記して感謝申し上げます。



調査区西側全景



調査区東側全景



調査区北壁断面



調査区東端周壁断面



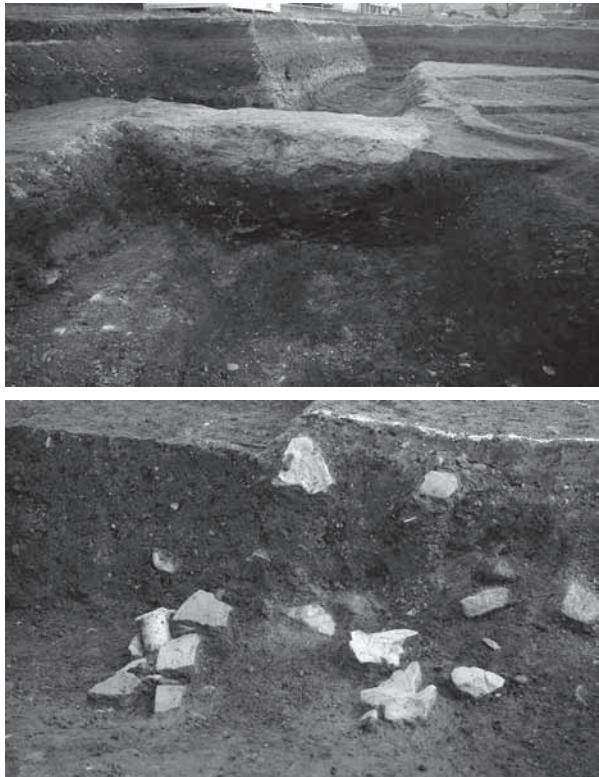
調査区北東周壁断面



調査区北西周壁断面



古墳周濠

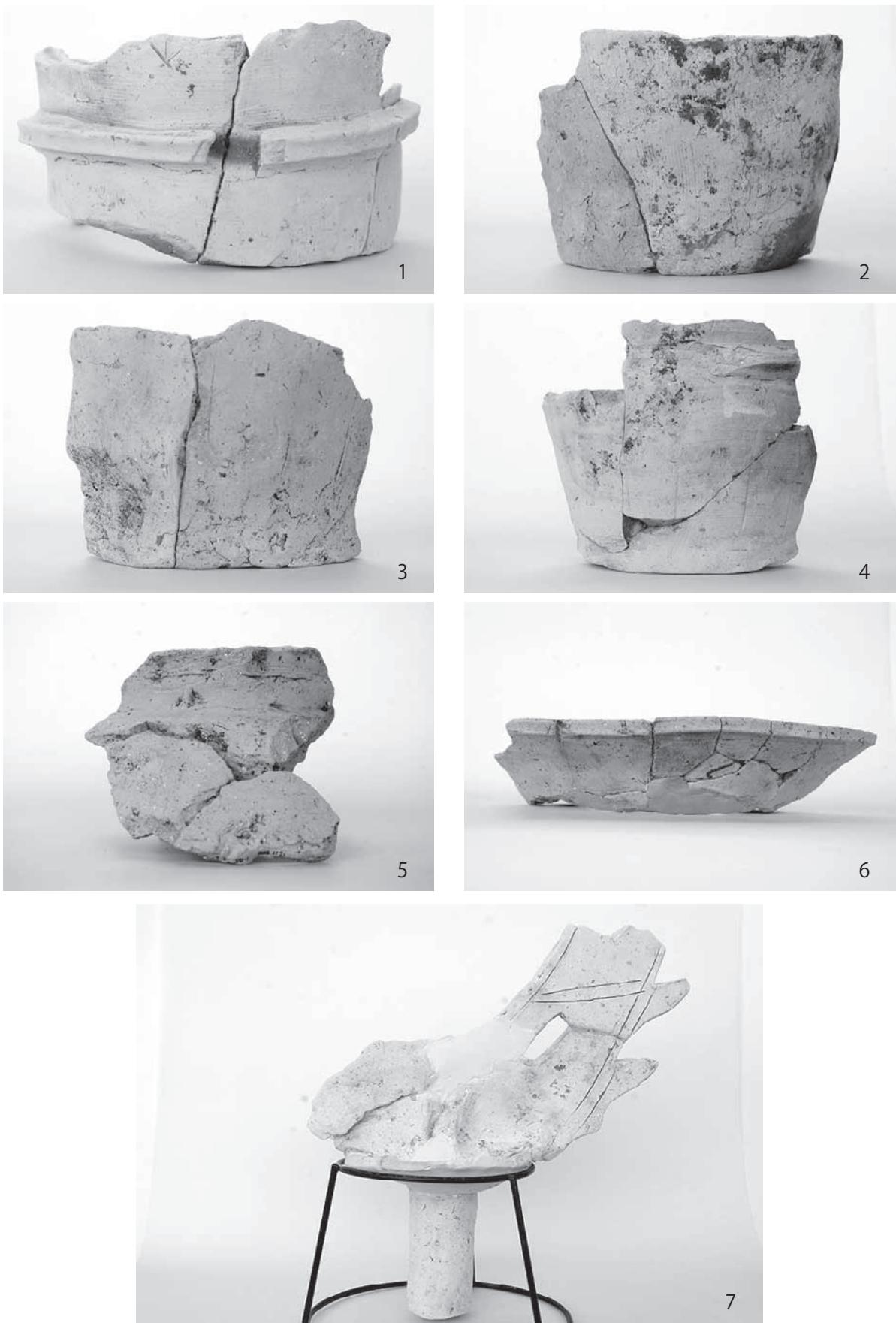


上：古墳周濠断面

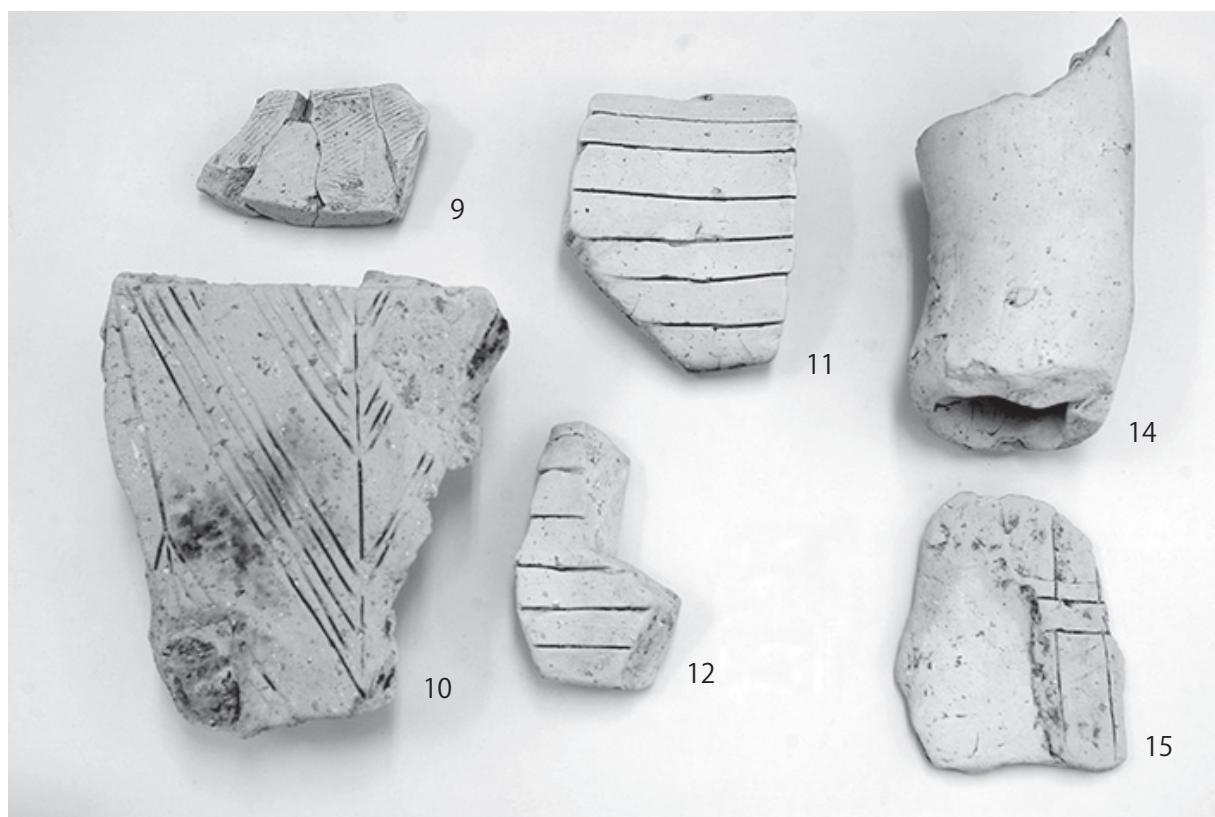
下：周濠内埴輪



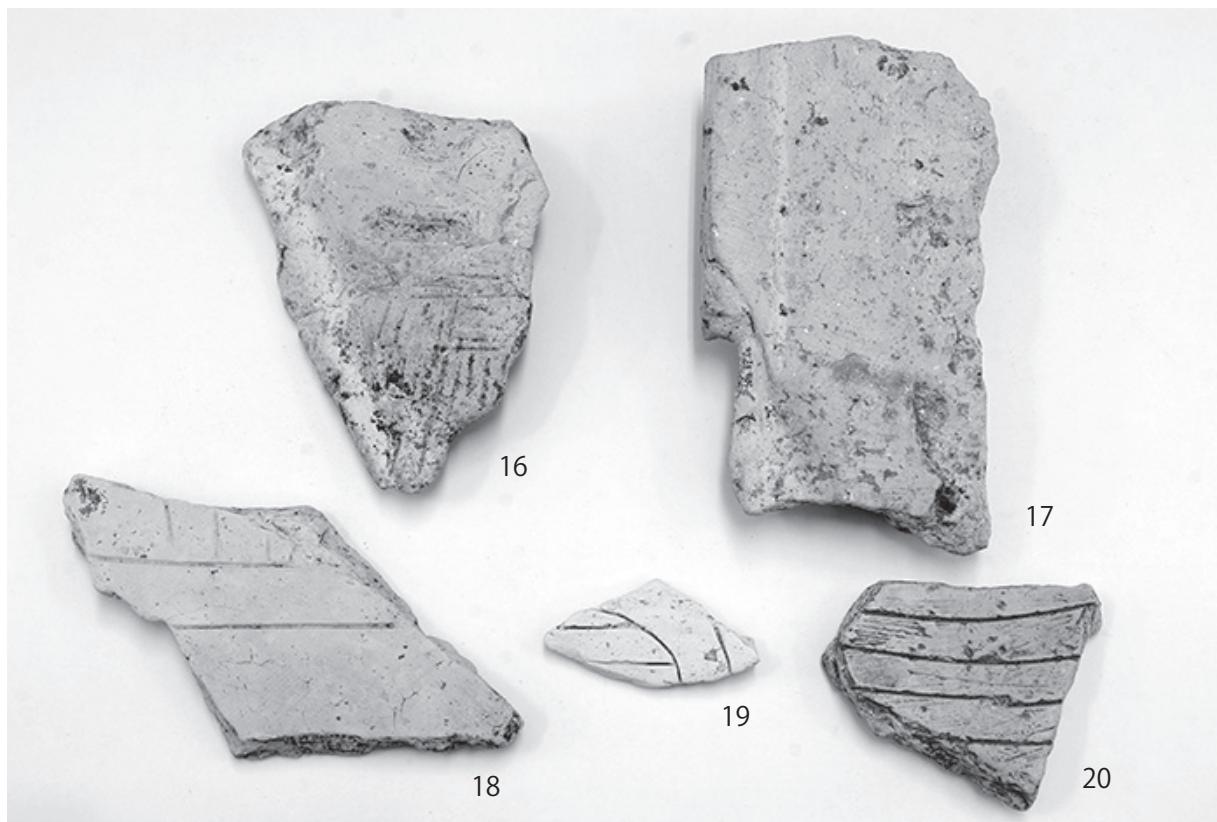
SK-01 土器出土状況



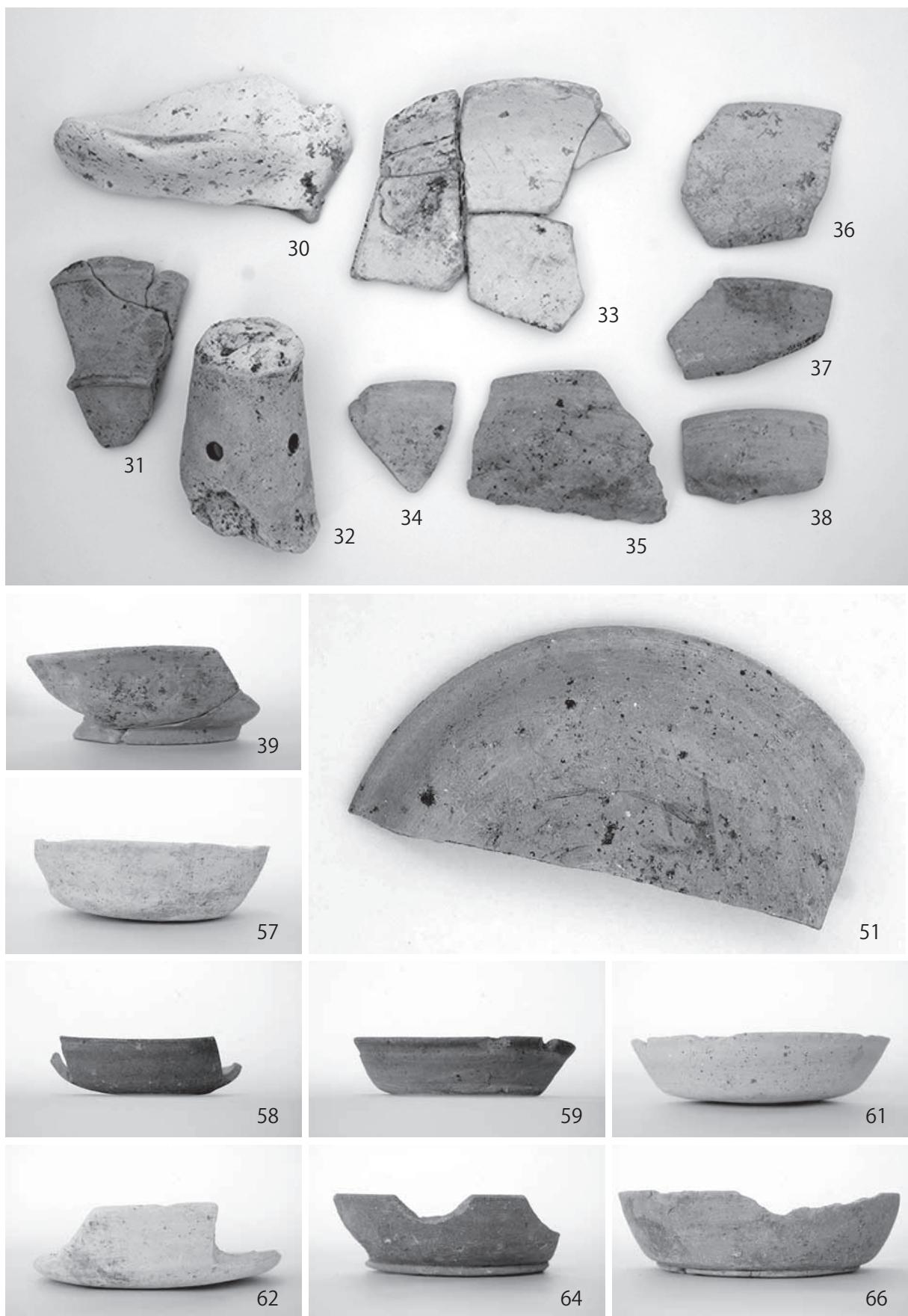
出土埴輪（その1）



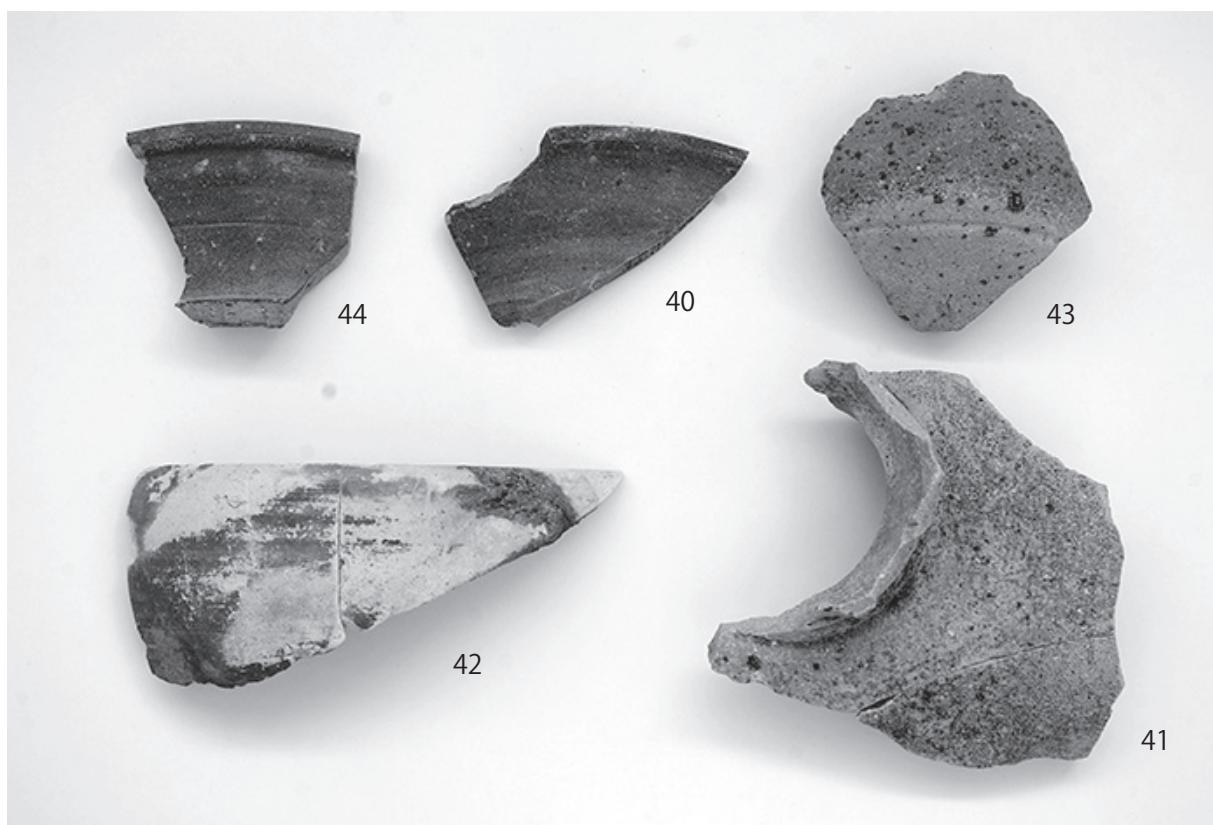
出土埴輪（その2）



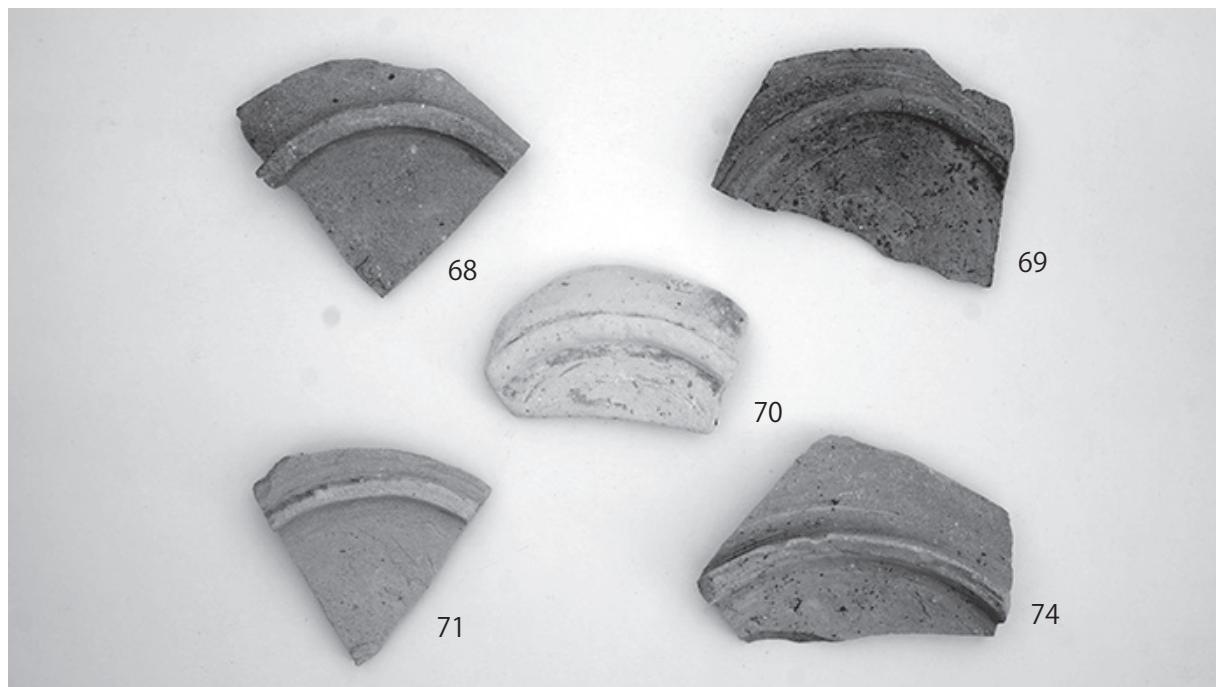
出土埴輪（その3）・SD-01 出土土器（その1）



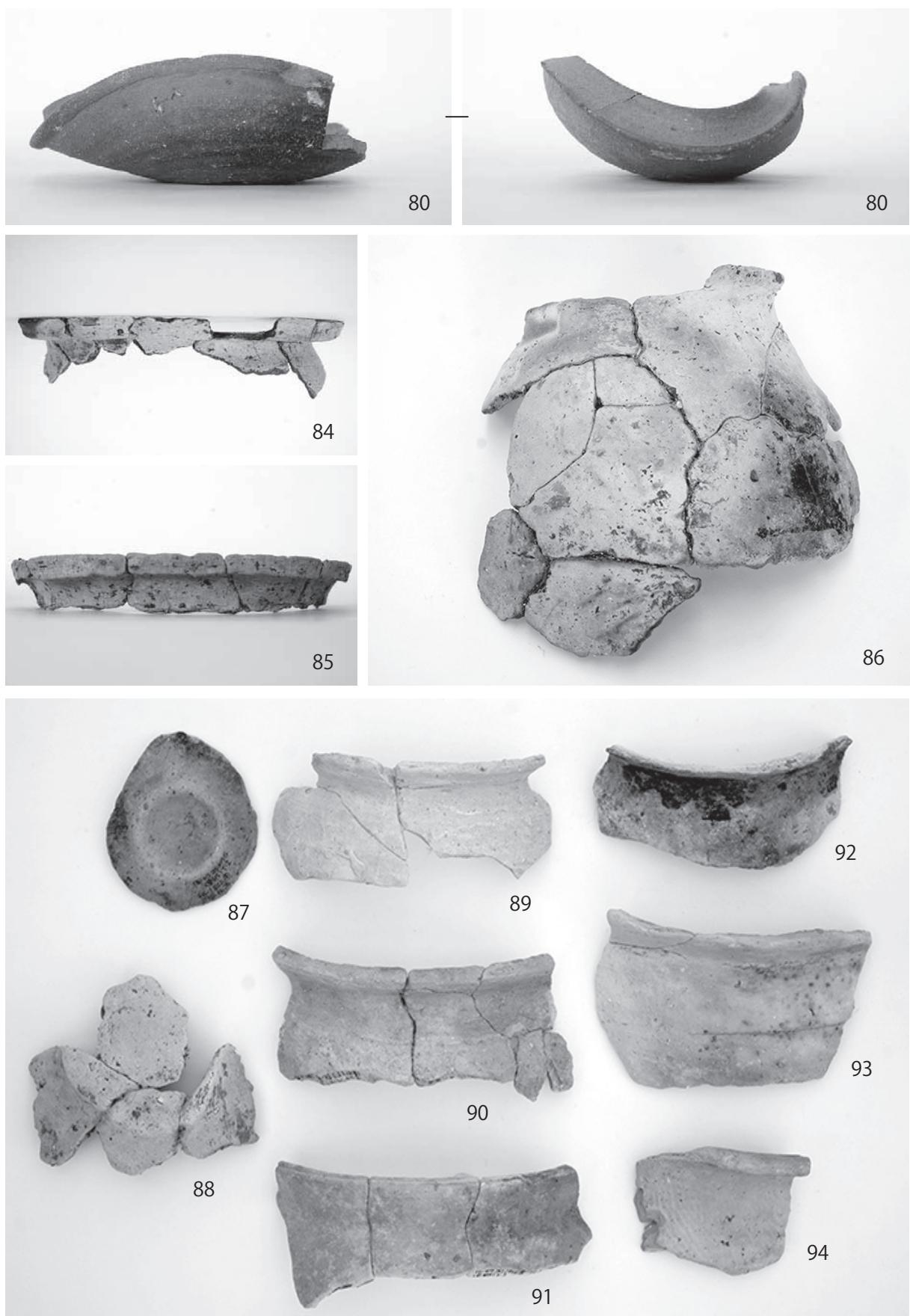
SD-01 出土土器（その2）



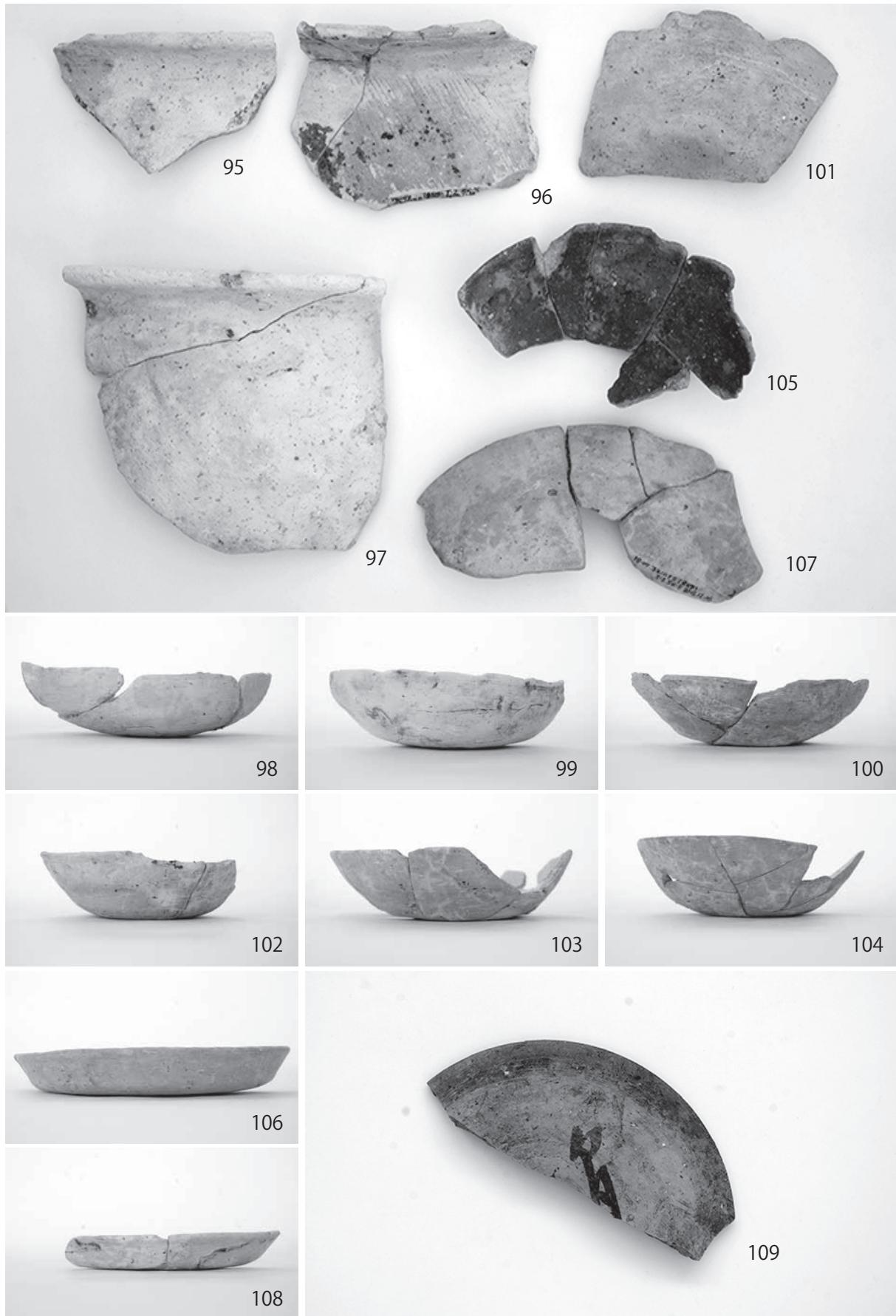
SD-01 出土土器（その3）



SD-01・SD-03 出土土器



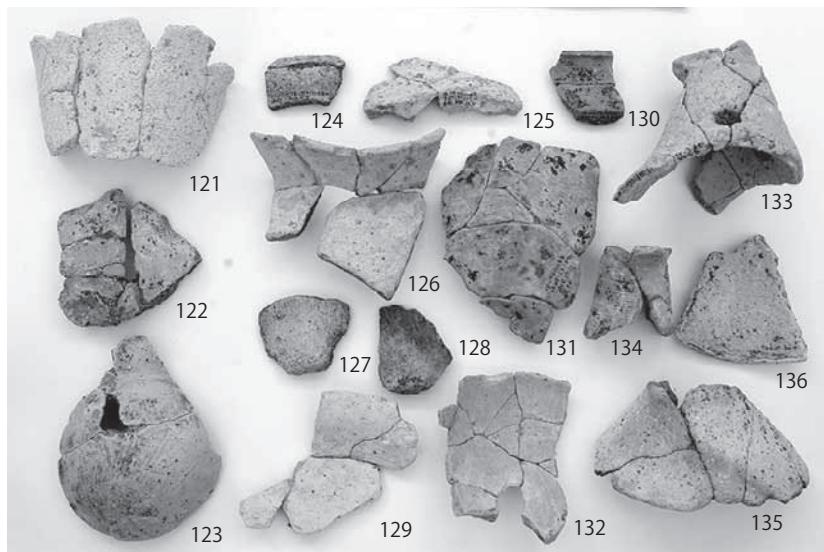
SD - 03 • SK - 01 • SK - 05 出土土器



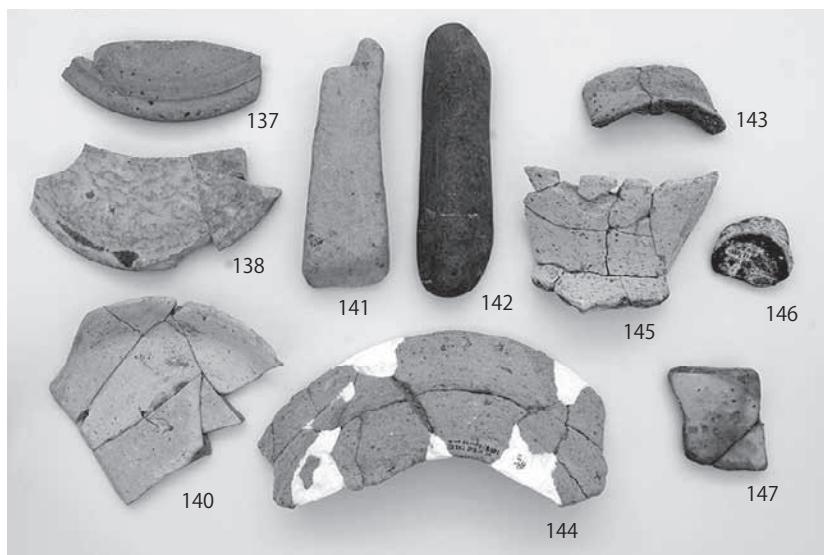
SK-05 出土土器



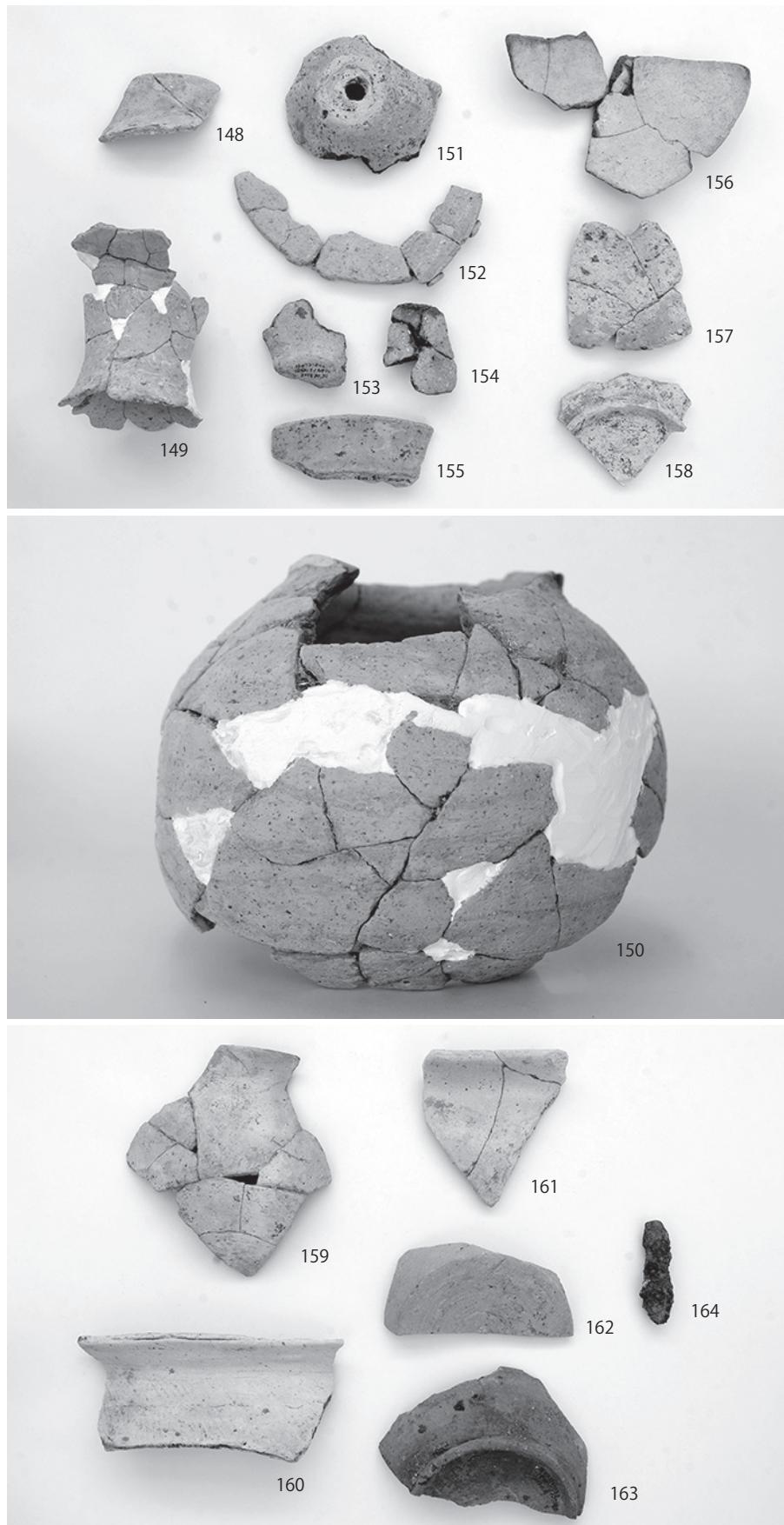
SK-05 出土遺物



SX-01・SX-03  
出土土器



SX-07・SX-08  
SP-01・SP-02  
SP-03 出土遺物



遺物包含層出土遺物

## 第4章 よし じ やく し どう 吉地 薬師堂 遺跡

**調査地** 野洲市吉地字二丁目 1312 番地 4

**調査原因** 事務所建設

**調査期間** 平成 30 年 12 月 4 日～12 月 21 日

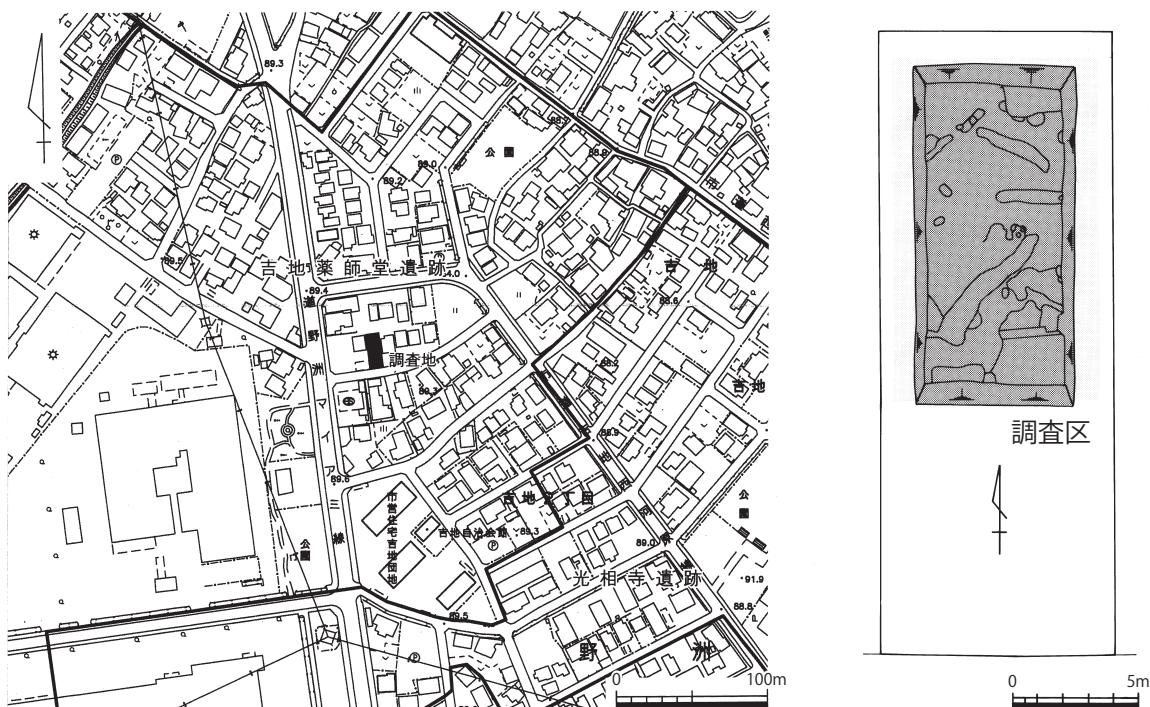
**調査経過** 吉地薬師堂遺跡は、南北約 700m、東西約 1km に及ぶ奈良時代から近世にかけての複合遺跡で、本調査地周辺では鎌倉時代の区画溝を有する集落跡が検出されている。したがって、本調査地も鎌倉時代頃の集落の一角であると考えられた。

今回の調査は、事務所建設に先立って実施したものである。平成 30 年 10 月 4 日に埋蔵文化財発掘の届出を受理し、事務所建設部分に調査区を設定し本発掘調査を実施した。調査地の敷地面積は 229.79m<sup>2</sup>、設定した調査区は 1 箇所、面積は 108m<sup>2</sup> (13.5m × 8m) である。なお、土を置くスペースの関係上、南北反転調査とした。

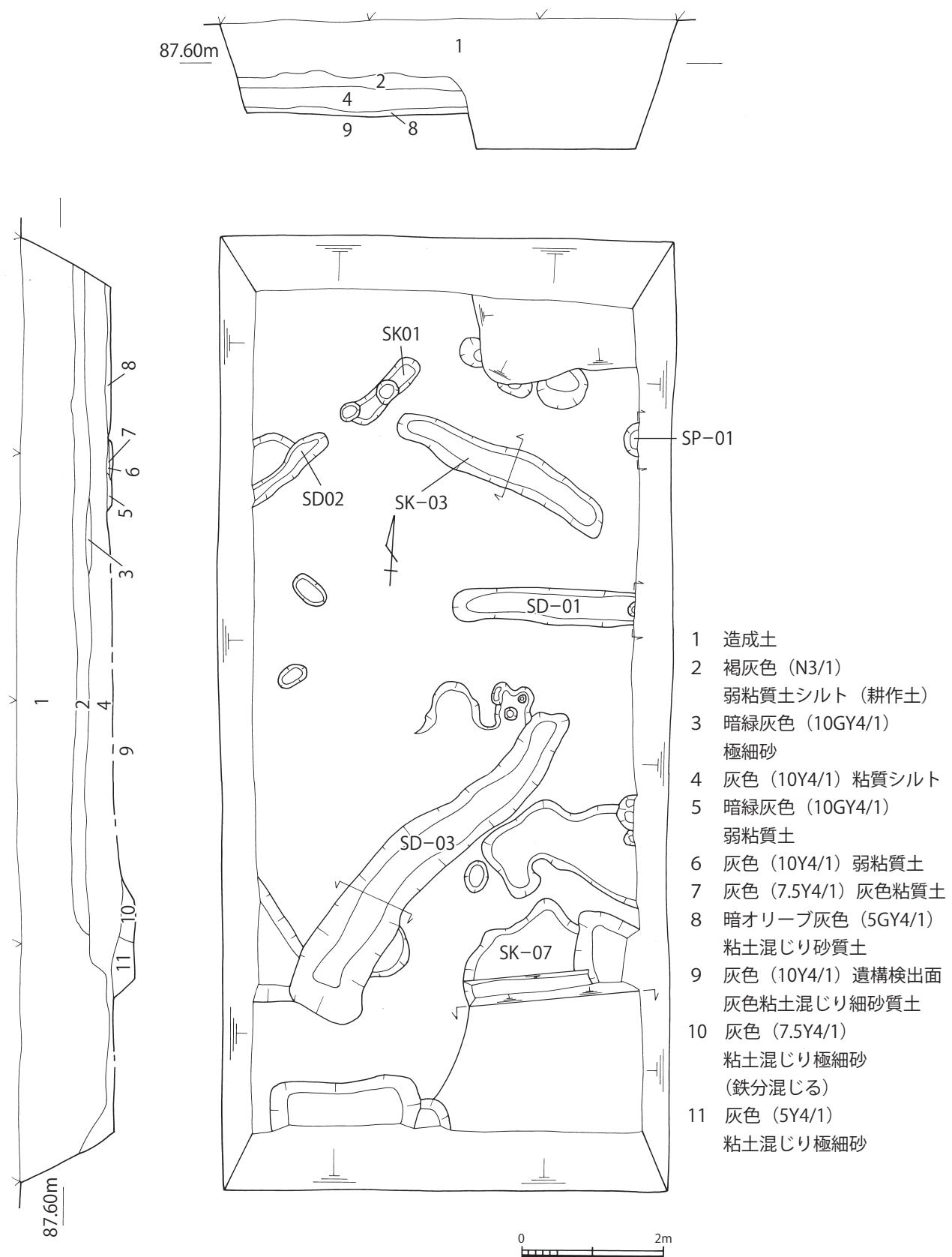
**基本層序** 地表面下約 0.8m までは盛土で、次に褐灰色弱粘質シルト、灰色弱粘質シルトが続く。その下の暗オリーブ灰色粘土混じり砂質土が遺構面である。

**遺構** 主な遺構としては溝、ピット、土坑がある。

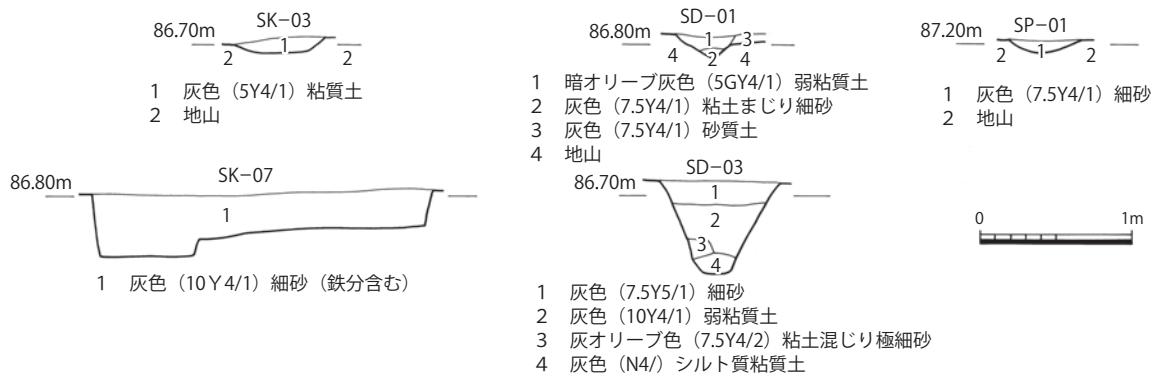
**溝** 3 条存在し、いずれも素掘溝である。SD01 は調査区の中央やや北寄りに位置し、東西のほぼ中心ラインから始まり、調査区東側へ延びる。SD02 は調査区北西隅に近いところにあり、南西方向へ延びている。この溝の中軸線の延長上、ほとんど接する位置に SK01 があるが、途中で途切れているものの、方位等が一致することから一連の遺構として掘削された可能性も考えられる。SD03 は調査区南側に位置し、西壁の際から始まり、調査区中央付近で終わっている。この溝は深く、遺構検出面から 46～52cm 下のベースと



第1図 調査地位置図・調査区配置図



第2図 調査区平面図・断面図



第3図 遺構断面図

考えられる灰色粘土層に達していた。埋土は上層が灰色細砂層、下層が灰色弱粘質土層で、この層下部に灰オリーブ色粘土混じり極細砂が固まりで混じる。なお、調査区外から南東方向へ流れてくる溝が1条あり、SD03に接続している。

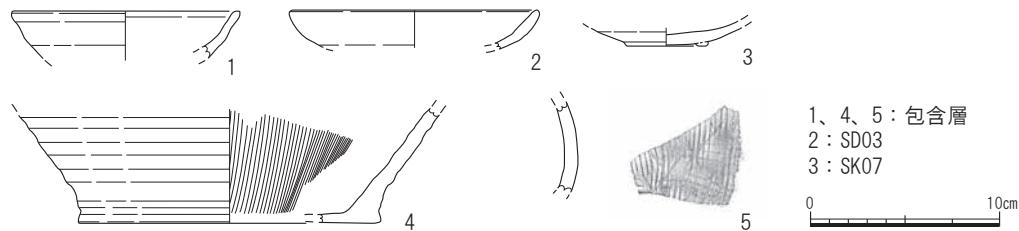
**ピット** 8基存在するが、ばらばらに所在し、建物等を復元することはできなかった。多くが丸底で、柱穴の痕跡も見られない。

**土坑** 8基存在する。SK01は前述したとおり、SD02と一連の遺構である可能性が高い。SK02はSD02の上から掘りこまれている浅い落ち込みで、現状は半円状を呈する。SK03はSK01の南西端付近から東壁に向かって延びる、中軸線を北西－南東方向にすえた細長い土坑で、素掘溝の可能性もある。SK04は調査区南側の、西壁側に位置する大型の土坑である。状況から、調査区北側へも広がっていた可能性があるが、北側の調査時にはそれらしい痕跡は見出せなかった。SK05はSP06、SP07と近接して存在し、最近の搅乱によつて半分ほどを失っている。それほど大きくはないため、ピットとみなしてもよいと考えられるが、SP06よりやや大きいため、土坑とした。SK06は調査地南側に位置し、調査区の中軸線上から東へ延び、調査区外へと続く。SK07は調査地南東隅に広がる大型の土坑で、表面の水はけが悪く、遺構の北側約1/3しか調査していない。埋土は鉄分を含む明瞭な灰色細砂で、かなり深くまで続いているようであった。なお、湧水があったため完掘していない。SK08は調査区南西隅にある長方形の土坑で、SK07の一部を削っている。遺物は出土せず、形状や埋土の堆積状況から比較的新しい時代のものと考えられる。

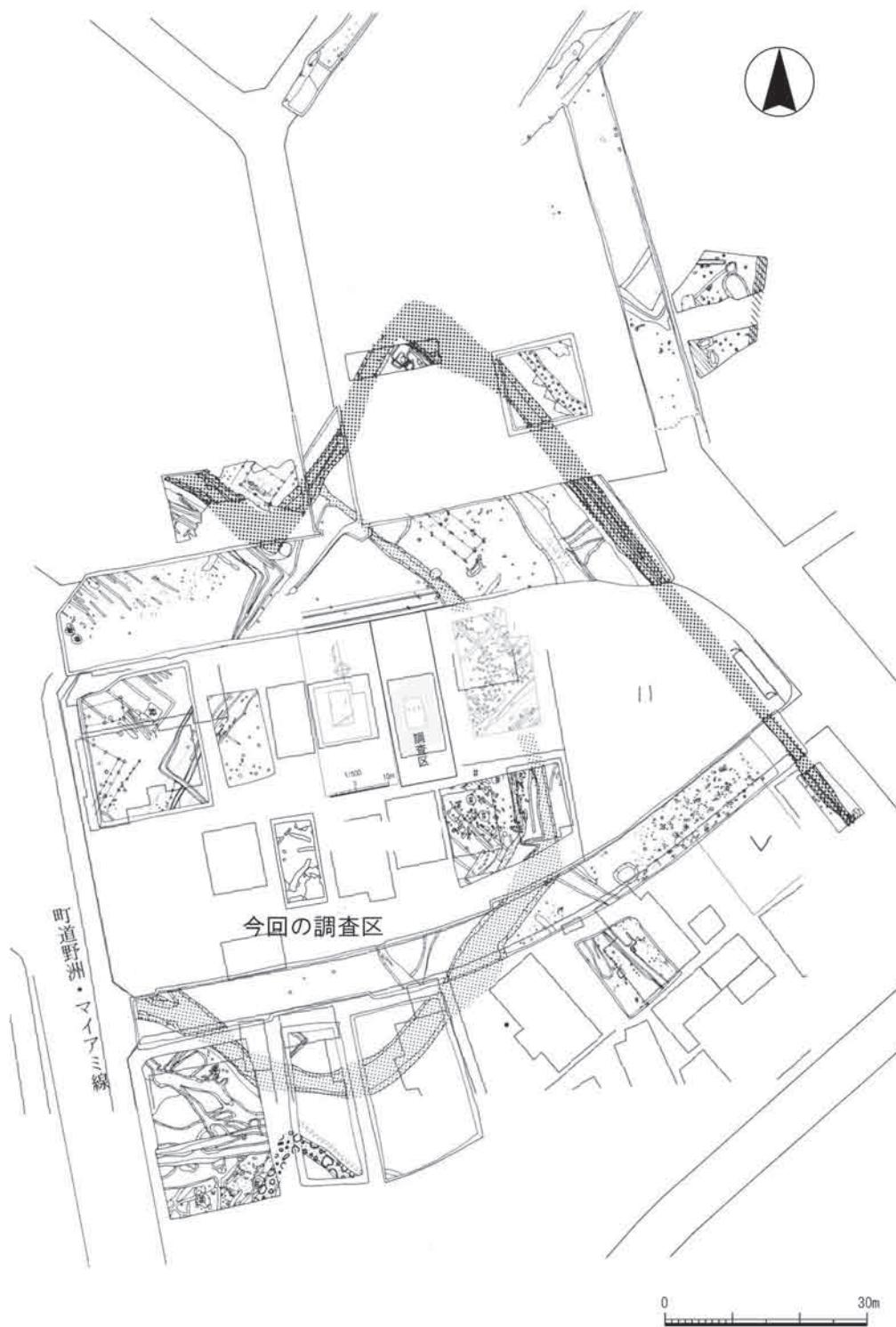
**遺物** 本調査で出土した遺物はコンテナ1箱分と少なく、さらにほとんどが小片であったため、実測できたのは5点であった。1・2は土師皿である。1は口径11.8cm、残器高2.6cmで、口縁部にヨコナデを施す。口縁部の立ち上がりから、土師皿としてはやや深めであると推測される。2は口径12.8cm、残器高2.0cmで、1に比べると口径がやや大きく深い。3は黒色土器で、高台のみが残存し、碗の底部と考えられる。高台径4.2cm、残器高1.0cmを測る。4は信楽焼の擂鉢で、底径15.8cm、残器高6.8cmを測る。内部の擂り目が密に入っているため、15世紀以降のものと考えられる。5は須恵器の体部で、甕と考えられる。小片で、内面はナデ、外面は平行タタキがみられる。

**まとめ** 本調査地周辺はたびたび発掘調査が行われており、遺跡の全貌がおおよそ明らかになっている。特に、本調査地に隣接する一帯はこれまでの調査で区画溝と考えられる遺構が検出されており、溝によって区画された中世集落の存在が知られている。本調査地は区画溝

令和元年度野洲市埋蔵文化財調査概要報告書



第4図 遺物実測図



第5図 本調査地周辺の調査成果（『中主町文化財報告書 第50集』所収の図に加筆）

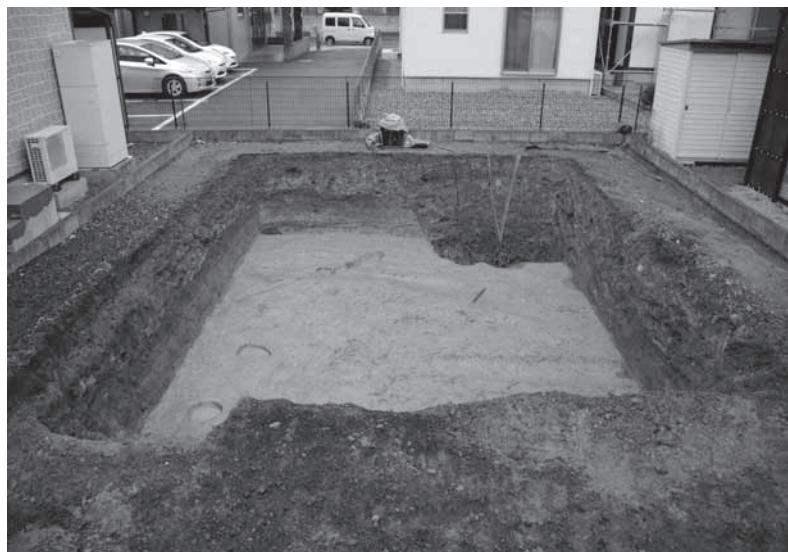
の内側にあたるため、建物跡等の存在が予想されたが、それらしい遺構は検出できなかった。本調査地で検出した遺構の多くは、埋土の状況から近代の所産と考えられるので、本調査地周辺は近世以降にかなり人の手が加えられている可能性もあると考えられる。出土遺物は主に中世のもので、本調査地の遺構面の形成は周辺同様、中世であると考えられるが、本調査地の遺構・遺物だけから土地利用の変遷を追うことは難しい。そこで、周辺の調査事例から、本調査地の性格を検討することにしたい。

昭和61年度に土地区画整理事業として調査地南側の市道で実施した発掘調査（第2次調査）では、溝と掘立柱跡が検出されている。そのうち、調査区中央付近に南西から北東へ向けて掘削されているSD2105と、調査区西端に北西から南東へ向けて掘削されているSD2101が区画溝に当たる。SD2101とSD2105は、昭和62年度に道路南側で実施された個人住宅建設に伴う発掘調査（第5次調査）で、ひとつに繋がることが確認されている。掘立柱建物は調査区の東側にかたまっており、全体的に東側のほうが西側より遺構密度が高く、西側へ行くほど遺構密度が低くなり、なおかつ、区画溝であるSD2101とSD2105の外側のほうが内側より遺構密度が高い。本調査地東側隣接地において平成6年度に実施した発掘調査では、区画溝の続きと掘立柱建物等が検出されている。掘立柱建物は2棟あり、ともに主軸を南東－北西方向に取る。一方、本調査地北側隣接地で住居兼事務所建設に伴い平成5年度に実施した発掘調査では、溝とピットを検出しているものの、遺構はまばらで、ピットも掘立柱建物を構成するものは見られなかった。本調査地における発掘調査成果を合わせると、区画溝内側は遺構密度が低く、外側のほうが内側より遺構密度が高いといえる。その他、本調査地東北東に位置する吉地字二丁目1317番地において平成2年に実施した発掘調査では、時期が近接する2面の遺構面が検出され、溝やピットが多数検出されている。この場所は先に検出されている区画溝の延長ライン上に位置するが、上層・下層とも区画溝は検出されていない。したがって、区画溝がどのようにめぐらされていったかについては若干の疑問が残るが、全体の様相として区画溝の内側に建物が密に建てられていたとは考えにくく、それなりの空閑地を有していた可能性が高い。区画溝内を屋敷地と仮定すると、本調査地は屋敷地内の空閑地に位置すると考えられる。ちなみに、平成26年3月に吉地字一丁目1178番地ほかで個人住宅建設に伴い実施した発掘調査では、本調査地周辺を寺院跡かと推察しており、区画溝の内側が屋敷地か寺院境内かについてはなお検討の余地があると考えられる。

なお、本調査地から須恵器片が1点出土している。遺構に伴うものではないため混入の可能性が高いが、この地域の開発が古代まで遡ることを示唆する点で注目される。（井上）



調査風景



反転前調査区完掘状況（南から）



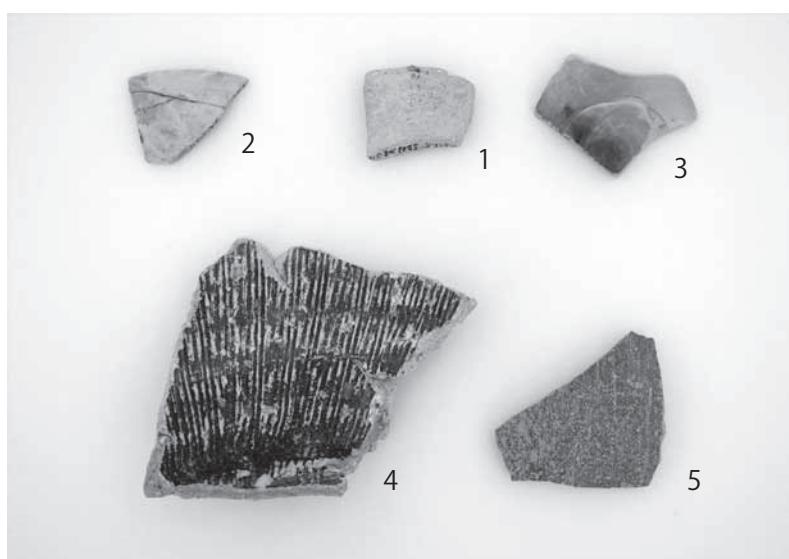
反転前調査区周壁断面



反転後調査区完掘状況（南東から）



反転後調査区周壁断面



出土遺物

## 第5章 夕日ヶ丘北遺跡

調査地 野洲市大篠原字石佛 951 番地 外5筆

調査原因 福祉施設建設

調査期間 平成 31 年 4 月 8 日～令和元年 5 月 10 日

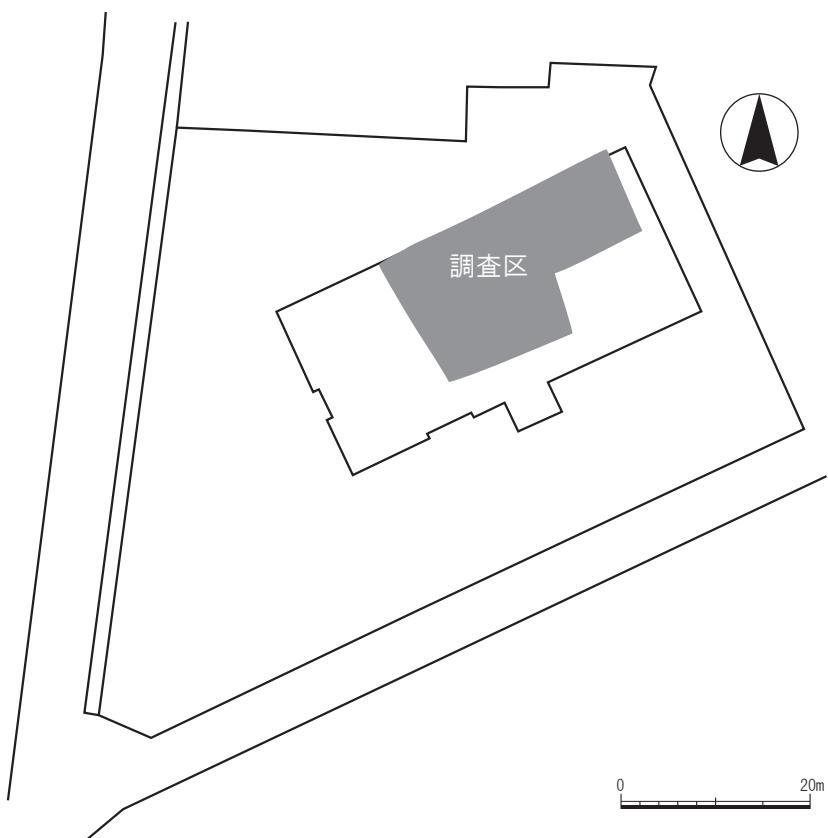
調査経過 夕日ヶ丘北遺跡は市内東側に位置し、夕日ヶ丘遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地に指定されている独立丘陵「向山」の北側一帯にあたる。本調査地は以前、野洲町社会教育センター及び篠原幼稚園があったところであり、その用地北側は現在、コミセンしのはらとして活用されている。本調査地南側で以前に行われた発掘調査で旧河道と考えられる大溝が検出されており、本調査地においてもその痕跡が見いだせるのではないかとの期待があった。

今回の調査は、特別養護老人ホームの建設に先立って実施したものである。平成 30 年 12 月 6 日に埋蔵文化財発掘の届出を受理し、平成 31 年 3 月 4 日から 8 日にかけて試掘調査を行った結果、一部の調査区で遺構が検出されたため、部分的に本発掘調査を実施することとなった。調査地の敷地面積は 1400m<sup>2</sup>、設定した調査区は 1 箇所、面積は約 309m<sup>2</sup>である。

基本層序 地表面下約 1.1 ～ 1.3m までは盛土で、その下は調査区の東西で異なるが、東側では青灰色弱粘質土、灰色シルト、褐灰色粗砂、暗青灰色粗砂、灰色極細砂の順に堆積し、西側は灰色砂混じり弱粘質土、灰色砂質土、灰色シルト、青灰色極細砂、青灰色砂の順に堆積する。遺構面は灰色極細砂層上面と考えられる。



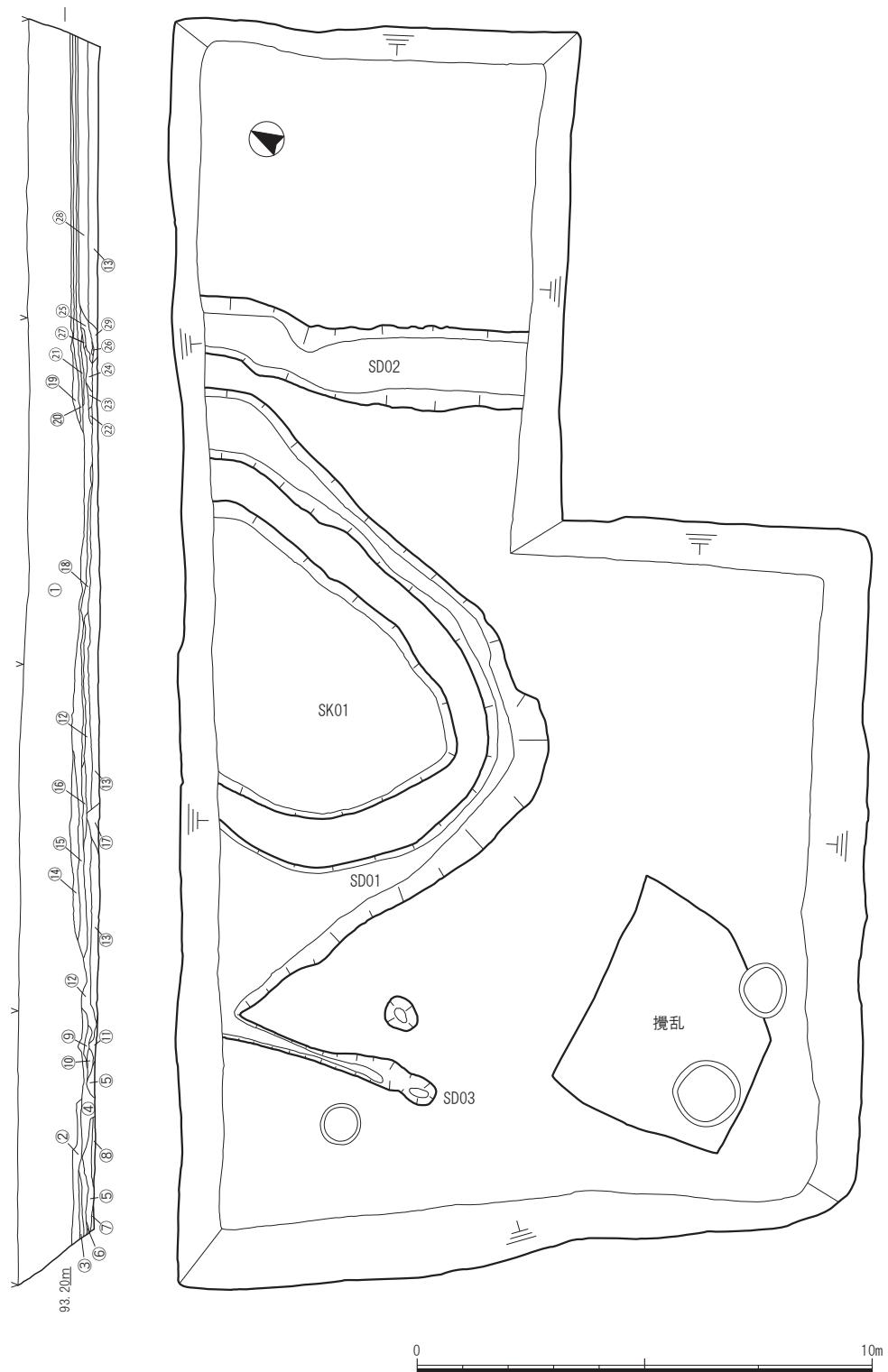
第1図 調査地位置図



第2図 調査区配置図

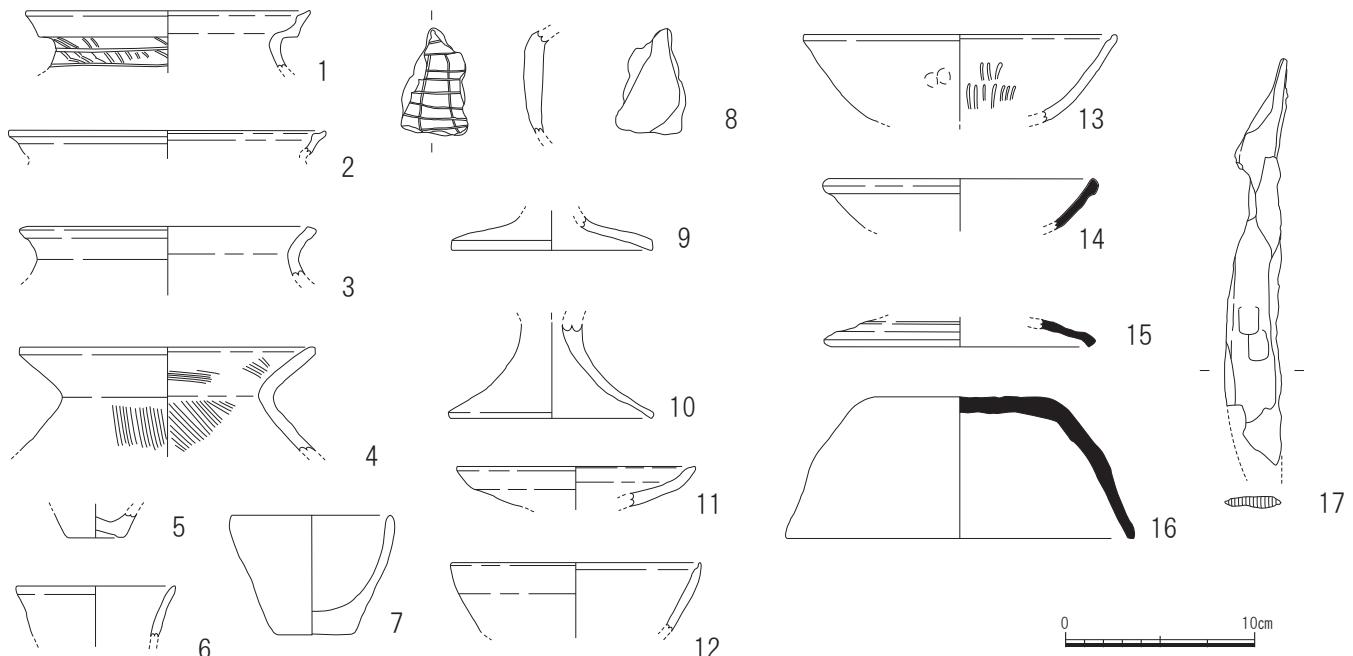
**遺構** 遺構密度は高くなく、検出したのは溝3条と浅い土坑1基、ピット1基のみである。SD01は調査区中央付近に位置し、逆「L」字型を呈し調査区外へ延びる。埋土は上から暗オリーブ灰色シルト、暗オリーブ灰色粘土混じり細砂である。調査区外となるため、北側の様相は不明だが、調査区南西側は大きく広がっており、周溝や区画溝とみるにはやや不自然である。北側の周壁際に腐植土の堆積があり、木を中心とした植物遺体が残存しているが、この層から遺物が集中して出土している。SD02は南東-北西方向に直流する幅広の溝で、人工の溝か自然流路かは判然としない。こちらでも、北側の一角に存在する腐植土層から集中して遺物が出土している。SD03は調査区の西端に近いところにあり、調査区の南北軸の中央付近から始まり、SD01に合流している。試掘調査実施時に、調査区4で検出された溝はこれである。遺物は出土していない。SK01はSD01に囲まれるように存在しているが、極めて浅く、遺物も出土していないため性格は不明である。SP01はSD01とSD03の間に位置するが、周囲に前身建物の浄化槽跡と考えられる攪乱があり、単独で存在したものか、複数あったものが攪乱で破壊され1基だけ残ったのかは不明である。遺物は出土していない。

**遺物** 調査面積に比して遺物量は少なく、コンテナ1箱程度であった。うち、実測したのは17点で、1は弥生土器、2~12は土師器、13は黒色土器、14は施釉陶器、15・16は須恵器、17は木製品である。1は甕で、口縁部は受口状を呈し、口径15.0cm、残器高3.0cmを測る。内面から口縁部外面にかけてはナデ仕上げとし、頸部にはヘラ刻みによる列点文、体部には凹線を施す。2~4は古式土師器の甕である。2は口径16.4cm、残器高1.3cmを



- |                     |                          |                              |
|---------------------|--------------------------|------------------------------|
| 1 盛土                | 11 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粗砂 | 21 褐灰色 (10YR4/1) 細砂          |
| 2 灰色 (N5/) 砂混じり弱粘質土 | 12 暗青灰色 (5PB4/1) 極細砂     | 22 灰色 (5Y4/1) 細砂             |
| 3 灰色 (N5/) 砂質土      | 13 灰色 (N4/) 極細砂          | 23 灰色 (N4/) 細砂               |
| 4 灰色 (N4/) シルト      | 14 灰色 (10Y4/1) シルト       | 24 灰色 (N4/) シルト              |
| 5 紫灰色 (5P6/1) 極細砂   | 15 灰色 (N4/) シルト          | 25 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗砂         |
| 6 灰色 (N5/) 粗砂       | 16 灰色 (N4/) 極細砂          | 26 暗紫灰色 (5P4/1) 極細砂          |
| 7 灰色 (N4/) 粗砂       | 17 青灰色 (5PB5/1) 弱粘質土     | 27 暗青灰色 (5PB4/1) 粘土ブロック混じり粗砂 |
| 8 青灰色 (5PB6/1) 砂    | 18 灰色 (N4/) 細砂           | 28 暗青灰色 (5PB4/1) 粗砂          |
| 9 青灰色 (5PB5/1) 砂    | 19 青灰色 (5PB5/1) 弱粘質土     | 29 灰色 (N4/) シルト              |
| 10 青灰色 (5PB5/1) 細砂  | 20 灰色 (N4/) シルト          |                              |

第3図 遺構平面図、周壁土層断面図



第4図 遺物実測図

測る。残存部位はわずかで、風化が進み状態もあまりよくない。受口状口縁であった可能性がある。3は口径14.8cm、残器高3.4cmを測る。口縁部外面に煤が付着する。やや風化しているが、調整は内外面ともナデである。4は口径14.8cm、残器高3.4cmを測る。口縁部外面に煤が付着する。やや風化しているが、調整は内外面ともナデである。布留式並行期のものと考えられる。5は底部で、底径4.4cm、残器高1.3cmを測る。甕底部の可能性が高い。6は口縁で、おそらく小型丸底壺の口縁部と考えられる。口径8.4cm、残器高2.7cmを測り、調整は内外面ともナデである。7は手づくね土器で、一見コップのような形状を呈する。口径8.4cm、器高6.3cmを測り、外面に黒斑がみられる。口縁部・体部に比して底部が分厚いのが特徴で、口縁が広がる形状ながら安定性はよい。調整はユビオサエののちナデを施す。8は高坏脚部と考えられるが、小片で径を割り出すことはできなかった。残存長5.7cm、残存幅3.5cmを測り、外面に格子状の線刻を施す。調整は内外面ともナデである。9・10は高坏脚部である。9は脚裾部のみが残り、底径10.6cm、残器高1.8cmを測る。現状、透かし孔の痕跡は認められない。調整は内外面ともナデである。10は底径10.8cm、残器高5.9cmを測る。残存部に透かし孔の痕跡は認められない。11は皿で、口径13.6cm、器高2.1cmを測る。12は坏で、口径13.2cm、残器高3.7cmを測る。調整は内外面ともナデである。13は黒色土器碗で、口径16.6cm、残器高4.6cmを測る。内面はやや荒れており、暗紋も残存はするが明瞭ではない。外面はユビオサエののちナデを施す。14は施釉陶器の皿あるいは浅鉢と考えられる。口径14.0cm、残器高2.7cmを測り、全体に灰色がかった釉を施す。15は須恵器の蓋で、口径13.6cm、残器高0.6cmを測る。頂部につまみを有していたと考えられるが、残存しない。内面から口縁部外面にかけてはナデ、外面はヘラ削りののちナデを施す。16は窯道具（焼き台）と考えられ、底径18.4cm、器高7.5cmを測る。口縁部に強めのナデを施す以外は全体に粗い作りで、通常の須恵器に比べると凹凸が多く、

手づくねのような印象を受ける。頂部はやや白みがかったり、焼きが甘い。二次焼成等の痕跡は現状では見受けられないが、当初のものと考えられるひび割れが見られることから、製品として流通させるようなものでないことは明らかである。17は木製の曲柄鍬である。いわゆるナスピ形曲柄鍬と呼ばれるもので、元来は二股に分かれていたと考えられるが、残存しているのは全体の約半分で、かつ先端部を欠く。残存長25.0cm、残存幅最大3.0cm、厚さ最大0.6cmで、軸部に土圧によると思われる折れが見られる。全体に風化が著しく、加工痕は明瞭でない。

#### 窯道具について

本調査地が所在する夕日ヶ丘北遺跡は、独立丘陵・夕日ヶ丘（向山）の北麓に位置する。夕日ヶ丘は全体が夕日ヶ丘遺跡として周知されており、これまでの調査で旧石器時代から室町時代にかけての複合遺跡と考えられている。この遺跡には須恵器窯（夕日ヶ丘古窯址群）が含まれており、本調査で出土した窯道具と推定される遺物もこの遺跡に関連するものと考えられる。

当該遺物は底径18.4cm、器高7.5cmを測り、全体に凹凸が見られることから、轆轤などは用いず手づくねで製作されたと考えられる。大きさは若干異なるものの、形状が松江市山津遺跡で出土した焼き台と酷似しており、本品も焼き台とみて差し支えないと考えられる。二次焼成の痕跡ははっきりとは見受けられないが、当初のものと考えられるひび割れが見られる。繰り返し使用しないうちに廃棄されたものであろうか。

夕日ヶ丘古窯址群は、『野洲町史』では鏡山古窯址群の一支群（成橋支群）として扱われている。窯跡の本格的な発掘調査は現時点では行われていないため、全容は不明であるが、収集された遺物等から操業時期は6世紀後半と考えられる。

本調査地の堆積は大半が砂で、今回検出した遺構面が洪水堆積の上に存在している可能性は捨てきれない。本調査地は夕日ヶ丘古窯址群のうち、北側斜面に存在する小支群の一つ、向山北小支群のほぼ真北に位置する。したがって、当該遺物は夕日ヶ丘古窯址群の向山北小支群の灰原から洪水等で押し流されてきた可能性が高い。

#### まとめ

調査区全体を概観すると、遺構密度は低く、遺物も少ない。したがって、遺跡の全容を解明するのは難しいが、堆積土の多くは砂または砂質土で、洪水などによって堆積したものであろう。出土遺物にも時期幅が見受けられ、そのこともこの推察を裏付けるものと考えうる。なお、SD01の一角で検出した腐植土層は隣のSD02でも存在を確認しており、面的な広がりを持つと考えられる。したがって、腐植土堆積後に洪水等で現在の遺構面が形成され、その後、各遺構が掘削されたものであろう。一方、隣接地で検出された大溝（自然流路）の痕跡は本調査区では見いだせず、途中で向きを変えているか、途切れている可能性が高い。

本調査地では積極的な生活痕跡を見出すことはできなかったが、出土遺物などから集落の縁辺に位置するものと考えられる。（井上）



調査区全景



周壁土層堆積状況



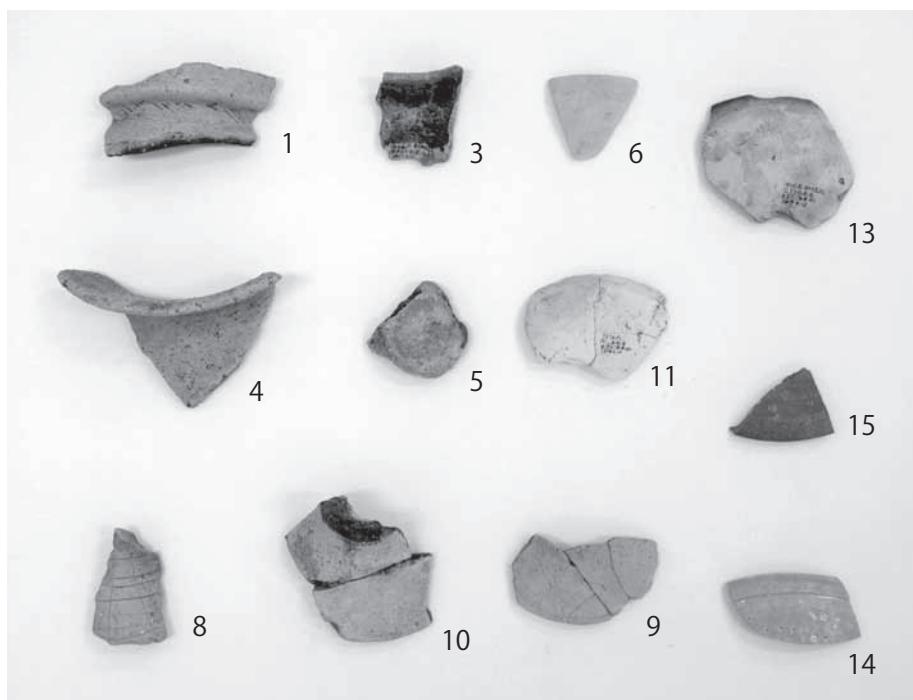
SD01 埋土堆積状況



出土遺物 1



出土遺物 2



出土遺物 3

出土遺物 4

## 第6章 下々塚遺跡

**調査地** 野洲市小篠原字大橋 1089番地2 外2筆

**調査原因** 集合住宅建設

**調査期間** 令和元年6月17日～令和元年6月19日

**調査経過** 下々塚遺跡はJR野洲駅の南側に位置し、小篠原遺跡、安城寺遺跡、中畑・古里遺跡に隣接する。本調査地の南側隣接地で1988年に実施した発掘調査では平安～鎌倉時代の掘立柱建物が検出されているほか、西側隣接地では古墳時代前期初頭の方形周溝墓が検出されている。

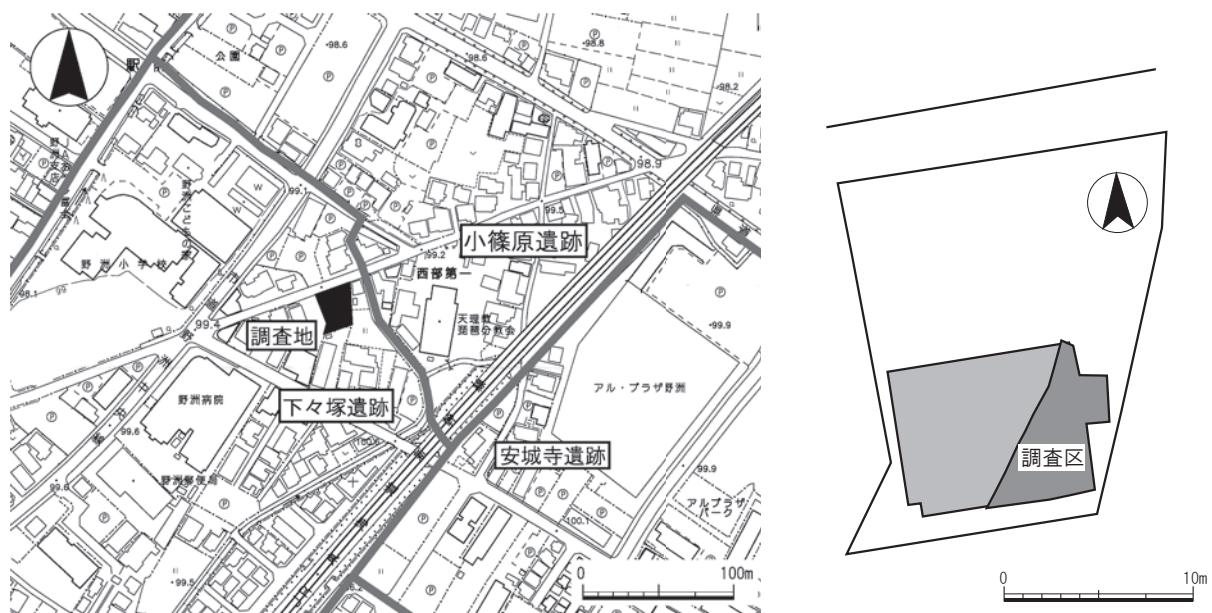
今回の調査は、集合住宅の建設に先立って実施したものである。平成31年1月11日に埋蔵文化財発掘の届出を受理し、令和元年5月22日に試掘調査を行った結果、部分的に遺構が検出されたため、遺構面が残存していると考えられる範囲において本発掘調査を実施することとなった。調査地の敷地面積は140.77m<sup>2</sup>、設定した調査区は1箇所、面積は約42.3m<sup>2</sup>である。

**基本層序** 地表面下約0.4mまでは盛土で、その下は黒褐色シルト（耕作土）、褐灰色粘質土、青灰色粘質土、暗オリーブ灰色粘質土が続く。この暗オリーブ灰色粘質土上面が遺構面と考えられる。

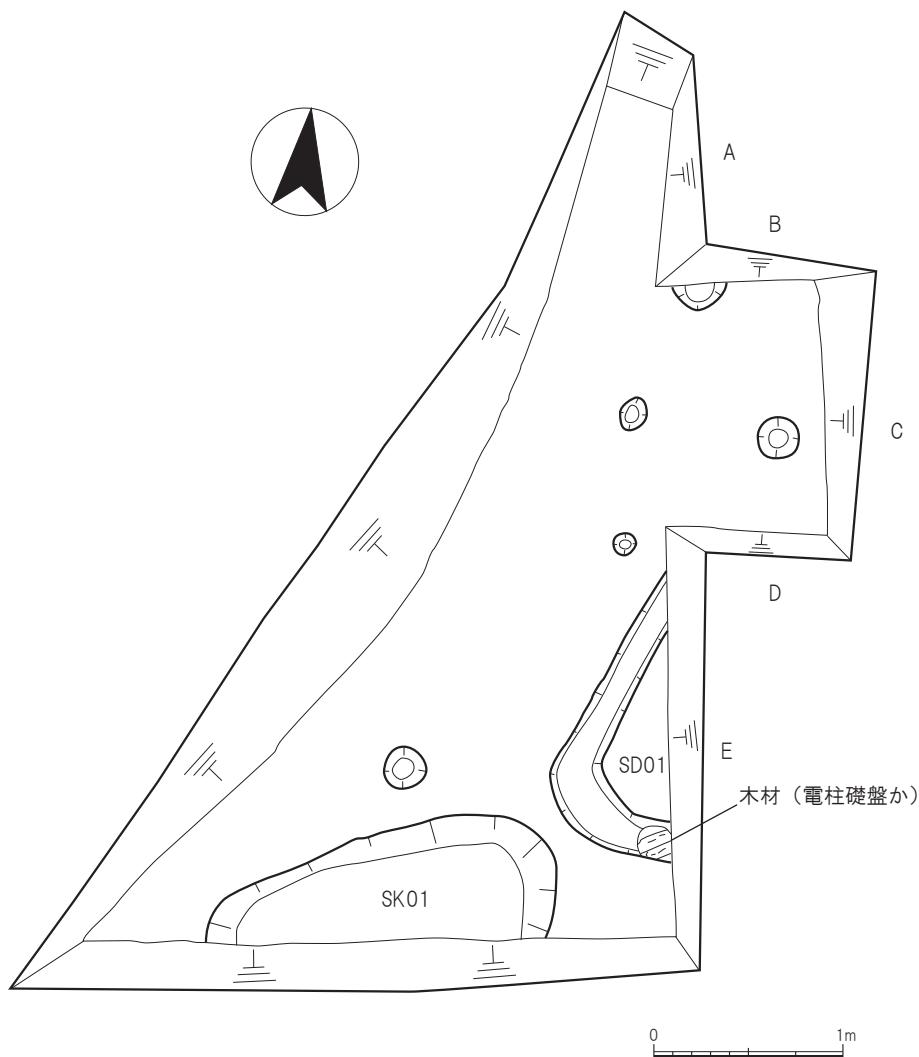
**遺構** 検出した遺構は、溝、ピット、土坑である。

溝SD01は調査区南側、東側周壁際で検出した。幅約36cmの素掘り溝で、L字状を呈する。一見すると方形周溝墓のようにも見えるが、溝幅が近隣の事例と比べると著しく狭いため、性格についてはなお検討を要する。埋土内から土師器片2点が出土した。

ピットは5基あり、SP05以外は調査区北側に集中している。うち、SP01、SP02、SP05



第1図 調査地位置図・調査区配置図



第2図 調査区平面図

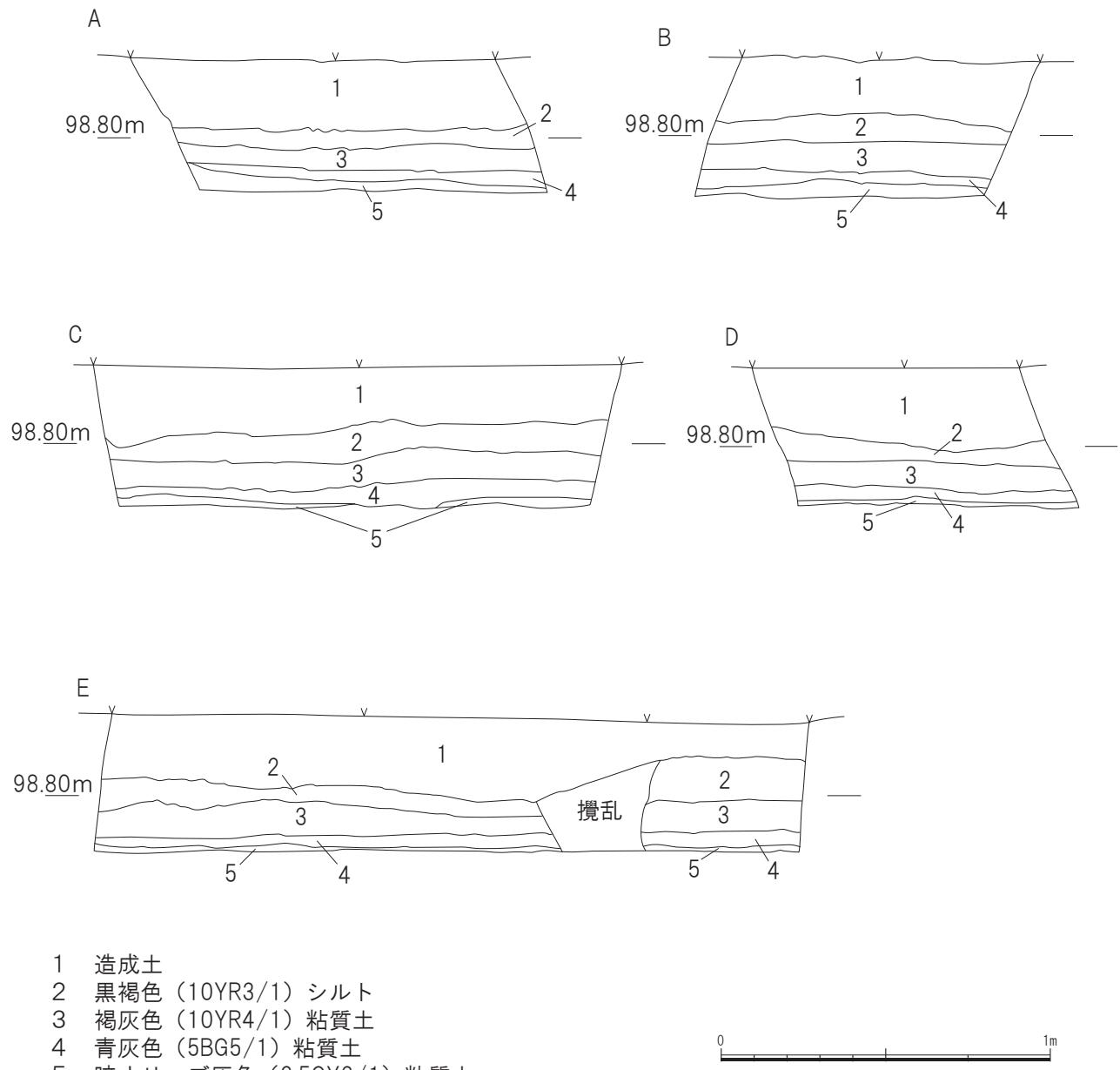
は大きさなどから柱穴の可能性もあるが、調査地内で建物を復元することはできなかった。なお、いずれのピットからも遺物は出土していない。

土坑SK01は調査区南側、周壁際に位置する。深さは遺構面から60cm程度で、埋土の大部分は小礫の混じったオリーブ黒色粘質土であった。遺物は出土せず、性格は不明である。

その他、造成土直下から掘り込まれた穴があり、底で木材を検出している。周壁に食い込んでいたため取り上げなかつたが、木材はそう古いものではなく、本調査地に以前建っていた建物と関連するものと思われる。位置関係から、前身建物に伴う電柱の痕跡で、木材は電柱の礎盤である可能性が高い。

**遺 物** 遺物は極めて少なく、土師器片2、須恵器片1の3点のみで、いずれも小片であり実測はできなかつた。土師器片は2点とも摩耗が著しく、調整等は残っていない。器種も不明であるが、焼きの甘さから古い時代のものと考えられる。須恵器は甕の体部と考えられる。内面には當て具痕が明瞭に残る。

**ま と め** 今回の調査では遺物がほとんど出土しておらず、遺構の年代等については決め手を欠くが、須恵器が出土していることから、現在の遺構面が形成されたのが古墳時代であること



第3図 調査区周壁土層断面図

は間違いないであろう。しかしながら、調査区が狭小であることや、本調査地の大半が前身建物によって攪乱されていたことなどから、本調査地内における遺跡の全体像を復元することは困難である。現時点では、近隣での調査成果をもとに、古墳時代初頭は墓域で、その後、掘立柱建物を中心とする集落に移行したと考えたい。近隣では比較的多くの遺構が検出されているため、本調査地の大半が前身建物によって攪乱されているのが惜しまれる。(井上)



遺構検出状況（南西から）



遺構完掘状況（南西から）



周壁土層堆積状況（南西から）

## 第7章 大篠原西遺跡

調査地 野洲市大篠原字出口 1610 番地 11

調査原因 工場建設

調査期間 令和元年8月1日～8月7日

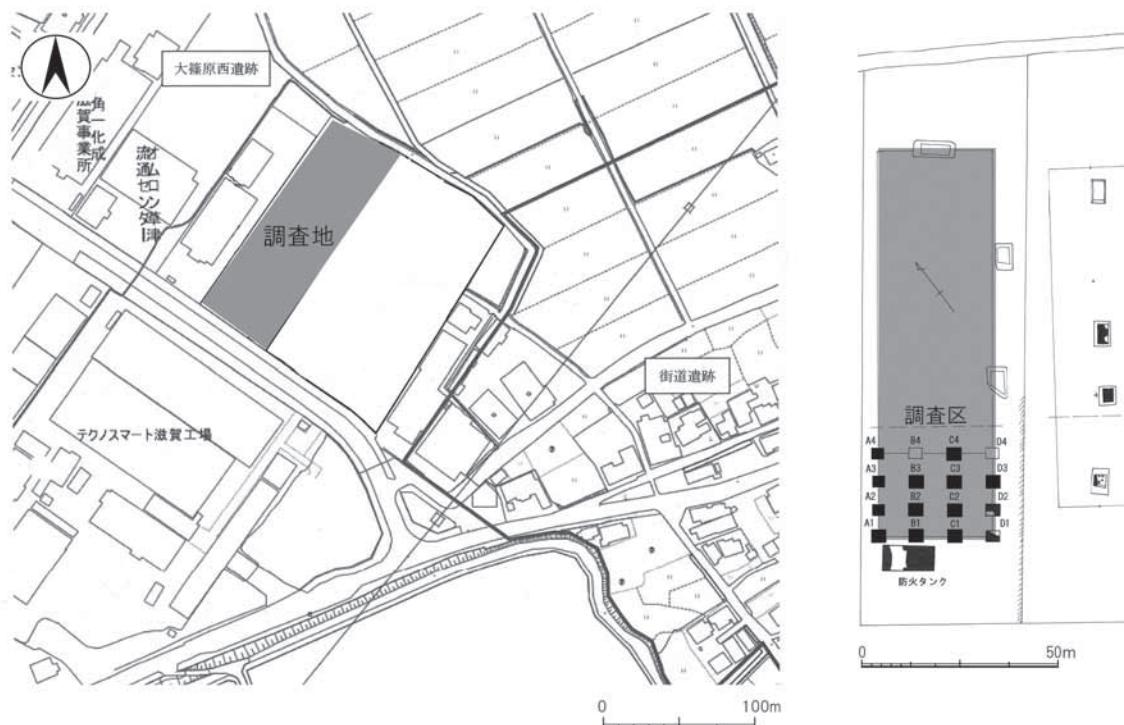
調査結果 工事立会調査は、対象地のうち建物計画範囲に調査区を17か所設定して実施した。調査区は、独立基礎が格子状になる部分に西から東へA区、B区、C区、D区と名称を付けた。

調査は、地表面下約1.3m～1.4mの（標高約98.9m前後）ベース層まで掘下げ、遺構の検出に当たった。遺構面は、D1、D2、D4、B4、防火水槽で確認でき、D2でピットを検出した。他のD1、D4、B4、防火水槽は、遺構面の高さを確認したが、現代搅乱により、ほとんどが掘削により、遺構面が残っていない。特に、全域で建物解体に伴うコンクリート層が0.7m～1.2mの厚さで広がっており、その下に現代搅乱層がある。恐らく、各種建物解体に撤去時の掘削が深いものと考えられる。本来の遺構面は、標高約98.9m前後とみられる。

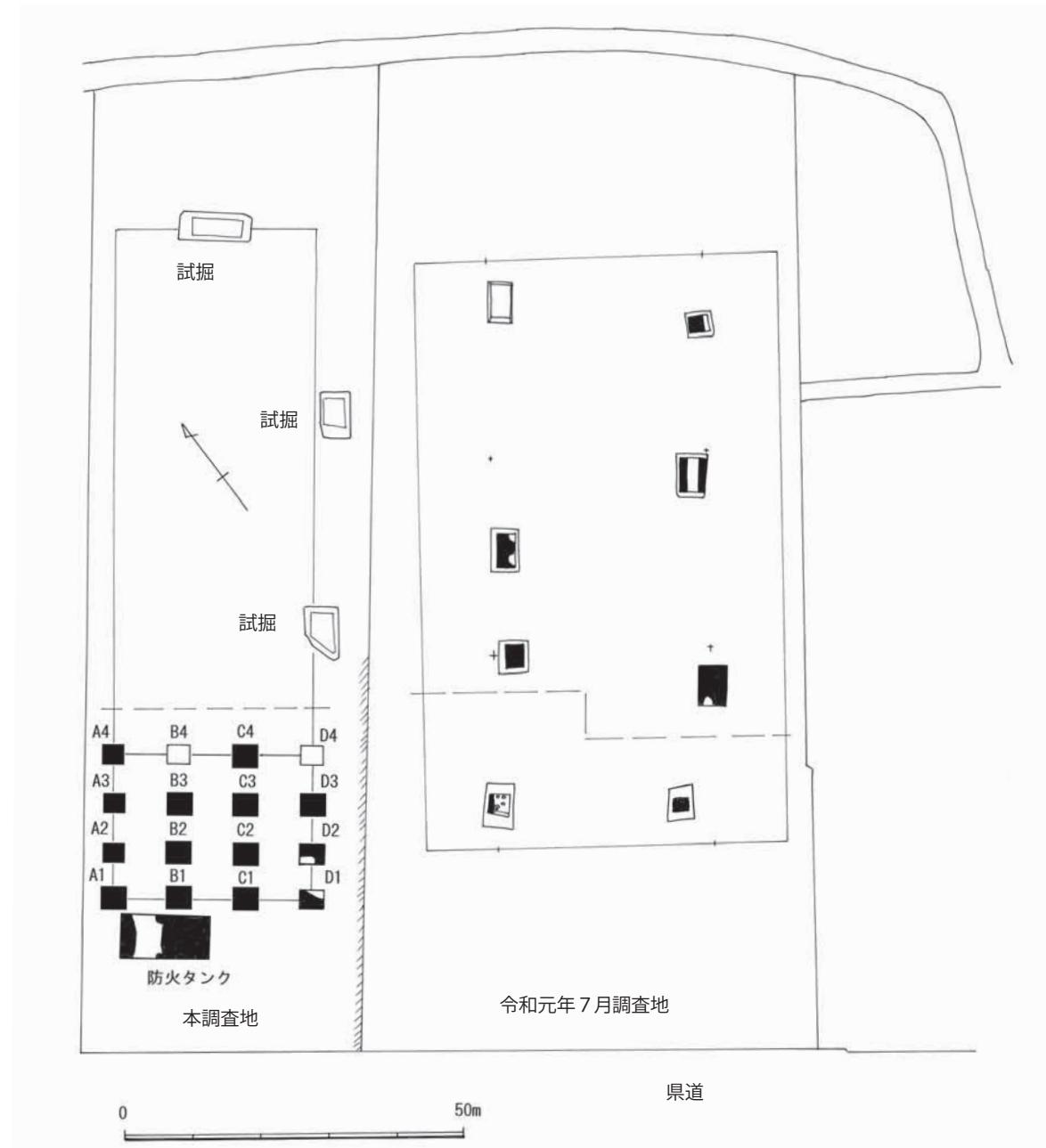
今回の工事立会調査で、ほとんどが遺構面を残していないことが判明した。

### 周辺の遺跡 篠原駅について

古代東山道の駅。「延喜式」兵部省に15疋の駅馬を備える駅として登載。大宝令に中路と規定された東山道駅の駅馬数10疋より5疋多いが、これは近江国内の他の東山道駅と同じで、都と不破関（現岐阜県不破郡関ケ原町）を結ぶ要路であったためと思われる。「和名抄」に野洲郡篠原郷と駅家郷の名がみえ、これらに対応する地名として、現野洲町大篠原・小篠原がある。両隣の勢多駅（現大津市）および清水駅（現神崎郡五個荘町）との駅



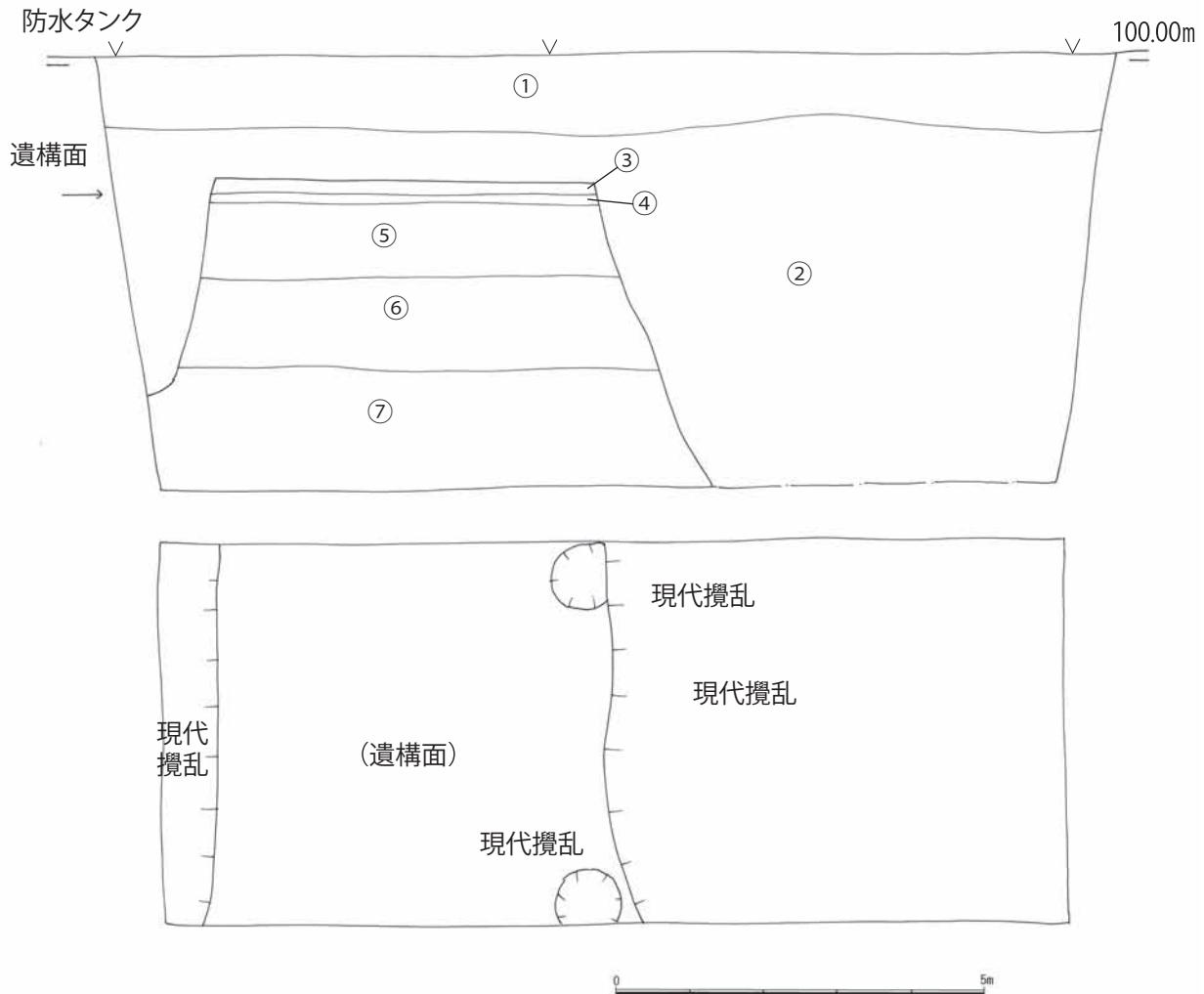
第1図 調査地位置図・調査区配置図



第2図 調査区配置図

間距離からみれば、二つの篠原のうち南側にある小篠原にあてるのが適當であろう。しかし13世紀成立の「東関紀行」に「篠原といふ所を見れば、西東へ遙かに長き堤あり。北には里人住みかをしめ、南には池のおもて遠く見えわたる」とあり、この宿が駅の後身であるとすれば、そこは「西東へ遙かに長き堤」で知られる今日の西池の北であったから、駅は大篠原に求めなければならないことになる。

ただし宿を「延喜式」の駅の後身とすることには異論もあるので、現状では駅の推定地を小篠原・大篠原のどちらかにしほるのは難しい。なお駅名の篠原は、篠竹ないし笹の叢生する野という、三上山北西麓の風景に起源したものであろう。

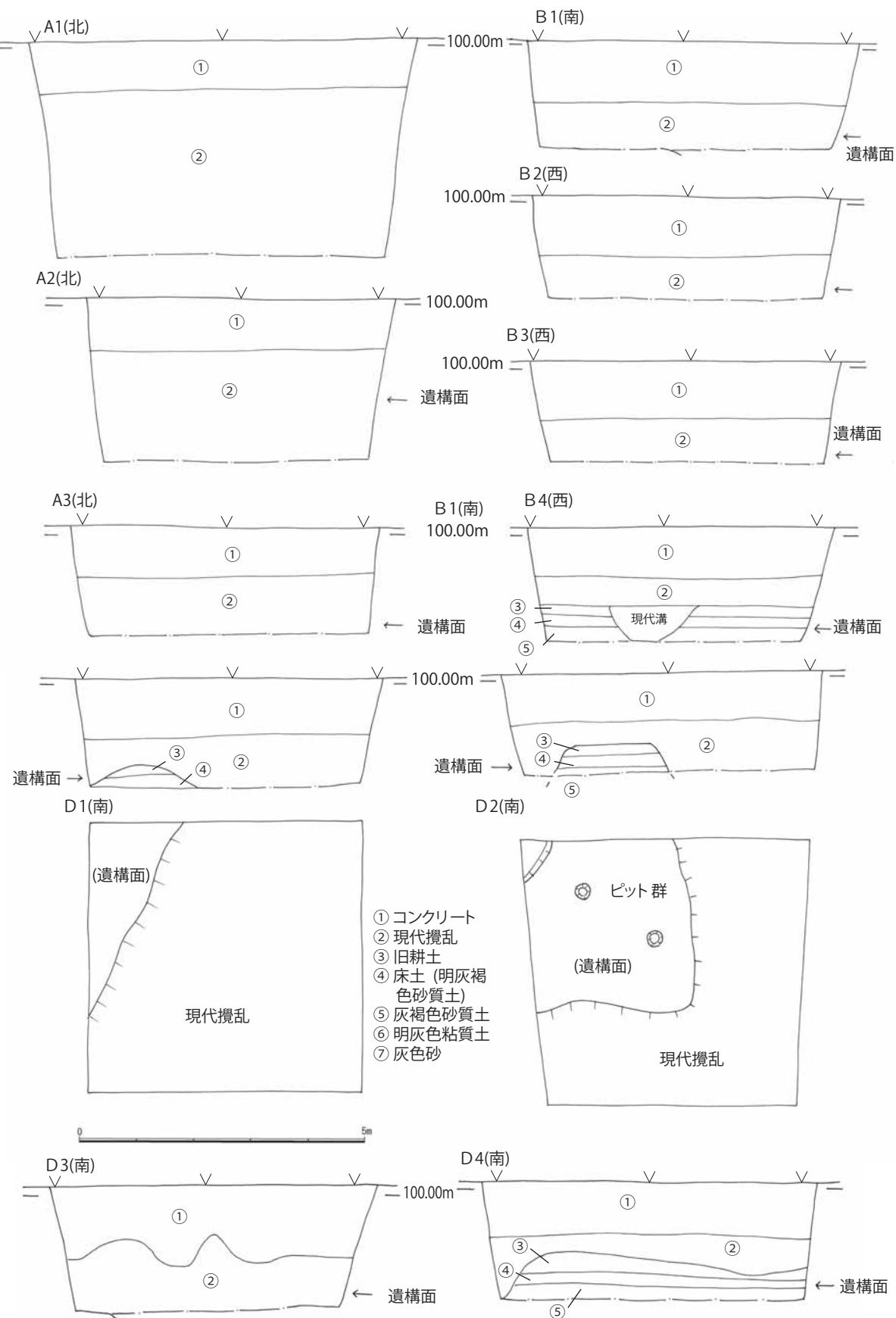


第3図 調査区平面図・断面図

#### 大篠原村について

鏡山北西麓にあり、東は蒲生郡鏡村（現竜王町）。北部の耕地部と南東部の山嶺部からなり、山嶺部は字立石・寒谷・雜木谷・弥勒寺などの広大な禿山。字寒谷から流れ出た成橋川（光善寺川）は禿山の土砂を堆積して天井川となり、北流して日野川に合流する。耕地部を中山道が横切る。集落は耕地中央部の成橋川西岸と中山道沿い、さらに東端の中山道南面の計三力所に分れる。東端の集落は中山道北面の入町村の集落と一対をなす。北西部の耕地に近年まで条里地割が残り、中山道南側には六町余の西池をはじめ四つの溜池があり不規則な耕地が山麓に迫る。

中世には篠原庄内であったとみられるが、天正3年（1575）成立の牛頭天王社之記（大篠原神社文書）には「江州益須郡玉造郷篠原保大篠原里」と記される。鎮守大篠原神社（旧牛頭天王社）に残された永正年間（1504～1521）から現在に至る天王神事頭人差定状に村内の小集落名として東村・野村・弥勒寺村・岩蔵・西村などがみえ、うち野村・弥勒寺・岩蔵は当地の字名として残る。（花田）



第4図 調査区平面図・断面図



調査区全景



防火水槽



防火水槽



A1



A2



A3



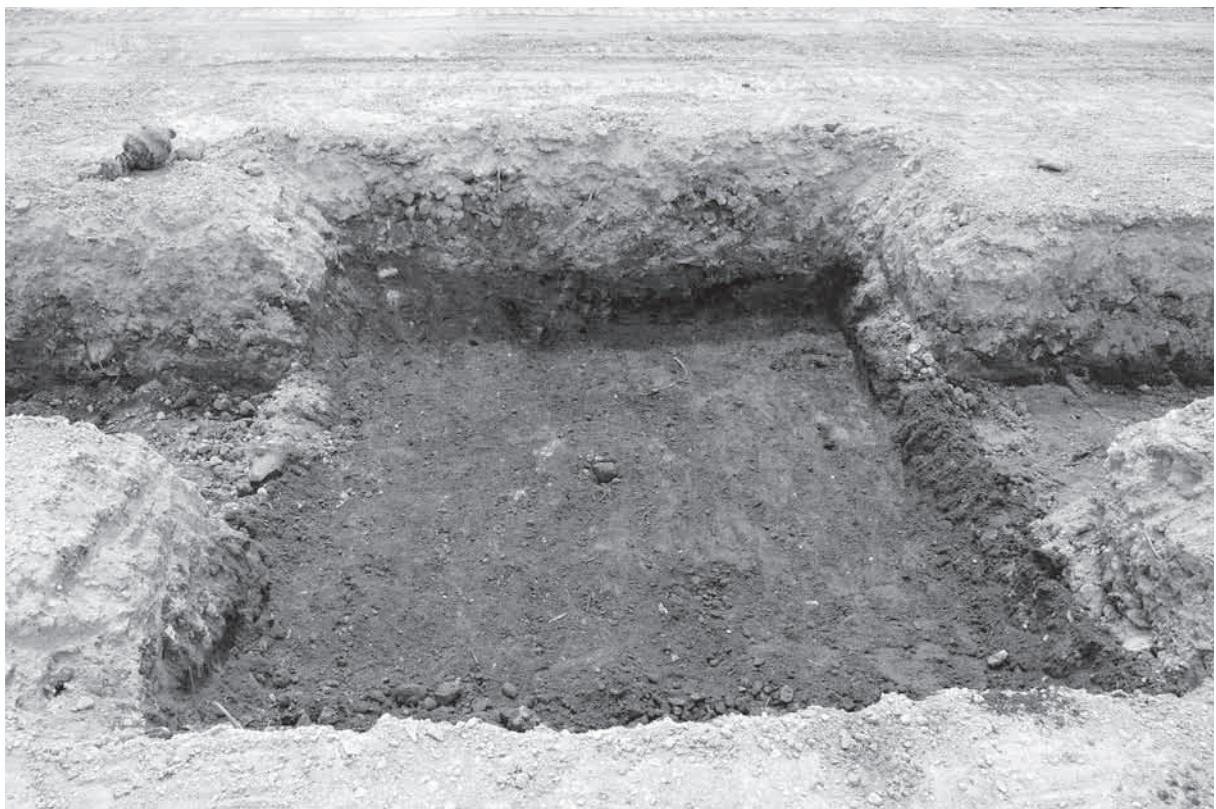
A4



B1



B2



B3



B4



C1



C2



C3



C4



D1



D2



D2



D3



D4

## 第8章 よし じ やく し どう 吉 地 薬 師 堂 遺 跡

**調査地** 野洲市吉地字二丁目 1244 番地

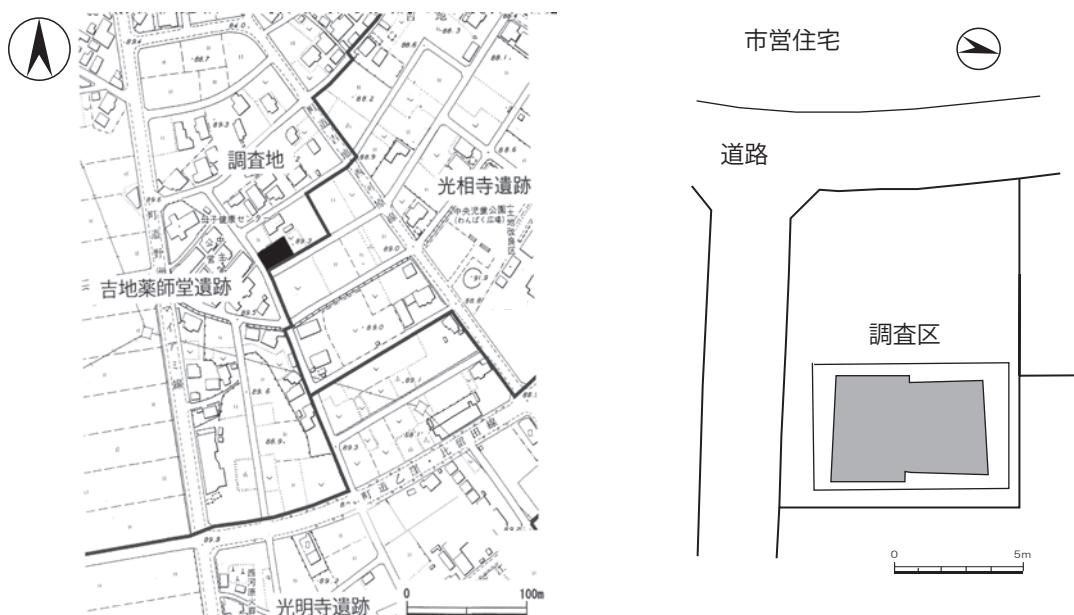
**調査原因** 集合住宅建設

**調査期間** 令和元年 10月 15日～10月 23日

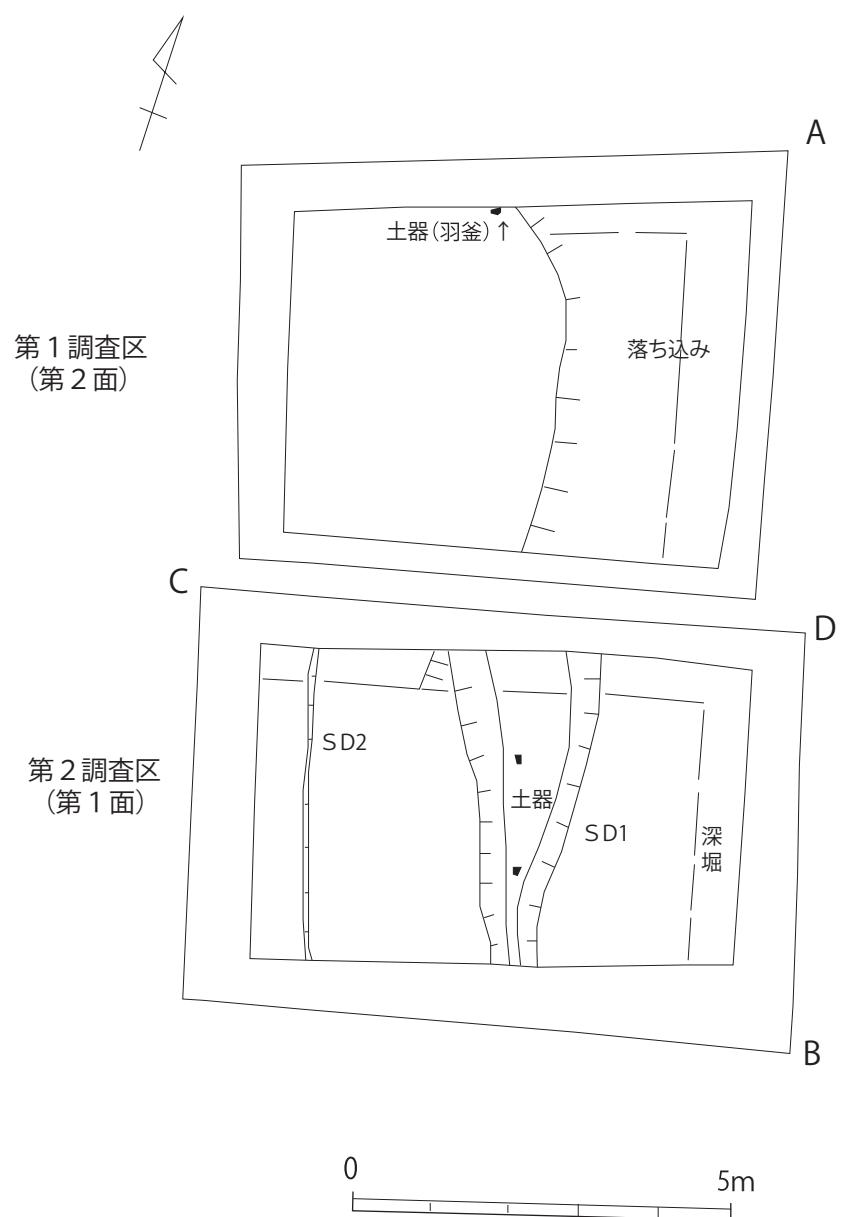
**調査結果** 発掘調査は、平成 11 年度の試掘調査で検出した溝の実態を明らかにするために、対象地のうち建物計画範囲に調査区を 2 か所を設定して実施した。基本層序は、上層より盛土・旧耕土・床土・明灰褐色砂質土で、灰色粗砂が（ベース）となる。

地表面下約 1.2m～1.6m の（標高約 88m 前後）でベース層まで掘下げたところ、T1、T2 で鎌倉時代の溝または落ち込みと溝 2 条を検出した。遺構は、第 1 遺構面で溝 2 条を検出した。土坑内からは、土師器・黒色土器が出土し、鎌倉時代前半のものである。下層の溝または落ち込みは、埋土（明灰褐色粘質土）で遺物は出土しなかった。

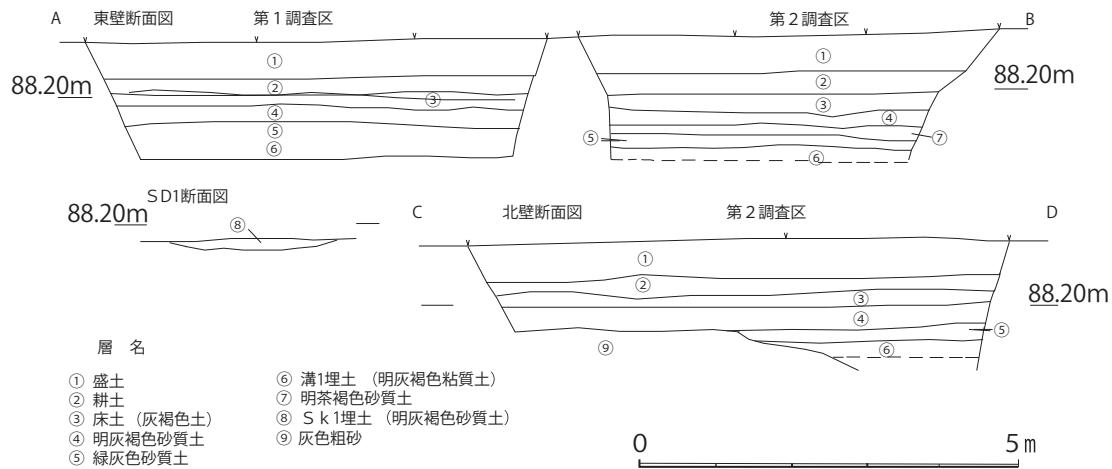
**遺物** 出土地点は、第 2 トレンチの深堀（1～3）、SD2 の埋土（4～6）、SD2 の埋土（7～16）である。第 1 トレンチでは、遺物包含層（明灰褐色砂質土）で 18～20 が出土した。1 は、土師器の皿で口径 7.6cm、器高 1.6cm を測る。口縁部は、ヨコナデ、底部はナデ調整とする。色調は、明黄灰色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒をほとんど含まない。2 は、土師器の皿で口径 8.8cm、器高 1.4cm を測る。口縁部は、ヨコナデ、底部はナデ調整とする。色調は、明黄灰色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒をほとんど含まない。3 は、土師器の皿で口径 8.4cm、器高 1 cm を測る。口縁部は、ヨコナデ、底部はナデ調整とする。色調は、明黄褐色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒をほとんど含ます。4 は、黒色土器の椀で口径 16.8cm、残存高 4.2cm を測る。外面は、口縁部がヨコナデ、体部下半に斜め方向のヘラ



第1図 調査地位置図・調査区配置図

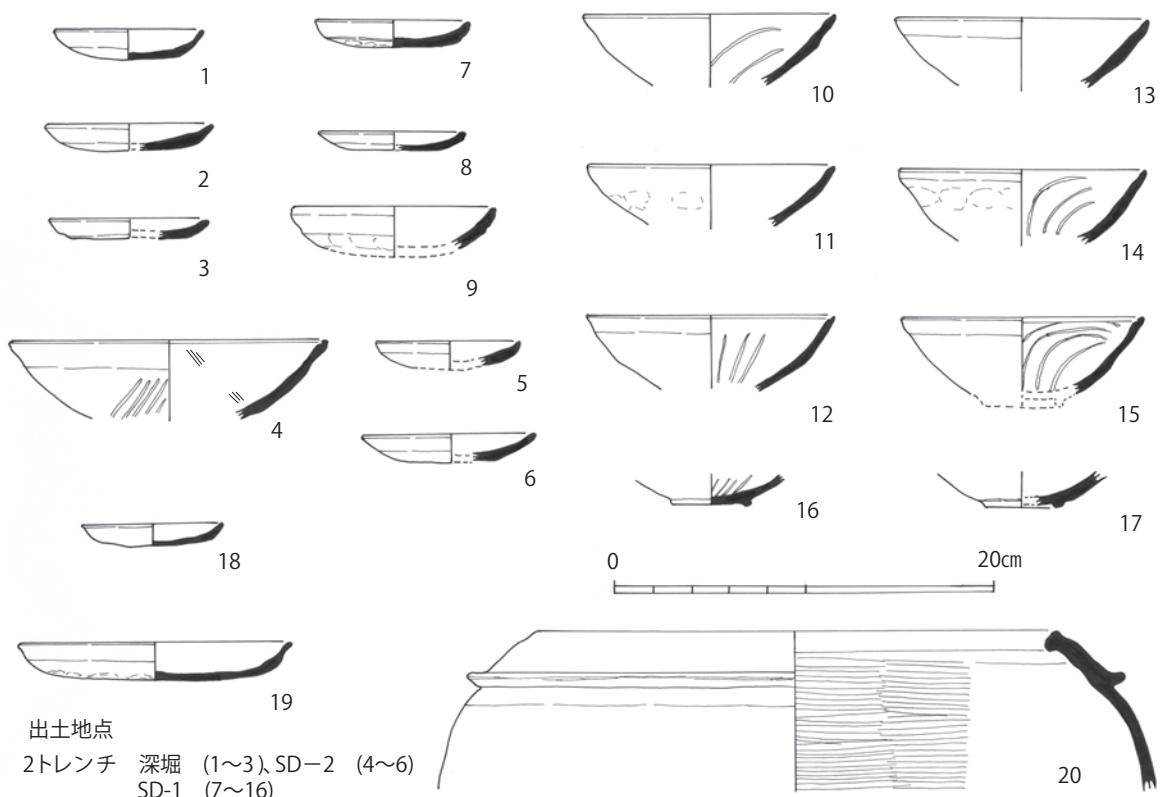


第2図 調査区平面図



第3図 調査区断面図

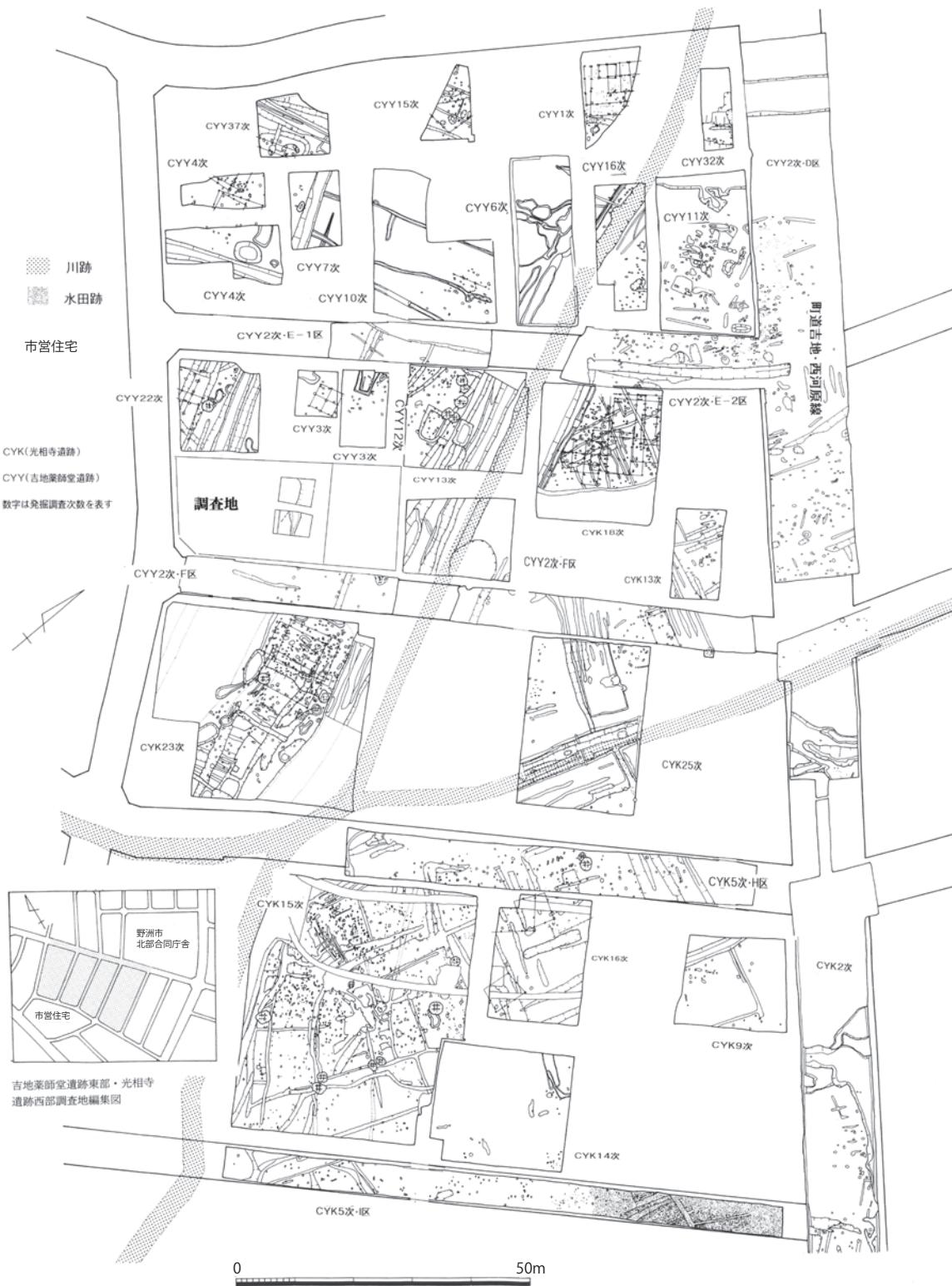
ミガキを施す。内面は、右上がりのハケをナデ消す。色調は、明灰白色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒を含まない。5は、土師器の皿で口径7.6cm、器高1.4cmを測る。口縁部は、ヨコナデ、底部はナデ調整とする。色調は、明橙色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒をほとんど含まない。6は、土師器の皿で口径9.2cm、器高1.5cmを測る。口縁部は、ヨコナデ、底部はナデ調整とする。色調は、明橙色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒をほとんど含まない。7は、土師器の皿で口径10cm、器高1.4cmを測る。口縁部は、ヨコナデ、底部はナデ調整とする。色調は、明橙色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒をほとんど含まず。8は、土師器の皿で口径7.6cm、器高1cmを測る。口縁部は、ヨコナデ、底部はナデ調整とする。色調は、明黄褐色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒なし。9は、土師器の皿で口径10.4cm、残存高2.3cmを測る。口縁部は、ヨコナデ、底部はかるいケズリ調整とする。色調は、明黄褐色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒をほとんど含まず。10は、黒色土器の椀で口径14cm、残存高3.8cmを測る。外面は、口縁部がヨコナデ、体部をナデ調整。内面は、右上がりの暗文を施す。色調は、明黄灰色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒を含まない。11は、黒色土器の椀で口径13cm、残存高3.2cmを測る。外面は、口縁部がヨコナデ、体部をナデ調整。内面は、右上がりの暗文を施す。色調は、明黄灰色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒が少ない。12は、黒色土器の椀で口径12.2cm、残存高4cmを測る。外面は、口縁部がヨコナデ、体部をナデ調整。内面は、右上がりの暗文を施す。色調は、黄灰色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒を含まず。13は、黒色土器の椀で口径13.2cm、残存高3.6cmを測る。外面は、口縁部がヨコナデ、体部をナデ調整。内面は、ナデ調整。色調は、明黄灰色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒を含まず。14は、黒色土器の椀で口径12.8cm、残存高3.8cmを測る。外面は、口縁部がヨコナデ、体部を指オサエとする。内面は、右上がりの暗文を施す。色調は、明黄灰色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒が少ない。15は、黒色土器の椀で口径12.8cm、残存高4cmを測る。外面は、口縁部がヨコナデ、体部をナデとする。内面は、右上がりの暗文を施す。色調は、黄灰色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒が少ない。15は黒色土器の椀で口径12.8cm、残存高4cmを測る。外面は、口縁部がヨコナデ、体部をナデとする。内面は、右上がりの暗文を施す。色調は、明黄灰色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒が少ない。16は、



第4図 出土遺物実測図

底経4cmの黒色土器碗である。外面はナデ、内面に放射状の暗文を施す。色調は、明黄褐色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒が少ない。17は、底経4cmの黒色土器碗である。色調は、明乳灰色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒が少ない。18は、土師器の皿で口径7.2cm、器高2cmを測る。口縁部は、ヨコナデ、底部は指オサエとする。色調は、明茶灰色を呈し、焼成良好。胎土は砂粒をほとんど含まず。20は、口径39.2cm、残存高8.5cmを測る土師器の羽釜である。外面はナデ調整で煤が付着、内面はヨコハケとする。色調は、明茶灰色を呈し、焼成良好。胎土は、0.1mmの砂粒を含む。

出土土器は、黒色土器の編年から13世紀代と考えられる。周辺の遺構も鎌倉時代のものが多い。吉地薬師堂遺跡の中世集落の一角と考えられる。(花田)



第5図 調査地周辺の遺構配置図



第1調査区 全景



第1調査区 西断面



第2調査区第1面 全景



第2調査区第1面 全景



第2調査区第1面 Sk-1



第2調査区第1面 Sk-2



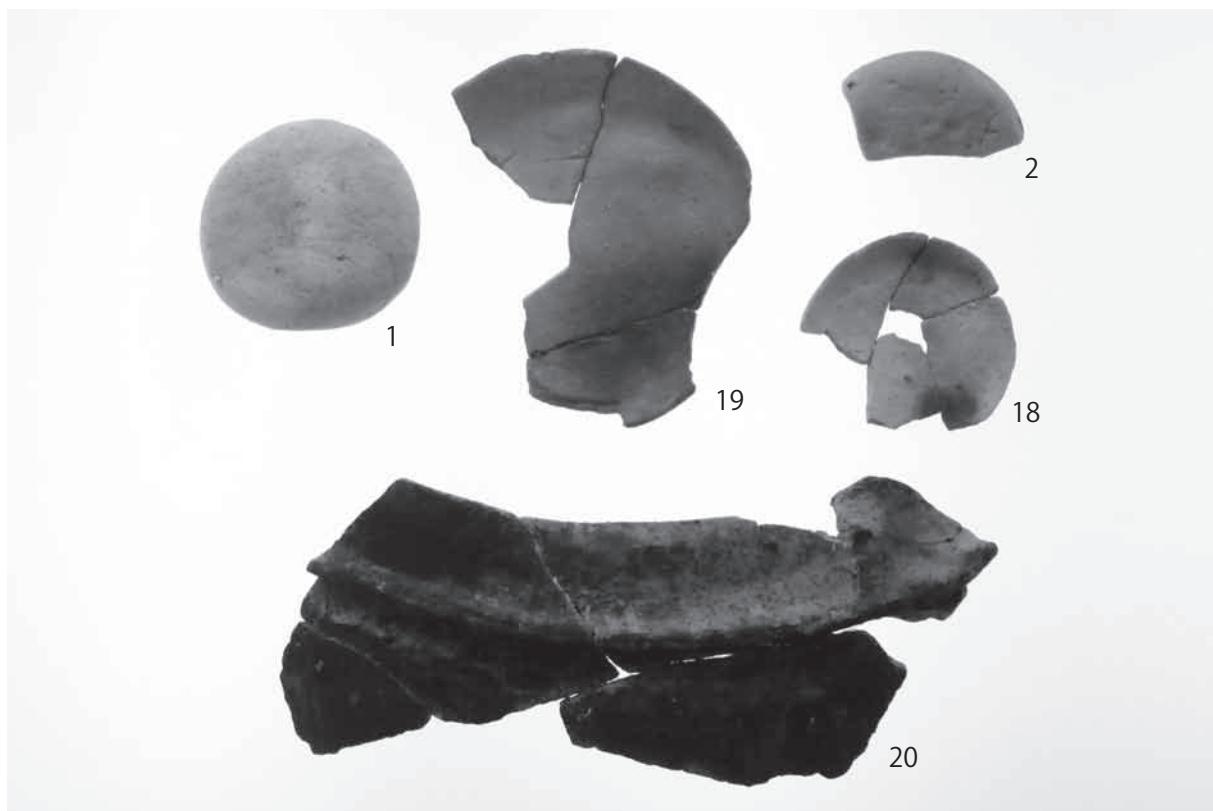
第2調査区第2面 西断面



第2調査区第2面 立ち割り



出土遺物



出土遺物

## 第9章 中畑・古里遺跡

**調査地** 野洲市行畠字高道下 799 番地

**調査原因** 宅地造成

**調査期間** 令和元年 10月 1日～令和元年 10月 11日

**調査経過** 中畑・古里遺跡は妙光寺山西麓に位置し、安城寺遺跡・斎ノ神遺跡・下々塚遺跡に隣接する。本調査地周辺は、平成 15 年度から実施された土地区画整理事業で宅地開発が進み、道路部分を中心に繰り返し発掘調査が実施されている。本調査地周辺では、北側隣接地で小規模な発掘調査が行われているが、比較的遺構密度が低いようで、当時の調査者は集落と集落の境界ではないかとの見解を記している。

今回の調査は、宅地造成に伴う擁壁設置工事に先立って実施したものである。令和元年 8 月 13 日に埋蔵文化財発掘の届出を受理し、同年 10 月 1 日から 11 日にかけて本発掘調査を実施した。調査地の敷地面積は 1100.94m<sup>2</sup>、設定した調査区は 1 箇所、面積は約 31.5 m<sup>2</sup>である。

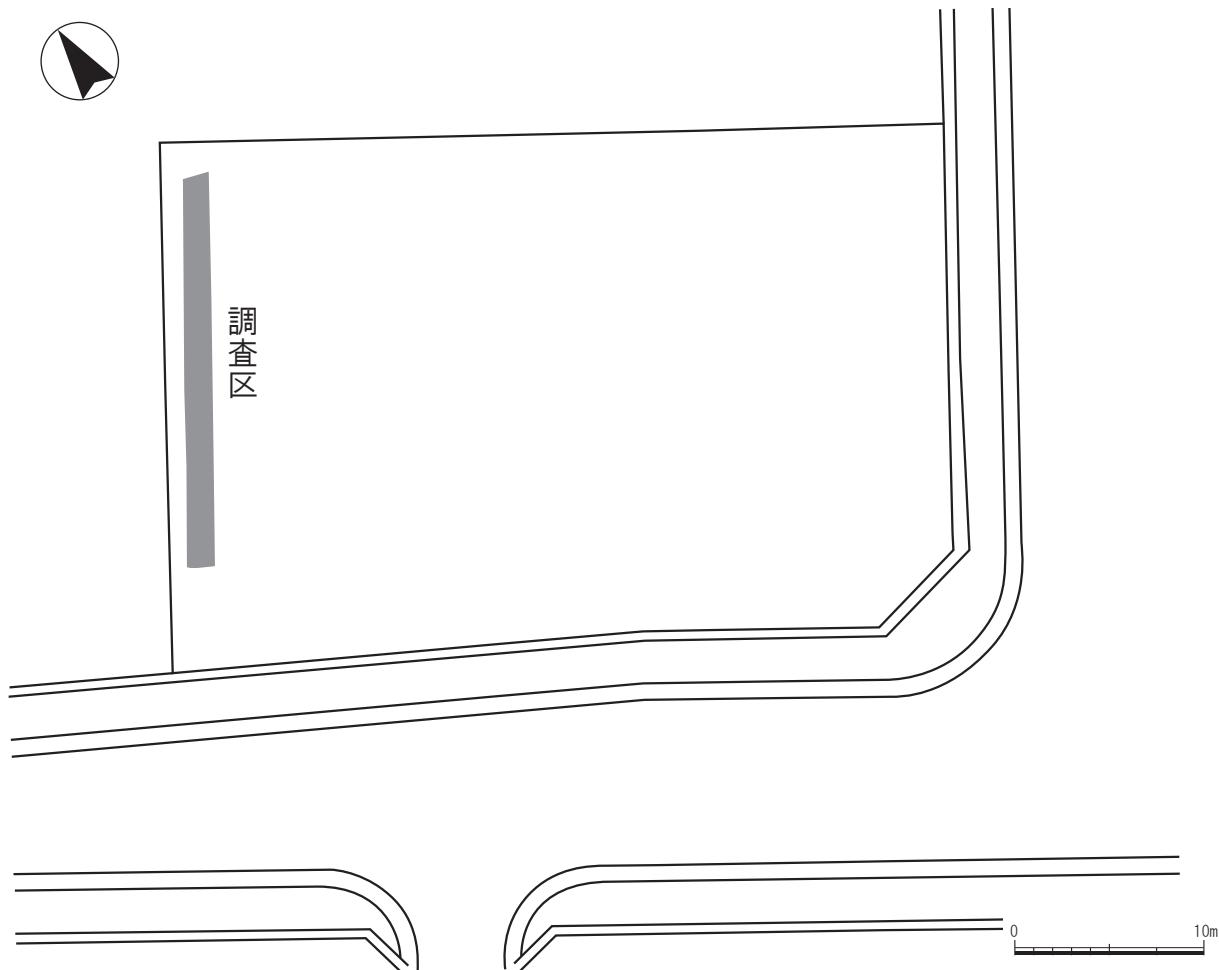
**基本層序** 地表面下約 0.2m までは耕作土で、その下は黄褐色シルト、黒色弱粘質土の順に堆積する。この黒色弱粘質土層が遺構面である。

**遺構** 調査区面積が狭小であるため、遺構の数は少ないが、溝、ピット、土坑が存在する。必要最低限の掘削しか行っていないため、全容は明らかでないが、いずれの遺構からも遺物は出土しなかった。

溝（SD01）は調査区北東端から南西へ約 5.5m のところに位置する幅約 1.7m の流路で、



第1図 調査地位置図



南東 - 北西方向に調査区を横切っている。埋土は黒褐色弱粘質土で、小礫を多く含む。

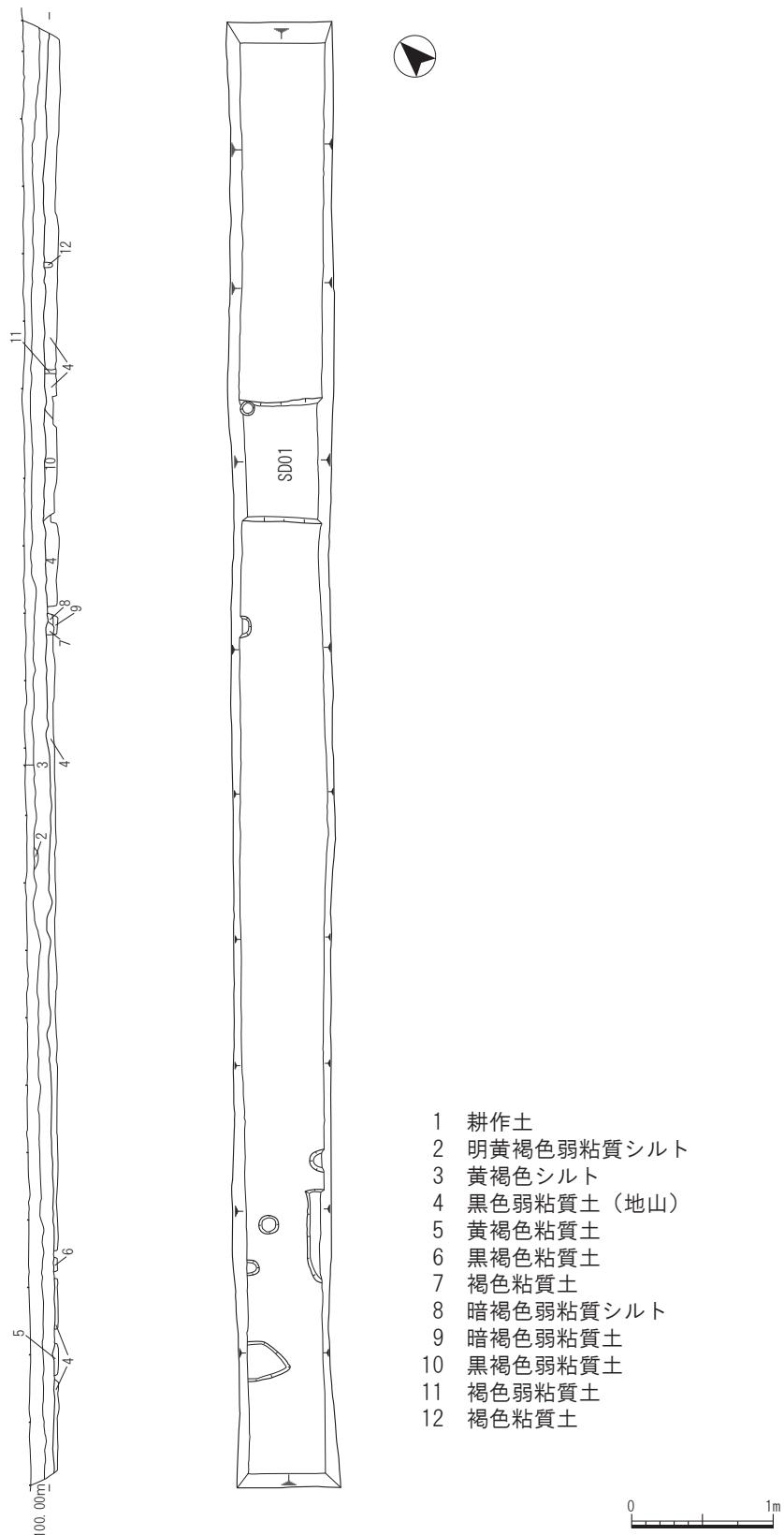
ピットは5基あり、うち1基はSD01内にある。まばらに存在しており、調査区内で建物等を復元することはできなかった。

土坑は調査区南西に2基存在するが、調査区内では完結しておらず、大きさは不明である。遺物は出土せず、完掘していないため性格は不明である。

**まとめ** 前述したとおり、本調査地周辺の一帯は平成15年度から実施された土地区画整理事業で宅地開発が進み、道路部分を中心に繰り返し発掘調査が実施されている。これまでに実施した発掘調査の主な成果としては以下のものが挙げられる。

平成15年度には西側の新幹線沿いと、東側の街路の一部が調査され、弥生時代中期後半の方形周溝墓のほか、古墳時代の遺物を含む溝、中世の掘立柱建物を検出している。

平成16年度には、現在の街区の中心部にあたる広範囲が調査され、6世紀から14世紀初頭に至る幅広い時代の遺構・遺物が検出されている。具体的には、6世紀中頃から7世紀初頭頃にかけてはまず竪穴住居、次いで掘立柱建物が造営される。7世紀から8世紀にかけては復元可能な建物遺構や出土遺物は少ないものの、掘立柱建物が検出されており、古代東山道に近いことや規則的・計画的に建物配置がなされていることなどから官衙的な様相を呈する集落とみる説もある。9世紀頃から10世紀頃にかけては、屋内に束柱を配



第3図 調査区平面図・土層断面図

する総柱形式の建物が主となる。中にはての字状口縁を有する京都系土師皿を埋納する柱穴遺構が数基検出され、地鎮等の祭祀の一端を垣間見ることができる。13世紀中頃から14世紀初頭にかけては、掘立柱建物が多く検出され、中には主屋や副屋などで屋敷を構成する建物もみられる。また、屋敷墓とみられる土壙墓が3基検出されている。

平成17年度には、区域の東側を中心に街路の調査が行われている。この時の調査成果はおおむね平成15・16年度の調査結果とほぼ合致する内容であるが、弥生時代中期後半にさかのぼる遺構・遺物が検出されたことが特筆される。

平成19年度には南側の街路を中心に発掘調査が行われ、中世から昭和初期にかけての遺構・遺物が検出されている。13世紀頃には区画溝を持つ屋敷地が展開し、近世・近代まで続く。その中で、近世末までにしばしば盛土や整地が行われ、近世末～近代初頭には「洗い場」が設けられるなどの改変が行われる。その後、敷地の拡張のためにそれらを埋め立て、溝幅を狭くして排水機能のみを保持する形になったことが見て取れる。周辺の調査結果や明治期の絵図の検討結果から、微高地である集落縁辺の自然地形に沿った流路を整備して堀となし、基幹流路から引水していたものと考えられる。

以上のとおり、本調査地一帯は弥生時代から近代にいたる多くの遺構・遺物が検出されており、長期にわたる土地利用の変遷がうかがえる貴重な成果が得られている。ゆえに、本調査地においても遺構・遺物の検出が想定されたが、遺構密度は低く、遺物も出土しなかった。もっとも、調査範囲に制約があったことから、今回調査対象外となったところに未知の遺構・遺物が埋もれている可能性はあるが、隣接地の調査結果を基に指摘されていた「集落と集落の境界」である可能性を強める結果となった。しかしながら、本調査地の近くには妙光寺塚越古墳があり、東方に隣接する斎ノ神遺跡では方形周溝墓が検出されていることから、本調査地より山側は墓域となっていた可能性が高く、集落と集落の境界とみなすよりは集落と墓域の境界とみなすほうが妥当であろう。(井上)



遺構検出状況（南西から）



完掘状況（南西から）



SD01（東から）



周壁土層堆積状況

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	れいわがんねんど やすしまいぞうぶんかざいちょうさがいようほうこくしょ
書名	令和元年度 野洲市埋蔵文化財調査概要報告書
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	野洲市教育委員会文化財保護課
編集機関	野洲市教育委員会文化財保護課
所在地	〒520-2492 滋賀県野洲市西河原2400番地 北部合同庁舎2階 TEL 077-589-6436
発行年月日	西暦2020年3月

ふりがな 所収遺跡名等	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
じゅはちだいせき 十八田遺跡	やすしやすあざさだ 野洲市野洲字浅田 1725番地ほか	252107	343081	35° 06' 76"	136° 00' 10"	20180702～ 20180724	244.72	駐車場造成
こしのはらいせき 小篠原遺跡	やすしこしのはらあざひらつか 野洲市小篠原字平塚 2120番地7	252107	343102	35° 06' 68"	136° 02' 42"	20180801～ 20180913	437.40	店舗建設
こしのはらいせき 小篠原遺跡	やすしこしのはらあざしまいだ 野洲市小篠原字下池田 2081番1	252107	343102	35° 06' 81"	136° 02' 47"	20181017～ 20181207	470.00	集合住宅建設
よしじやくしどういせき 吉地薬師堂遺跡	やすしよしちあざにちゅうめ 野洲市吉地字二丁目 1312番地4	252107	342012	35° 10' 48"	136° 00' 90"	20181204～ 20181221	108.00	事務所建設
ゆうひがおかきたいせき 夕日ヶ丘北遺跡	やすしおおしのはらあざいしづけ 野洲市大篠原字石佛 951番地ほか	252107	343005	35° 09' 01"	136° 05' 91"	20190408～ 20190510	309.00	福祉施設建設
げづかいせき 下々塚遺跡	やすしこしのはらあざおおはし 野洲市小篠原字大橋 1089番地2ほか	252107	343101	35° 06' 51"	136° 02' 43"	20190617～ 20190619	42.30	集合住宅建設
おおしのはらにいせき 大篠原西遺跡	やすしおおしのはらあざ 野洲市大篠原字出口 1610番地11	252107	343004	35° 08' 30"	136° 05' 61"	20190801～ 20190807	432.00	工場建設
よしじやくしどういせき 吉地薬師堂遺跡	やすしよしじあざにちゅうめ 野洲市吉地字二丁目 1244番地	252107	342012	35° 10' 35"	136° 00' 99"	20191015～ 20191023	90.00	集合住宅建設
なかはたふるさといせき 中畑・古里遺跡	やすしうきはたあざたかみちした 野洲市行畑字高道下 799番地	252107	343084	35° 06' 11"	136° 02' 51"	20191001～ 20191011	31.50	宅地造成

所収遺跡名等	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
じゅはちだいせき 十八田遺跡	集落跡 その他墓跡	縄文～室町	溝・土坑・堅穴住居	土師器	
こしのはらいせき 小篠原遺跡	集落跡	縄文～江戸	ピット・溝・流路・落込み(洪水痕跡)	弥生土器・須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器・陶器・磁器	
こしのはらいせき 小篠原遺跡	集落跡	縄文～江戸	溝・柱穴・古墳周濠・土坑	弥生土器・須恵器・土師器・埴輪	小篠原1号墳の周濠の続きを検出。
よしじやくしどういせき 吉地薬師堂遺跡	集落跡	古墳～室町	ピット・溝・土坑	須恵器・土師器・黒色土器・陶器	
ゆうひがおかきたいせき 夕日ヶ丘北遺跡	集落跡	古墳～鎌倉	ピット・溝・土坑	弥生土器・須恵器・土師器・黒色土器・陶器・木製品	
げづかいせき 下々塚遺跡	集落跡	弥生～室町	ピット・溝・土坑	須恵器・土師器	
おおしのはらにいせき 大篠原西遺跡	集落跡	弥生～室町	ピット	なし	
よしじやくしどういせき 吉地薬師堂遺跡	集落跡	古墳～室町	溝・土坑	土師器・黒色土器	
なかはたふるさといせき 中畑・古里遺跡	集落跡	弥生～室町	ピット・溝・土坑	なし	

令和元年度  
**野洲市埋蔵文化財調査概要報告書**

印刷・発行 令和2年3月  
編集・発行 野洲市教育委員会文化財保護課  
滋賀県野洲市西河原2400番地  
〒520-2492 TEL 077-589-6436  
印刷・製本 奥野印刷株式会社